
胸の傷と心の傷

乙女一世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胸の傷と心の傷

【Nコード】

N0649C

【作者名】

乙女一世

【あらすじ】

20歳で乳がん手術を受け、右胸を失った遙。結婚を約束した彼も離れてゆき、そのショックから消極的になり、恋に臆病になる遙。苦しみながらも次第に立ち直り、恋に仕事に歩みはじめる。幾度となく試練を乗り越え手に入れた幸せ。しかし、そんな彼女に待っていたものは……。 (「余命1カ月の花嫁」よりも先に書き上げていました。)

第1話：乳がんの残した傷跡

「うつ！ まぶしい。もう朝か。今日はどうしよう?。」

大学を卒業して、やっと入った有名会社を辞めて、早、1ヶ月。

「今日は日曜日・・・そうだ!。」

ベットから飛び起き、集合ポスト目指して、まっしぐら。

そう、ここは、2階建てアパートの203号室。

私、青山遥は24歳独身、彼氏なし1人暮らし。

玄関のドアを開けて、ダダダッ!

階段を下りかけ、見えた!集合ポスト。

「おっと! あぶないっ!。」

階段を危つく踏み外しそうになっちゃった。

思わず手摺に掴まり中腰状態。

すると突然、後ろから男の声が。

『おはようございます。大丈夫ですか?』

うつ、そのアナウンサーのような声の響きは？

201号室のスーツ姿の二ヒルなサラリーマン。

まずい！

私は、パジャマ姿、それも寝起きのままのスッピンで、髪はボサボサ。

むっむっ、胸に視線を感じる。

あっ、ボタンが・・・上から2個外れている！

一番上は、いつもしてないけど、二番目が外れていたとは・・・。

中腰状態の私に、201号室サラリーマンの目は横斜め上にあった。

もち、ノーブラ。

見られたか！？

「おはようございます。はい、大丈夫です。いつてらしゃい。」

と、平静を装い普通にご挨拶。

。このくらいの胸の開き具合であの角度からなら、見えるはずは・・・。

いやいや、あのニヤケ顔は・・・？

あーもう、起きた事は仕方ない。

実は私、胸に問題があります。

「こうしている場合じゃなかったー！」

私は、新聞を取ると、ルパンのような素早さで、ベッドへカムバツク。

目標発見！ 求人折り込み広告！

仕事しなくちゃと思って、何度か職安へも行ってみたけれど、退職する理由となった出来事のショックから未だに癒されていないのと、何がしたいのか自分でも良く分からないのとで、求人情報のウインドウショッピング状態。

ただ、今日はなんとなく気分が違っていた。

昨日、退職した会社の同期だったさゆりから、電話があつたのだ。

「噂を信じて、ひどい事を言つてごめんなさい。」と。

だから、今朝は求人折り込みを広げて、仕事を探す気分になっていた。

「うーん、なんかいいの無いなー。」

貯金も減ってきたし、とりあえず収入を得ねば！

うむっ!?

「派遣、工場内軽作業。 8時〜17時。 月収25万円以上。 土日休み。 残業休出有り。」

うん・・・気分を変えて、少し身体でも動かして、働いてみつか!

あっ? もしかして男だけかな?

まっ、それなら、それで、とりあえず、電話、電話。

あっ! 「受付は月曜9時から。 担当、森川 柳田」

まだ、日曜日でした。

とりあえず顔でも洗おうと・・・。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第2話： いざ面接へ

月曜の朝、いつもの様にのんびりして、時計を見ると、9時ではないか！

電話、電話！

『お電話ありがとうございます。ラッキーワークです。』

「求人広告を見て、お電話したんですが。」

『どちらの広告を、御覧になりましたか？』

「アダムスです。」

『それでは、富士桜工業をご希望ですね。今日、面接に来られますか？』

「はい。大丈夫です。」

など、お話をして、2時に面接を受けることになりました。

なんか急に、緊張感が漂ってしまった。

とりあえずは、持ち物の準備をしてっと・・・。

何着ていいのかな？

やっぱり、真面目に決める？

それとも、バイト感覚で行ってみる？

まっ、工場の派遣だから、普段着でいいかな？

てなことで、黒のジーンズに薄い緑のブラウスに、

グレーのジャケットで決まり。

あーっ、大変！

履歴書、書かなきゃー。

まさか、今日、面接になるとは……。

昨日のうちに用意しておけば良かったー。

おっと、写真もだ〜。

バイクで急いで近くのコンビニへ。

有ったー。履歴書ゲット。

写真は、たしか……。

あそこのスーパーの前に、スピード写真機が有ったっけ？

「うふふっ……あつた、あつた。」

マジ顔は、印象悪いから、ちょっと、乱れを直して、

5 - 3 は？

二ーッ！

「パシャ！」 カ・ン・ペ・キ

さっ、早く家に戻って、履歴書書かなきゃ。

バイクにまたがり、Uターン。

家に戻ると、ダイニングテーブルで、履歴書用紙とにらめっこ。

「なんだか、緊張するー。 あゝもう！ 間違えちゃったー。 履歴書って、苦手。」

少し慌てる事になっちゃったけど、何とか用意も出来て、12時半に出発。

電車に乗るなんて久しぶり、いつもはバイクでブルン、ブルン。

駅から歩くこと10分、目的のビルに到着。

ここ5階かー。

よっし！

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの

です。
)

第3話：緊張の面接

エレベーターに乗り込み、いざ5階へ。

ドアが開くと廊下にドアが4枚。

「さあーどれだ？」

手前から、会社名を確認していくと、最後に残った一番奥のドア。

ドアに数歩近づいて行くと・・・まずい！

緊張のあまり、トイレに行きなくなっちゃった！

振り向くと、運良く反対の端にトイレのマークを発見。

スタスタとトイレに向かって仕切り直し。

「何で私、こんなに緊張してるんだろう？」と急に我に返り、深呼吸。

落ち着いて、廊下を戻ると、ドアをノックして中に！

「失礼します。」

『こんにちは、どちら様でしょうか？』と、可愛い女性の話。

用件を告げると、パーティションで区切られた部屋に案内されて、

中で待つことになりました。

20歳から30歳くらいの男子が5人。

みんな何かを考えている様な、妙な雰囲気。

数分経つと、名前が呼ばれ一人が出て行きました。

別の区切られた部屋で、一人ずつ面接を受けている様子。

そして、新しい男子が2人入って来ました。

4畳半くらいのスペースに5、6人いると、結構つらい。

それに、女は私だけ。「来るところ間違えたかな？」

斜め前の2人が、ちらちら私を見てるのが、やけに不快。

用があるなら、ハッキリ言えっの！

すると、突然。

『青山さん！』

「はい！」

早く着いたこともあって、私が呼ばれるまで、30分くらい掛かりました。

出てみると、そこには、30歳くらいの四角い顔の男がニッコリ。

言われるままに、別室の椅子に座りました。

四角い顔の男は、私の前に座り、履歴書に目を通しながら、

『今までに、派遣や工場で働いた経験はありますか？』

『腰痛や病気とか有りますか？』

『希望することは有りますか？』などの質問攻めの15分間。

『では、今回募集の内容はこちらです。』

どうも機械部品の検査、梱包の様子。

「女性でも、大丈夫ですか？」

『現場の社員に女性が数人いるし、性別を特にうたっていないので、大丈夫だと思いますよ。』

もし、駄目な時は、他にも有りますし、心配は無いですよ。

明日、現地の面接が有りますが、来れますか？』

リズムのある会話につい、

「はい。」と返事をしてしまい、

6ヶ月契約で採用になってしまいました！

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のもので
す。)

第4話：工場見学

さあ、いよいよ工場だ。

今日は、8時半に工場入り口の守衛所の前に集合。

説明を聞いた後に、工場見学、そして、面接。

この面接は派遣先の会社の人によるもので、

まず落とされることは無いらしい。

それから、配属が決まり、ロッカーや、休憩場所を教えられて、

実際の職場に行つて、挨拶と説明を受けて、12時に終了の予定。

電車に乗り慣れない私でも迷う事もなく、ちよつと早く着きました。

居た居た、3人居た、昨日待合室にいた面々。

私の「おはようございます。」に、

皆さん「おはようございます。」の不揃いの返事。

「青山といいます。工場初めてですので、よろしくお願いします。」

の私の挨拶に、皆さん、「僕も初めてです。」と、意外な返事。

へえーそんなもんなんだと、変に感心していると、後から、2人。

自己紹介をしていると、もう1人、やって来た。

その数分後、派遣会社の地域管理者池田さんが来られて、タイムアウト。

私たちを連れて、工場内へ レッツ ゴー！

まずは、製品の置いてある所に行って、作っているものの説明を受けました。

そして、ヘルメットに安全メガネなるものをして、いよいよ見学に出発！

敷地はかなり広く、建物も沢山有って、はぐれると迷子になるのは必死。

歩いて最初に気がついたことは、ニオイ！

鉄の焼けたよなニオイと、油のニオイ。

場所によつては、かなり臭う。

一日中居ると、慣れるか、気持ち悪くなるかのどちらか。

臭いに負けて、辞めて行った人もいると、地域管理者の池田さんが言っていました。

私は、きつい香水よりも、こちらの方がいいかも。

あとは、音。

これも、場所で差が有るけど、慣れるか　ちょっと心配？

希望すれば、あちこちに配置は有るようだけど、

何をしているのかサッパリの私は、どこでも同じ感じ。

作業工程や製品の種類によって、建物が違うようで、

技術や経験の必要な製造部門と、

慣れれば出来る組み立て、検査、梱包部門に大別されてる様子。

女性が居たのは、組み立て、検査、梱包部門で、たぶん私もこちらになりそう。

ざっと見ただけの、工場見学は終了です。

次は問題の面接だー！！

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第5話： 2度目の面接

工場見学が終わると、私たちは、会議室に案内されました。

部屋の中央に幾つか長机をくつつけて、両側に椅子が並べてある普通の会議室。

『15分間、休憩します。』

地域管理者の中村さんは、こう言うと、面接官呼びに部屋を出て行きました。

みんなはトイレに行き、戻ってくると仲良くなった人同士で、おしゃべりをしていました。

しばらくすると、中村さんと面接官が部屋に入ってきました。

中村さんは、窓側に私たち7人が座るように指示して、

面接官4人と中村さんは、反対側に座りました。

『それでは、面接を始めます。こちらは、総務係長の山村さん・・・』

と、中村さんが紹介を始めました。

『では、名前を呼ばれたら、手を上げて返事をしてください。』と、続けました。

まさか？ このまま面接をするの？

プライバシー無いじゃん。 うっそー！

と、私は、何か悪い予感がしました。

そして、そのまま面接が始まりました。

『では、池田さん』

「はい」

面接官4人が、履歴書を見ながら、次々と質問を飛ばしました。

『お父様は、おられないのかな？』

「はい。僕が、中学生の時に離婚しました。」

『そうですか、前の印刷の仕事は、半年で辞めてますが、どうしてですか？』

「自分に合っていない気がしたのもですから。」

『どんなところがですか？ この仕事も、そう感じたら、すぐ辞めてしまいますか？』

と、いった具合に、皆の前で遠慮なく進められました。

住んでいる場所、趣味特技、資格、職歴など・・・

みんな答えているけど、平気なの？

変な質問されたら、どうしよう・・・と、私は心配しました。

そして、とうとう、私が呼ばれました。

幾つかの質問があり、気にしていた質問がされました、

『大学出てYTT会社に就職したんですね。どうしてこんないいところ辞めちゃたの？』

私は、なんて言おうか、すごく迷ってしまいました。

色々嘘も浮びましたが、何かせかされている様で、結局本当の事を言ってしまいました。

「上司にセクハラをされて、続けるのが嫌になりました。」

みんなが、私を見ている気がして、逃げ出したくなりました。

うつむき加減の私に、その面接官は続けて

『どんなことを、されたんですか？』

もーいい加減にしてよ。心の中で叫んだのですが・・・

言葉が出てきません。

答えなきゃいけないの？

私が、答えに困っていると、

『こんなみんなの居る前で、そんなことを聞くのは、セクハラじゃないんですか？』

昨日、派遣会社の面接控え室で、私をちらちら見ていた人（池田さん）が、

そう言ってくれました。

でも、そんなこと言っちゃたら、君、面接落ちちゃうよー。

すると、面接官は、質問を次の仕事のことに変えました。

『では、次に配達の仕事をして、半年くらいで辞めてるのは、どうしてですか？』

えーっ。またこんな質問……。みんなの前で、やめてくれー

そして、いくつかの質問が続き、私の番もやっと終わりました。

次の人にも、その次の人にも、同じような質問を繰り返しました。

面接が始まって1時間半程が経ち、時間以上に息苦しかった面接も全員が終わりました。

面接官は相談のために別室に出て行きました。

私は、池田さんのところに行って、

「さつきは、どうもありがとうございました。」と、お礼を言いました。

『あんなこと言うなんて、どうかしてるよな。』と、池田さん。

「でも、あたしのせいで、落ちちゃったらどうしよう。」

『そんなの気にすんなよ。こんなところ、こっちが願ひ下げだね。』

隣にいた小林さんが、同感したように言いました。

『みんなの前で、面接なんておかしいよな。』

何人かが、『そうだよ。こんなの聞いたこと無いよ。』と、言ってくれました。

私の目に涙が浮かびました。

『今日終わったら、みんなでカラオケ行って、スカッとしなない?』と、池田さんが言うのと、

『そうだね。』 『1日かかると思ってたし。』

『俺も暇だし。』と、あっさり決まっしまいました。

しばらくして、ドアが開き、面接官が入って来ました。

そして、全員の合格が告げられました。

「良かったー。」と、私は胸を撫で下ろしました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第6話：私の秘密

私は、この面接で忘れようとしていたことを、思い出してしまいました。

そう、OLを辞めることになった、私の中の大きな事件です。

あれは、数年前、私がある有名な会社でOLをしていたころです。

毎日遅くまで残業が続いた年度末の忙しい日々も終わり、

打ち上げ会のあった数日後のことでした。

隣の課の同期のさゆりと、帰りにお茶した時です。

『ねえ？ 遥の胸って偽物なんだって？』

「えっ？ どうゆうこと？ 何でそう云うこと言っの？」

『だって、みんな言ってるよ。男の注目引きたくて、中に入れて大きく見せてるって。』

「えっ・・・」

『高田係長（遥の上司）がその罫に掛かって、だまされたって言うてたらしいよ。』

遥が、高田係長と付き合ってたなんて知らなかったよ。

ましてや不倫してるなんて、びつくりだよ。

ほら、こんな写真もあるし。』

さゆりが、携帯電話の画面を私に向けました。

そこには、高田係長が私にキスをしている画像がありました。

私は、目の前が真っ白になり、すごく動揺しました。

会話も続かなくなり、さゆりとはすぐに別れて帰りました。

その日の夜は、色々考えて、ほとんど眠れませんでした。

次の日、会社に居ると、みんなが私を変な目で見ているような気がして、

たまりませんでした。

隣に座っている仲のいい岡田さんに、仕事が終わったあとに、

色々聞いてみることにしました。

『この写真のこと？これは玉田が撮ったんだよ。

あいつ面白がって、みんなに見せたり、転送したりしてたな。

2人が付き合ってるなんて、勘違いするやつも出てきちゃったみたいだね。

撮ったのは、打ち上げの時点で、お前がぐっすり寝ちゃってさ。

まっ、みんな寝不足が続いて頭がおかしくなってたし、酔っ払ってたし。

係長、お前のこと気に入ってたみたいで、寝顔を見たらキス始めっちゃってさ。

そこで、玉田が、携帯電話でパシヤリ！

その後も、おーおーって、はしゃいでたら、

係長、調子にのって、お前の胸をブラウスの上から触りだして・・・。

さすがに、俺たち、『まずいですよ、係長！』と、止めたんだけど・・・。

『なんか変だぞ。触ってみろよ。』と、言うんで、玉田が触ったんだ。

すると玉田が、『何だよこれ、ニセモンだよ。』

結構でかいと思ってたのになー！。

あっ！でも、こっちは、本物だ。

かたちんばじゃん！！ハハハッ（笑）』と、言い出して、

どれどれと、係長は、お前のブラウスのむなもとを持ち上げて、のぞこうとしたので、

鈴木さんが、『もう辞めましょう。こんなことして恥ずかしくないんですか?』と、

言い出して少し口論となつてさ。

僕と水野さんも止めに入って、段々と騒ぎになって、

お前も目を覚ましたから、お開きになったんだけどさ。

やっぱり、お前、憶えてないんだ?」

私は、愕然としました。

立ち上がれなくなり、声も出せない状態のまま、

岡田さんにタクシーで送ってもらいました。

部屋に入ると、そのまま泣き崩れました。

それから、2日間会社を無断で休み、

3日目の朝、退職願を出しに会社しました。

止めてくれる人もいましたが、この課の部屋に入るのが、

この空間に居ることが、私には耐えられませんでした。

それからというもの、何日も閉じこもり、立ち直るまで大変でした。

私の右胸は、20歳の学生の時に乳がんで、乳房全摘出手術を受けていました。

10センチほどの傷が残り、乳首は無くなり、ペシャンコになってしまいました。

以上が、私がOLを辞めることになった、私の秘密です。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第7話：ユニフォーム

面接が終わり、配置が発表になりました。

その時、気づきましたが、面接官は、空きのある各部署の係長だったのです。

そして、私の配置された部署の係長は、なんと、なんと……。

『青山さんと中根君、こちらに来て。』

うっそー！

あのセクハラ質問のデリカシーナッシングな新井面接官でした。

『これから、ロッカーと作業場所に行くからついて来て。』

なんか、イヤーな空気。

ロッカールームに着くと、新井係長は一つのロッカーを開けて、

ユニホームとエプロンを取り出しました。

ユニホームを広げて、私を見ながら言いました。

「このくらいかな？ 念のためにこれも。ロッカーは、こっち。

着たら、階段下に来て。」と言い残し、ドアの外で待っていた中根君を連れて、

1階にある男子ロッカー室へ降りて行きました。

私は、ユニホームを見て、

「なんか、お菓子屋さんみたいで、可愛い。」と思いました。

上は、白地に薄いピンクのストライプが縦に入っていました。

下は、白のズボン。

「まずい！」

思いのほか薄手なものでした。

こんなこと、考えていなかった私が馬鹿でした。

今日は、濃いブルーのパンツをはいていました。

どう考えても、透けてしまう！

どうする？ どうする？

「前はエプロンで隠れるけど、後ろは・・・。

脱いじゃう？ なんてでも、やっぱり、それは・・・。」

結局、大き目の方を着て、上のシャツを腰の外に出して、

何とか、お尻半分ちょいくらいまで隠れました。

「今日は挨拶だけだから、しょうがない。何とかこれで・・・。」

下に降りると、2人が待っていました。

新井係長は、私を見ると、『上のシャツは、ちゃんとズボンに入れて。』

「ガーン!!」

なんで今日は、こんなことばかりなのー!

仕方なく、ズボンに押し込みました。

係長は、私を見て、気づいたらしく、

『今日は、挨拶だけだから、出していいや。明日からは、ちゃんとしとけよ。』

「はい。すみません。」

そして、持っていた雑誌大の茶封筒を、入っていた履歴書のコピーなどを取り出して、

『これあげるから』と、私に手渡しました。

これで隠せという事? 案外、デリカシーあるじゃん。

色々な場所の説明も受け、無事挨拶も終わり、解散となりました。

『あつ！　ちよつと待って！』と、係長の声。

『昼飯食べて行くんだろ？　これで、定食を食べれるから・・・』

社員食堂の食券を2人に、渡してくれました。

「ありがとうございます。」

『はい、お疲れ！　明日から頑張つて！』

あー疲れた！

(つつく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第8話：カラオケ

私と中根君は、せっかく食券を頂いたので、食堂に行きました。

セルフサービスで、勝手が分からなかったのですが、

なんとか前の人のをまねて、定食を食べる事が出来ました。

食堂はかなり広いのですが、人も凄く多く混み合っています。

耳をすませてみると、日本語以外の言葉も行き交っていました。

数力国のかなり多くの外国人が、働いているようです。

食堂を出て、集合場所に行こうとすると、中根君が帰ると言い出しました。

どうやら、カラオケや宴会は、苦手なようです。

私も、あのタイミングだったので、行く気になったのですが、

あとで考えてみると女の子が1人だけには抵抗を感じました。

集合場所に着くと、池田君、小林君、丸山さん、山川さんが、居ました。

『おせーよ！ 何してんだよ！40分も待つちまったよ。』

「えっ！そんなに？」

『連絡のしようがないから、待つしかないだろ！メルアドか、番号教えるよ。』

怒ってるような池田君の勢いに負けて、教えることに。

結局、全員の交換をすることになってしまいました。

『もしかして、めし食ってた？』

「うん。」

『カラオケ行くのに？』

「あつ、そっか！」

『まつ、いいけどさ。中根は？』

「カラオケは好きじゃないんだって。」

『あいつ、とぼけやがって。』

「えっ？」

『あー、こつちの話。岩田は、人が足りなくて、

そのまま仕事になったから、来れないってさ。』

「そーなんだ。いきなり仕事なんて大変だね。」

私たちは、歩いて駅の近くのカラオケ店に向かいました。

カラオケ店に入ると、みんな食べ物注文を始めました、それも結構沢山。

（おいおい、会計はどうするの？ 私も食べなきゃ良かった。）

『飲み物は、どーする？ 全員ビールでいい？』

「待って、私は、飲めないから、レモンスカッシュにして！」

『なんだよ。まじかよ。酔っ払って欲しかったんだけどなー。』

「ごめん。ホントに飲めないの。」

（嘘でした、あの日以来、男の人の前では、お酒は飲まない事にしました・・・。）

『それじゃー。みなさん！』

あのうつとうしい面接をよくぞ耐えて、合格しましたー。

明日から、少しだけ頑張ってみましようかね！ 乾杯ー！』

乾杯をしてから、配置先や仕事の話で盛り上がり、

料理も来て食べ始めたこともあって、約1時間半は、

マイクを持つ人はいませんでした。

（こんなの、はじめてだー！でも、いいのです。

どちらかと云うと、私は、「歌いたくない派」ですから。）

『そろそろ、誰か歌わない？』

ついに、山川さんが、言い出してしまったー。

『それじゃー、早園麻紀ちゃん。行ってみようー！』

池田君とつるんでる小林君が、言いました。

えっ！ みんな、私を見ている？

『分かってないの？ 青山さん。』

歌手の早園麻紀ちゃんにそっくりじゃん。

なんか歌ってよ。』と、小林君。

（早園麻紀は、兄貴が大好きだったので、知らなくは無いかれど、

自分が似てると言われるとは・・・。）

『何やってんの？ 歌ってよ！』と、言いながら、

池田君が隣にやって来て、私の髪を掴んで持ち上げたー！

（何やってんの！！は私のセリフよー！！）

『すげー似てる。』とは、小林君と山川さんの声。

（あー、あの髪型を再現してみたのね。そっか。

そっかじゃーない！ 会ったばかりで、なれなれしいんだよー！
！）

「そこまで、言われたんじゃ、早園麻紀さんの「夏が来た」歌いま
ーす！」

私が歌いだすと、池田君と小林君がノリノリで、踊りだしました。

どうやら、この歌のPVの内容を再現しているとのこと。

2人は、大の早園麻紀ファンで、私が似ているということで、

面接の時に私を見ていたのです。

私が終わると、隣から順番に歌っていきました。

みんなすんなりカラオケに来るだけあって、すごく上手でした。

そしてこのあと、私はちびるくらい、びっくりしたのです。

「丸山さんの番だよ。 たしか、趣味 バンドだったよねー、聴きたいなー！！！」

『しょうがないか……。』

「わーっ！この曲は、私の大好きなバンドのレインボー！！」

「なっ、なんて、うまいの！　まるで、本人が、歌ってるみたい！」

「周囲からも、『すげー』の声。」

今の今まで、無口で存在感が薄かった丸山さんが、マイクを持ったら、スターになっちゃった。

「もーほんと、びっくり！　一体この集団は　なんなのよ！

世の中のレベルは、こんなに進化していたのかー。」

そして、また私の順番が回ってきました。

今度は、自分の好きな歌を思いっきり歌いました。

そしたら、みんながやけに感心して、盛り上げてくれました。

おのおの自慢の歌を披露して、あっという間に、時間は過ぎて行きました。

そして、4時間が経ったところで、おひらきとなりました。

立ち上がる間に、隣に居た丸山さんが、耳元で、

『案外、歌、うまいじゃん。』

と、言ってくれました。

大好きなバンド・レインボーの曲を、まるで本人かのように歌って、すっかり聴き惚れていた私は、その言葉に何か熱いものを感じていました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第9話：初仕事

『起きろー！遅刻するぞー！』（めざまし音）

「ムウ、ムウ、もう朝か！何で朝って早く来るんだろっ？」

おーっ！ こうしてはいられない、急がねば！

40分で準備完了！

モルモットのリリックに、「行ってきたーす。」と、しばしのさよなら。

駅まで歩いて、15分。（また、満員電車の毎日か。嫌だな。）

大きな駅で乗り換えるのが大変！

（おいおい、そんなに押すなっば・・・あゝつぶれる。）

（ウムツ?? だから、電車って嫌なの!!

ちよと後ろのおじさん、股の間にかばん入れてこないでよー、もー！！）

口に出して言えるわけも無く、私が降りるまでの20分間このままの状態。

OLの頃は、こんな電車通勤の毎日だったけど、

夕食配達の仕事ではバイク通勤だったので、

チカンの悩みからは、開放されていたんです。

しかし、今日また、この世界に戻ってきてしまった。

駅を降りると、歩いて20分。

バスも有るけど、待ってる間に、半分以上行けちゃうので、

ほとんどの人が歩いてます。

「やっと、門に着いたー！」

通門証がまだ無いので、ノートに名前を記入して、中へ入りました。

新たな1歩です。

更衣室へ行き、お菓子屋さんのようなユニフォームを着て変身！！

失敗は繰り返すまいと、昨日の帰りに、白パンツ購入。

なんか、高校生の頃を思い出すなー。

いよいよ、職場へ。

「少し早すぎたかな？ 誰も来てないや。うんー、掃除でもしてよ

つと。」

ほづきを持ち、ハキハキ、10分。

みんなが、そろそろ登場。

好感を持つてもらわなきゃ！

全力の笑顔で。「おはようございまーす。」

そして、朝のミーティング開始。

挨拶は昨日してるので、今日1日教えてくれる山口さんを紹介されました。

ミーティングが終わり、そばに行くとき……。

小柄でちょっと太った50歳くらいのおばちゃんです。

「おはようございます、よろしくお願いします。」

『おはようは、1回でいいです。』

同じことは2度言わないから、私のやることは、良く見ていて……！

あゝ苦手なタイプの感じがする……。

ちよつと憂鬱だよ……。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のもので
す。)

第10話：私のこと好きなの？

私は、山口さんの横に立って見ていました。

製品が流れてくるのを、次々に箱に詰めていく仕事。

製品の種類によって、箱への並べ方や、箱の種類も違う。

全てのパターンを覚えるのには、1ヶ月くらいかなー？

『大体分かったでしょ？ 横で一緒にやってみて！』

「はい。」

3分位して。

『あんだ、遅いよ！』

ここまで溜まると、センサーが反応して、ラインが止まるんだよ。

そしたら、上から怒られるんだから、

もっと、早くやらないと一人じゃ出来ないよ。』

「はい、すみません。」（おー怖わ・・・。）

5分の休憩になって、外に出たら、ベンチで中根君がタバコを吸っていました。

「そっちの調子はどう？」 私は声を掛けてみました。

『今日のパンツは何色？』

「ムカツクー。」

『ごめん、冗談だよ。仕事は大した事ないけど、油の臭いがな！。』

昨日のカラオケどうだった？』

「みんなうまいの！ びっくりだよ。特に、丸山さんは、凄いよ！」

『あゝ。あいつは、バンドでボーカルやってるしね。』

「えゝつ、知ってるんだ？」

『前に居た印刷屋と一緒に辞めて、ここ受けたんだ。』

「そーなんだ。」

『今度、朝日ランド遊園地でライブやるから、行けば？』

「行く行く。ねー、みんなで行かない？」

『あつ、時間だ。』

「えっ？ もう。」

仕事は、さっきの繰り返し。

製品の大きさが色々で、結構重い物もあり、手が疲れる。

両手で掴んで、どんどん入れないと間に合わない。

パターンを考えている暇なんてない。

機械に操られている私。

そうこうしている間に45分の昼休み。

ほんと、出来る時間。

勤務時間がグループによって分かれていて、

まだ、昼休みにならないグループもいる。

つまりは、ラインを止めないわけだ。

中根君と食堂に行くと、入り口のところに、見たことのある面々が・
・・。

『よー、仕事はどうよ?』 池田君だ。

「うん、まあまあ。」

『セルフのやり方が分かんなくてさ、きのう青山、食ったって言う
てたから、

教えてもらおうと思って、みんな待ってたんだ。』

「うそつけ、そんなにむずかしことじゃないし、見れば分かるじゃん。」

『まっ、そう言わずに、みんなで食おうぜ。』

みんなで、食べながら自分たちの話をしているなか、私が割って入りました。

「あつ、そーだ、丸山さん。来週の日曜日、朝日ランド遊園地でライブするんだって？」

『あゝやるよ。』

「ねえ、みんなで行こうよ！」

『おゝ、行ってみつか。』とは、池田君。

『OK。』

『遊園地か・・・最近行ってねーな！。』

『別に用事ないし。』

「よし。決まりね。」

『そーだ。まる、あした誕生日じゃん。』と、中根君。

「えーっ！ うそー プレゼント用意しなきゃ。」

『その気も無いくせに……。』

「そんなことないよーだ。」

『それじゃ、携帯電話に付いてる、イルカのストラップくれない？』

「あゝこれ？ まゝ、いいつか。あげるよ。はい。」

『サンキュー。』

『いいな。いいな。丸ちゃんいいなー。俺、今日誕生日なんだ。』
と、池田君。

「ウソばかり。」

昼休みも終わり、みんな各自の職場に戻って行きました。

『そろそろ、慣れてきた？』 と山口さん。

「はい、少し。」

『それじゃー、こっちでやって。 私が居ないと思って、全部やってみて。』

「えっ！まだ無理ですよ！ 詰め方のパターン、分からないです。」
『教えるから、やってみて。』

「はい。」（あゝ緊張する）

それから、2時間、何度も注意され、ときどきしながら、何とかやって、10分の休憩になった。

さっきのベンチに行くと、中根君がタバコを吸っていました。

今度は、彼から声を掛けてきました。

『よっ！ お疲れ顔だね！』

「あゝ、疲れた」

『明日は、そっちと交代みたいだよ。』

「ほんと？ むずかしいの？」

『いや、簡単だよ。』

「あつ！、時間だ。」

それから、5時まで、

『ほら、それ違う！』

『なんで、そんな持ち方するの！』

『遅い！ もっと早く！』

『さっきやったでしょ！』

怒られて、ばっかり。

かなり、へこんでしまった。

『はい、時間だから、係長に挨拶して帰っていいわよ。』

「お疲れ様でした。有難うございました。」

『頑張ったわね。明日も来るのよ。』

「はい。」

着替えを終えて、更衣室から出てくると・・・。

「いたゞ。池田君！！」

『お疲れ！ 一緒に帰ろうぜ！』

「はっ？ まっ、いいか。」

駅まで、20分。

池田君の好きな歌手・早園麻紀の話やら、趣味や前の仕事の話などをして歩いた。

駅に着くと、池田君は、私の顔を見て、

『ねえ、一人暮らしなんだろう？ 飯食って行かない？』

「今日は疲れたから、遠慮しておく。」

すると、池田君は、私の手を引いて、いきなり歩き出した。

「エッ！！ なに？ ちょっと・・・。」

（もー君は、本能のまま行動してるの？ 少しは考えろってば！）

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第11話：帰り道

「ちょっと、離してよ！ 痛いよ！」

50メートルくらい引つ張られただろうか・・・。

『ここなんだけど、ビーフシチュー凄く旨いだ！』

「私、帰る。さよなら。」

『なんで？ 食べて行こうよ、俺おごるからさー。』

「私、相手の気持ち考えないで、自分のしたいようにする人は嫌なの。」

『それは、青山の方じゃないのか？』

「どうして？」

『面接の時、俺が割って入って、助かったんじゃないの？』

そのあとだって、40分も待たせたから、

みんな帰るっていうのを、なだめて、引き止めてたし。。。

カラオケだって、俺がかまってやんなかったら、

女一人だったし、黙り込んでつまんなかったんじゃないの？』

「なによ・・・大きなお世話よ！ 私のこと好きでもないのに、ほつとしてよ！」

『俺、お前のこと好きだよ。初めて見たときから。』

「なに言ってるの？ 適当なこと言わないでよ！」

あなたが好きなのは、歌手の早園麻紀でしょ。私が、ちょっと似てるからって、迷惑よ！

それに、私のこと本当に好きになってくれる人なんかいないわよ。」

『待てよ！ なんだよそれ、どういう意味だよ・・・。』

私は、小走りで改札へ向かった。

止まっていた電車に乗り込むと、ドアのすぐ脇の席が空いていたので、

腰掛けると目を閉じて、さっきの事を思い出していました。

「どーして私って、あんな事を言っちゃうんだろう？」

きつと、2人だけになるのが怖いんだろうな。

『みんなで・・・』が、口癖になってる私。

こんなこと、いつまで続くんだろう・・・。」

『よっ！ 青山さん！ 何悩んでんだよ。』

横を見ると、中根君が、座っていました。

「あつ、中根君！ どうして居るの？」

『どうしてって、青山さんが隣に座ってきたんじゃないの。』

「そっか！ …丸山さんと一緒じゃないんだ。」

『奴は、バンドの仲間が車で迎えに来てたから、多分練習だな。』

「そーなんだ。青春してるんだね。」

『青山さんって、彼氏とかいるんだろ？』

「何よ、突然！ そんなのいないわよ。」

『うそっ！ どーして？ 理想高けーんだろっ。』

「そんなことない、本当に好きになってくれる人がいないだけ。」

『えっ？ おかしいなー？ 体に欠陥でもあるんじゃないの？』

私の表情を見て・・・

『あー、「冗談」、「冗談！」』

（このー！ 「冗談になってないんだよー！！」）

彼は、先に電車から降りて行きました。

なんか、勘付いちゃったかな？

変な噂が立たないといいんだけど・・・

私は、いやおうなしに、彼を気にするようになってしまいました。

第12話：丸山さんからの誘い

朝、目が覚めると、昨日の仕事の気疲れと、

ほとんどその場に立ちっぱなしで、手が動きぱなしの慣れない体の動きで、

すごーくだるい。あつゝ。

それでも時間は、過ぎて行くゝ。

急がねば！

混んだ電車に身をまかせ、ゆらりゆらりの苦痛な時間。

よたよた歩いて、やっとロッカールームに到着！

「あつ！誰がいる。」

同じ列の5個くらい隣・・・ギョ・・・山口さん！

「おはようございます。」

『おはよう。』

「いい天気ですね。」

『どこから来てるの？』

「横浜です。」

『そう。1時間くらい?』

「駅から坂を少し歩くので、1時間20分くらいです。山口さんは?」

『私は、近くの小川町で、原付バイクで10分。』

「原付いいな。私、バイク好きなんですよ。」

『あんたも、バイクで来ればいいじゃない?』

「えっ、いいんですか?」

『協力企業の方は、許可書要らないし、バイクの人多いよ。』

「ほんとですか? それじゃ、うちの会社の管理者に聞いてみよう。」

『あんだ、胸がどうかしてんのかい?』

「えっ?」

『なんか、隠して着替えてるからさ。気にしてたら御免よ。』

でもさ、これ見てごらん。』

山口さんは、私の方を向いて、おなかを指差した。

そこには、10センチ以上の大きな傷跡があった。

『胃がんで胃を全部取ったんだよ。どうだい、結構ひどいだろう？』

「あゝ何と言ったらいいか。」

『ハハハア（笑）正直だね。』

でもね、こんな風に、相手が気に掛ける前に、

自分から言ちゃうと、気が楽だよ。相手がどう思おうとね。』

「うゝん。そうですかゝ。」

あゝ、朝から、濃い話をしてしまった。

でも、私のは、男子に簡単に言えるところではないよ。

増してや、自分から言っなんて、ありえないっの！

朝会が終わり、係長に呼ばれて、変な機械の前にやって来た。

『今日は、これを買ってもらっから。やり方は・・・・・・・・・・。』

「はい分かりました。」

これが、昨日、中根君がやってたやつね。

どれどれ・・・と、30分くらい何とかやっていたんですが、なかなかうまくいかなく

なつて、色々考え始めていました。

そんな時、正面から、中根君が歩いて来ました。

『どうした？ うまくいかないの？』

「大丈夫なの？こんなところ来て？」

『あー、品物換えて、ライン切り替えてるから、箱取りに来たんだ。』

彼は、私の手の動きを見て、上手く出来ないのが分かったらしく、私の横に付いて教え

てくれました。

『んーこれをやる時は、ここに合わせるんだよ。』

「ワッッ。すごいね。分かるんだ！」

『きのう、やってたからね。』

でもさー、今日は、仕事よりも山口のおばちゃんの方が大変だよ。

青山さんは、良く1日耐えられたな？』

「そーね。怒りすぎよね。でも、悪い人じゃないみたいよ。」

『そーかー？ 遅いと、また言われるから、俺、もう行くわ、じゃー！』

「うん、ありがとう。」

彼のお陰で段々と要領も分かり、リズムに乗れるようになってきました。

「キンコン・カーンコーン♪」

昼休みになり、私は中根君を誘い食堂に行きました。

昨日の事もあり、池田君が待つてるんだろうなーと思うと、少し気が重くなってきました。

ところが、食堂に着くと、みんなの中に池田君が居ませんでした。

「あれ、池田君は？」

『休みだよ。 風邪ひいたとき。』

「そーなんだ・・・。」

（本当に風邪？まさか、きのうのことが原因じゃないよね・・・。）

池田君がいないと、みんなの会話がなんとなく弾まない。

午後の仕事も、午前と同じで、1日中機械と向かい合っていました。
昨日の山口さんに比べれば、疲労度は半分といったところ。

終了のチャイムが鳴り、更衣室で着替えてから外に出ました。

池田君が待っているわけもなく、一人で歩き出していると、

大好きなレインボーの着メロが鳴り出した。

「丸山さんからだ！　もしもし・・・。」

『土曜日に、カラオケ行かない？』

「みんなで行くの？」

『いや、バンドのメンバー2人と俺と青山さん。』

「私の知らない人達なんだね。悪いけど、気乗りしないなー。」

『じゃー。池田、誘っていいよ。』

「ちょっと、けんかしちゃったから・・・。」

『そうなんだ。それじゃー・・・中根誘うから、いいだろ？』

昼12時に、この前のとこね。絶対来てよー!』

（ガチャ）

「あっ！ ちょっと、待ってよ！ 行くなって言っていないよー。」

わっ！ どーしよう・・・。

でも何で、誘われたの？ 困ったよー。

第13話：変なカラオケ

ここは、カラオケ店の前、土曜日の午前11時40分。

「あゝ来てしまった。かつこいい男の誘いに、弱い馬鹿な私。」

でも、あと1歩が出ない私は、ここまで来ていながら、悩んでいる。

「んゝどうしたものか？ 涼子を誘うか？

あゝもゝ、今頃何を考えているの、私は！」

『何してるの？ こんなところで？ さゝ行こうぜ！』

・・・し、しまった。後ろから、中根君が来るとは、なんと、不覚な！

背中を押されて、店内へ。

ギョーー 丸山さんと、バンドの派手なメンバー2人を、発見！！

『よっ！青山。 休みなのに悪かったね！』

「いいえー。どーせ暇ですから・・・。」

『そーなんだ！ 彼氏とかいないんだ。』

何よ！その対応は！ 社交辞令だつーの！！

『えー、こつちが、浅野。あつちが、沼田。』

予約をいれていた様子で、すぐに部屋に入れることに。

私は、一応警戒して、ドアの近いところに着席。

いつも無口の丸山さんが、何か違う。

『中根、なんか適当に注文してくれよ。』

すると、中根君は、慣れたような返事で応えた。

『はいよ!』

中根君は、みんなに聞くことも無く、次々と注文を始めた。

不思議だなーと思っていた私に、突然、丸山さんが声を掛けた。

『さーで、青山さん、いつてみよーか!』

「えっ? 私? この前、中根君居なかったから、中根君の聴きたいな!」

『中根はいいから、青山さん、この前の早園麻紀、歌って。』

「でも……。」

オケが始まってしまい、歌わずにはいられなくなり……。

「・・・浜辺通に、車止め・・・」

何やら、3人で、ヒソヒソ話。

『青山さん？ もっと、ロックしてるの、歌えない？』

「ん、何だろう？ そーだな？ 色瀬マミの ブラックストーン
くらいかな？」

また、オケが始まってしまい、歌ってしまった。

浅野君が、マジ顔で言いました。

『ついていけないーちよつと、難しいかな？』

「いったい何？ おかしいよ、この状態。」

『他に何かないかな？ 本見てみて！』

なぜか、言われるままに、探してる私。（私も、おかしい？）

「あつ！ これは？ ラベッカのフレンディー」

『おーいいねー、いつてみようか？』

またまた、オケが、鳴り出して、歌ってしまう私。（変だよ！絶対
変だよ！）

『ん、いいかしんない。』

沼田君が、持っていたエレキギターをケースから出した。

『青山さんは、楽譜読めんの？』

「ん〜ん〜、読めない。」

『まー、いいや。もう1回、いつてみよう。』と、丸山さんは言う
と、

携帯電話で話し始めた、『譜面、すぐ持ってきて来れる？ んん、場所
は。。。』

またまた、またオケが始まり、歌い始めると、沼田君が、ギターを
弾きだした！

アンプがないので、シャカシャカ音だけど、うまい！

ドアが開き、食べ物 came たので、一旦休憩？

みんなが食べてるときに、譜面のコピーを持って、塚田君、登場も
すぐコーナー。

「こんにちは。」

「さよなら。」（絶対おかしいってば。。。）

『じゃー、始めるか。 青山さん、歌って！』

私が、歌い始めると、「くちーびるを 合わせた日は〜」

譜面を見ながら、『違うよ。そこは、こう・・・もう一度』と、アドバイス。

こんな繰り返しで、かれこれ20回くらい歌わされたあゝ。

『何とかなるね。』と、浅野君が言うと、やっと私の番が終わった。

私は、何がなんだか分からずじまいで、疲れたあゝ

「ねー、いつたい、何なのこれ？ 君たちは全然歌ってないじゃん！」

丸山さんが、やっとその気になってくれたようで、

『レインボーが、好きなんだっけ？ それじゃーこれいくか。』

と、腰を上げてくれた。

それから、丸山さんがレインボーの曲を続けて3曲歌い、大感激してしまった私。

そのあと、中根君が、サザンバードを歌ったらしいが、全然耳に入っていない私。

あゝまずい！ 私の心がときめきだしてるゝ♪

もう、前半の変な状態なんか、どうでもいい！

彼の歌をもっと、聴きたい！

ライブ 絶対行くぞー

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。)

第14話：ハンディキャップ

休みも終わり、月曜日の朝がやって来ました。

コーンフレークに牛乳をかけて、パクパク！

いやゝな満員電車で揺られて、コツコツ歩いて、工場にたどり着き、ロッカーに行くと、イタゝ 山口さん！

「おはようございます。」

『おはようございます。疲れは取れた？』

「はい、何とか。」

『そう、中根君だっけ？ あの子、仕事速いわよ！負けないように頑張るなさい！』

「はい、頑張ります。」

（もゝ。何で、私と比べるかなゝ。）

朝会が終わり、今日は違うことをやるようで、係長に北村さんに付くように言われた。

「おはようございます。よろしくお願いします。」

『・・・・・・・・』

あゝ「おはようございます」を2度言ったから、いけないのかな？

『・・・・・・・・』

あれ？ そうじゃないみたい。

北村さんは、手を色々動かしている。

もしかして、手話？

そう、北村さんは、しゃべれませんでした。

「ごめんなさい。私、手話わからないの。」

北村さんは、笑顔で、そんなのいいの！いいの！という感じで手を振った。

北村さんは、50歳くらいで、中肉中背の綺麗な人です。

笑顔から察するに、優しそうな感じのいい人です。

その北村さんに仕事を教えてもらって、何とか出来る様になりました。

もしかして、話の出来る人に教えてもらうよりも、良く分かったかかもしれません。

「人にとって、言葉が悲しいほど重要なものでない。」ことが、分

かった気がします。

2人で、1時間くらいやっていたら、山口さんが現れました。

まるで暗い雲が、空を覆った様に、重たい雰囲気に包まれました。

山口さんは、怖い顔で声に出しながら、北村さんに手話で話し始めました。

『あなた、今日は、その品物じゃないでしょ！ この品番でしょ！

昨日言われたでしょ！ しっかりしなさいよ！』

北村さんは、「そんなこと、聞いてない。」という感じで、返していました。

『そうやって、あんたは、いつも知らない振りするんだから。

ちゃんとやりなさいよね！』 そう言うと、山口さんは、「ぷいっ」と、行ってしまった。

北村さんにも不満げな顔をしていましたが、私を見ると笑顔を返してくれました。

北村さんの手振りを見ると、

（彼女は、いつもあんなだから、頭に来ちゃう。でも、気にしないの。）と、

言っているように思えました。

なんか凄いものを見たような感じを受けました。

小さな頃から、障害の人が居たら親切にしなければいけないと、

教わってきたような私は、山口さんの言動にショックを受けました。

でも、山口さんのように、北村さんを特別視しない方が正しい気もするし、

20年以上も一緒に働いて来たのだと聞くと、それが当たり前のことなのだと、

納得することにしました。

（キンコン、カンコーン♪）

そうこうしていると、昼休みのチャイムが鳴りました。

私は中根君と食堂に歩き出しました。

食堂に着くと、今日も池田君は、居ませんでした。

「池田君、まだ治らないの？」

私は、池田君と仲良しの小林君に聞いてみました。

『あゝ、あいつ、辞めるみたいだよ。』

「エー！ うっそー！」

（もしかして、私が、あんな事言っただから？）

（つつく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第15話：いじめ

「何で、池田君辞めちゃうの？」

私は驚いて、小林君に聞き返しました。

『なんか、いじめに遭ってるみたいだよ。』と、小林君。

「えー、どうして？」

『詳しい事は分からないよ。心配なら、TELすればいいじゃん。』

「えっ！ 私が？」

『池田は、青山さんのこと好きみたいだから、

相談に乗ってあげれば、喜ぶんじゃねえの？』

「あゝ……。」

そんな話をしていたら、地域管理者の中村さんが、やって来ました。

『青山さん、この前のバイク通勤の件、OKだから。

ただし、入門証が変わるから、正規の物が出来るまで、これを見せて入って。』

「ワー、ヤッター、バイク通勤できる。」

うかれた私をしりめに、小林君が、池田君の事を聞きはじめた。

すると中村さんは、『現場の係長と話をしているところだから、今は、何も言えない。』

と言い、他の伝達事項の話を始めました。

午後の仕事も、北村さんに教えてもらいながら、難なく終わる事が出来ました。

私は、北村さんの優しい笑顔が好きになり、

「明日も一緒にお仕事が出来るといいな。」と、思いました。

仕事が終わわり、更衣室を出ると、中根君が待っていました。

『青山さん、池田の事、気になるんだったら、一緒に奴の家に行かない？』

中根君が、そんな事を言い出すとは、思っていなかった私は、返事に困り

「電話してみるから、それはいいかな・・・。」と。

私は、正直、家に行くほど、気にしていたわけでもなく、

電話もしようとは、本気で考えていませんでした。

帰り道に中根君と、色々話をしていて、池田君や私の事を自分の事のように

心配している中根君に後押しされ、私は家に着くと、池田君に電話をすることに……。

「もしも池田君、青山です。みんな心配してるよ！ どうしたの？」

『俺のこと好きでもないのに、迷惑なんじゃなかったっけ？』

「あつ。あの時は、ごめん。ついうつかり……。」

『青山にふられたから、仕事する気無くなっちゃってさ。』

「えっ！ そうなの？ 私のせい？」

『ば〜か。ふられたから、確かに青山の前に顔は出せないけど、』

仕事行かない理由には、なんねえよ。そんなの。』

「えっ……それじゃー？」

『社員が何にも、教えてくれないんだ。何をすればいいのか、いくら聞いても、』

シカトされちゃって。

訳わかんねーよ！ だから、中村さんに言ったら

連絡するまで、家で待機してくれって言われて・・・。」

「そーなんだ・・・。」

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。)

第16話：外注さんは害虫さん？

今日の私は、ルンルン気分♪♪

そう、バイクで通勤できるからです

私のバイクは、ヤマハTZR 250 SPR です。

2サイクルエンジンの「レーサーレプリカ」と呼ばれるタイプ。

気持ちいいほどに、すごく速いバイクです。

手術のあと閉じこもり気味になった私に、「おもての空気でも、吸って来い！」とばかりに、兄貴がくれた、お下がりバイクです。

免許は、車と一緒に18歳の時取りました。

たまに、貸してもらい、乗っていましたが、自分の物になった喜びもあり、箱根や伊豆に行くようになりました。

ツーリングの相棒は高校の時から友人、涼子です。

彼女も、車やバイクが好きで、同じ様なタイプのバイクで、ホンダCBR250RRに乗っています。

たまに、レースまがいのことをして遊んでいます。

まー、こんな感じです。

セルスターターが無いので、キックでエンジンに火を入れます。

（２サイクルエンジンは、案外これが女の子には、難しいのです。うっかりすると、点火プラグが濡れて、オーマイゴット！交換です。）

いざ出発〜

多少渋滞もあったけど、満員電車に比べたら、なんのこれしき！

電車通勤の約半分の４０分で、到着。

早く着きすぎたので、着替えたら、食堂に行ってお茶する事にしました。

一人で、お茶していると・・・。

『おはよう！ 早いね！』

誰かと思ったら、新井係長でした。

「おはようございます。」

『青山さんも、慣れて来たようだね。社員からも評判はいいよ。』

「そうですか。　ありがとうございます。」

『そうそう、謝っておかなければいけなかった。』

「何ですか？」

『面接の時、会社を辞めた理由を聞きすぎちゃって、不快な思いさせてしまったことなんだけど。』

セクハラについて、研修なんかで取り上げられてて、どんな事がセクハラになるのか、知りたい気持ちがあつて、つい聞いてしまったんだけど。悪かったね。

まっ、仕事で分からない事有ったら、何でも聞きに来て。』

透けパンの時といい、悪い人じゃないことは分かりました。

仕事が始まり、今日は、山口さんに付くことになりました。

山口さんは、相変わらず元気で、注意ばかりされましたが、ちょっと、怒られるコツが分かってきました。

それは、怒られても、しょぼんと落ち込まずに、元氣良く謝る事でした。

そうしているうちに、笑顔が生まれるようになり、山口さんも身の上話をしてくれるようになりました。

昼休みになり、食堂に行くと、やっぱり池田君の姿はありませんでした。

すると、地域管理者の中村さんが来て、説明をしてくれました。

それは・・・。

この会社は、去年人員整理を行い、かなりの人がリストラされたとのこと。

そして、池田君の配置されたところが、リストラされた人が多く、残された人の心に壁を作ったということ。

つまりは、仲間がリストラされて、代わりに人件費の節約になる私たち派遣の人間が入り込んだ事が、彼らには、仲間を追い出したように見えて、嫌がらせの対象になったそうです。

彼らは、池田君や私達をこう呼ぶそうです。

「害虫さん」 （表向きは外注さんと云う事です。）

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第17話：初めての2人乗り

『害虫？　なんだよそれ？　ひでーな！。』

「中村さん、それで、池田君はどうなるの？」

『係長が、責任を持って、いじめている3人に嫌がらせをやめるように言うそうだ。』

「それで、大丈夫なのかな？」

『明日から、池田を復帰させるから、みんなよろしく。』

みんなスッキリしないようでしたが、

昼休みも終わり、仕事場に戻って行きました。

私は、午後の仕事も午前と変わらず、山口さんと一緒かと思っていたら、

山口さんは、違うことをするので、なんと、なんと、1人ですること……。

「どうしよう？　まだ1人で、するとは思っていなかった……。どうか、分からない品物は来ないでくれ！」

そして、品物の変更が終わり、ラインが動き出した。

「えーと、これは、たしか・・・こうだ！」

次々と品物が流れて来たけど、何とか1時間を乗り切りました。

ラインが止まり、品物の変更が行われて、次の伝票が回ってきました。

「あー、これね、大丈夫。準備、準備と・・・。」

ラインが動き出し、品物が流れて来て、私は箱に入れ始めたが、なんか、旨く入らない！ 入れ直したけど、入らない！

「えーどうして？ やばい、やばい！」

品物が、どんどん溜まって、このままでは、ラインを止めてしまう！。

「キヤーどーうしよう？ こっじゃないし・・・あー、もう。」

私が、焦っていると、背後から私の左手（ライン上流）に、一人の男が・・・。

『何やってるの？ ライン止めると、怒られるぞー。』

中根君だった。

素早い手さばきで、次々と品物が片付いていきました。

「ありがとう。助かったわ。この前も、いいところに来てくれて、ほんと、グットタイミングだよ。」

『たまたま、品物を移動させている時だったからね。』

「でも、遠回りじゃないの？」

『へまして、助け呼んでるんじゃないかと思ってさ。』

「恐れ入りました。その調子でこれからもよろしくー。」

『だけど、まだこんなのも、分からないんじゃない。まずいよ。』

「そうかな？」

『メモとか、取ってないの？』

「んー、手袋とかしてるから……。」

『休憩時間に思い出して書くとか？』

「記憶が、混ざっちゃって……。」

『帰りに、一緒にめし食わない？ 俺のメモ、コピってやるよ。』

「ありがとう、助かる。 あっ、でも私バイクだったんだ。」

『バイクって？ 原チャリ？』

「違う、250のスポーツタイプ。」

『後ろ乗れんの？』

「乗れないことはないけど・・・。」

『メットは、どうにかするから。じゃーあとで・・・。』

行ってしまった。

私、考えてみれば、後ろに乗せて走ったこと無いんだ。

やっぱり、万が一怪我させるとまずいから・・・。

仕事も何とか終わり、着替えを済まして外に出ると、中根君が工事現場でかぶるようなヘルメットを持って待っていました。

「それって、まずいんじゃない？」

『気にしない、気にしない、さあ、行こう。』

何か変な雰囲気のまま、バイク置き場までやって来ました。

「これよ。」

『へえ、こんなの乗ってるんだ。人は見かけによらないね。』

「ねえ、やっぱり、やめよう？そのメットも駄目だよ。」

『いって、いって。何とか座れるようになってるじゃん。』

仕方なく私はバイクを置き場から出して、エンジンを掛けた。

「バァーン、バァーン。」

2スト特有のエンジン音が響いた。

彼が、後ろにまたがって来ました。

私も、やっと足が届く程度なので、傾くとてもつらい。

そして、彼が私の脇に手を入れて、しがみつくような格好をしました。

本来、このタイプのバイクは、2人乗りする様にはなっていないくて、彼が座つているところは、私のところよりも一段高くなっています。それで、私の脇から入って来た両手は、私の胸の位置に来ました。

「キヤー、何やってんのよー。」

私は、支えていた足から力が抜けて、バイクは倒れました。

「ガチャーン」

「いったい、どこ触ってるのよー！」

『ごめん、ごめん。わざとじゃないよ。普通にうつするじゃん？』

「椅子の高さが違うんだから、自分で真っ直ぐ座ってよ。」

『どこ掴まれば、いいんだよ?』

「もーしょうがないなー、それじゃー、腰のベルトに……。」

バイクを起こしながら、見てみると……。

「あー、傷ついちゃったー。」

『ごめん、どーすればいい? 弁償?』

「すり傷だし、修理つて傷じゃないし、もういいよ。」

そして、私はバイクにまたがり、エンジンを掛けた。

彼が、またがり、今度は彼の手が、両腰から前へ来て、

腰骨より少し前の辺りのベルトを掴んだ。

結局、彼は前傾になり、彼の胸は私の背中にくっ付いて、

彼の顔は、私の肩の上にあった。

「密着し過ぎー! それに、おもーい!」

男性経験のあまり無い私は、なんか気になってしょうがない。

『出発進行!』 なんか、彼は元気だけれど……。

私は、彼の両手の親指がジーンズの中に入ってるのが、すごく気になっていただけ、そのまま走り出しました。

(つづく)
(登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第18話：つゆだく

『あそこ！ あそこ！』と、急に、彼が指をさすので、私は、その前に、バイクを止めました。

すると、彼は、バイクから降りて、『ここで、食べよう！』と、元気良く発言！

看板を見ると、見慣れた文字

【すた家 牛丼】

『さあ、入ろうぜ！』

私は、声もなく、付いて行く事に・・・。

実は私、この手のお店は入ったことが、無かったのです。

ファミレスは、1人でも行くのですが、ここは・・・。

なぜか、抵抗あって・・・男の世界のような・・・。

彼は、慣れた感じで、注文をして、私に聞いてきた。

『何にする？』

私も、落ち着いてメニューでも見ればいいものを・・・

「同じでいいや。」

『つゆだく?』

「えっ? そ〜ね・・・。」(なんだそれ? 牛語? 汁抱く?)

「よく来るの?」

『あゝ、吉田家は、最近牛井無いからね。んゝ、竹屋よりも好みかな。ガス亭は、ちよつと遠いしね。』

ちよつち、質問と答がずれてるような・・・ま、いいけど・・・。

『はい。おまち。』

おー、早い、早い!

ム、ムツ? これは、牛井ではない!

つゆだくか? いやいや・・・。

カレーだ! いつの間に、頼んだのだ?

私が、カレーを好きだと・・・知っていたのか?

『牛井が、先が良かった? いつも、僕が、カレー先に食べてるから、お店の人も、一緒だと思っただよ。ねっ?』

「あつ、どーも。違ってたらごめんなさいよ。」

大将、今日はどうしたんだい? こんなきれいな人連れて、彼女?

「と、お店の人。」

『違うよ、この人は、丸山が好きなんだから……。』

「そーか。あいつは、もてるねー。いいのかい？ 中根ちゃん、こんな人、丸ちゃんと仲良くさせて……。」

『あー、俺関係ないよ。青山さんが勝手に、丸山のこと好きなんだから……。』

「そーなのかい？ でも、注意した方がいいよ。青山さん。」と、お店の人。

「えっ？ はい、え、でも、別に、好きなわけじゃ。」

何だか分からない私は、しどろもどろの返事……。

カレーに牛丼を食べて、おなか超いっぱい、お店を出てきました。

「いくら？」

『いいよ。安いから。』

「でも。」

『あそこに、コンビニあるから、コピーしてくるよ。』

「私も行く。」

コンビニから出てくると、駐車場の柵のような物に腰掛けて、中根

君は、仕事のことを説明してくれました。

彼の説明は分かりやすく、併せてコピーを見ていると、仕事に対して持っていた不安が消えていきました。

気が付いてみると、駐車場で1時間、缶ジュース片手に話し込んでいました。

『あゝそれと、牛井屋の人も言ってたけど、丸山には気をつけた方がいいよ。彼には、一応ファンクラブみたいなものもあって、ファンの子と結構遊んでるみたいだから……。』

「ふゝん、そーなんだ……。」

『じゃー、駅すぐそこだから、これで……。』

「ここでもいいの？　どうもありがとう。ごちそうさま。」

(つつく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第19話：グループ分け

私は、家に着いて落ち着くと、明日から池田君が来ることを思い出しました。

「そーだ！ 池田君に、もらった早園麻紀のCD、聴いてない！」

絶対に、話題にしてくるから、少し聴いておかないと・・・。

CDプレイヤーのスイッチを入れると、曲が流れ始めました。

「女性とのデュエット曲なんだー。早園麻紀もなかなかいいじゃん。

池田君は、これが1番好きなんだー、ふーん。

もしかして、私とデュエットする気？

そー言えば、覚えてきてとか言っていたような・・・。」

それから、私は、池田君に言われたからという訳でなく、自然と何度も聴いて、そのまま寝てしまいました。

朝が来て、いつものように忙しく、家を出ました。

朝礼で、今日の仕事を言われたのですが、まだやったことの無い仕事で、部品の検査を言われました。

挨拶くらいしかしたことのない、30歳くらいの女性の西田さんに、

教えてもらうことになりました。

「よろしくお願いします。」

『よろしくね。この仕事は簡単だから・・気楽にやって!』

その言葉の通り、一つずつ機械にはめれば、あとは機械が判定してくれるので、

今までで1番簡単でした。

しかし、それが良かったのか? 悪かったのか?

西田さんが、話しかけてくるので、私もつい調子に乗って、ペラペラ・・・

話題が、北村さんのことになりました。

『あの人、頭くるのよねー。しゃべれないからって、楽な仕事ばかりして、それを当然のようにして、係長もそんな仕事ばかりしか、やらせないし、ねーねー、あの2人でできると思わない?』

あゝあゝ聞きたく無い事、聞いちゃったよー。

こういうところから、グループ分けされちゃうんだよねー

私は、北村さんのことが気に入っちゃったけど・・・。

西田さんは、山口さんや松本さんといつも一緒。

北村さんは、金子さんといつも仲良くしてるし、確かに係長と仲が良さそう。

さう困った。とりあえず、良く分からないので、「あーそうなんですか」。知りませんでした。」「この返事の繰り返しとなってしまいました。

どこの職場でも、あるんだな。

私は、みんなと仲良くしたいのだけれど、案外こんなどっちつかずの気持ちで、一番嫌われたりするんだよね。

仕事は、楽だけど、こういう話は嫌だよ。

「キンコーン、カーンコーン」

「あーお昼だー。」

いつものように食堂に行くと、イター！ 池田君。

でも、こっちを見ない。

「池田君、久しぶりー。」とりあえずの、私の挨拶。

池田君は、下を向いたまま、

『あー……。』の返事。

「うまくいつてないの？」

池田君は話したくないのか、仲良しの小林君が答えた。

『朝、仕事場に行ったら、3人に囲まれて、《よくも、係長にちくつたなー、お前、絶対に辞めさせてやるからなー。》って、言われたんだとき。』

仕事も教えてくれるのは、係長が居る時だけで、居なくなると前よりもひどくて、《じゃまだ！》《消えろ！》《うざい死ね！》とか言われて、たまに、蹴られたりするんだって・・・』

「ひどいじゃない、本当なの？ 池田君！」

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第20話：男の解決法

『あーほんとだよ。俺って、初対面だと女にも男にも好かれないのかねー？』

（それって、私に対して言ってるのかよー。ムッ！）

「昼から、どーすんのさ？」

無関心のようにだった山川君が、急に口を開いた。

『とりあえず、行かなきゃいけないなー。朝と変わらないだろうけど・・・』

「管理の中村さんには、話したのか？」

『さっき電話したら、明日の朝来るからって、言われたよ。』

「明日の朝なんて、のんびりしてるなー、今来てくれなきゃ、午後から困んじゃないかなー。」

岩田さんが、もっともな事を言った。

（キンーコーン、カンコンッ） 昼休みが終わった。

みんなも心配しながら、職場に戻って行きました。

私も、心配だったけど、何か出来るわけでもないし、私は私で、山

口派か？、北村派か？ 困っていました。

仕事は、朝の続きで、西田さんとペチャクチャとおしゃべりをしながら時間が過ぎていきました。

どー見ても、私たちは、仲良く見えている？

ふと気になって、北村さんの方を見ると、ドキッ！

目が合ったー！ 北村さんがこちらを見ていた。

距離もけっこうあり、間に色々な物があって、まともには見えないが、見ようとすれば、何とか見えるような感じだけれど、

今は、はっきりと、目が合った。

何か、悪いことをしているような気分になってしまいました。

「あゝもう、こんなの嫌だよー。」

こんな雰囲気の中、勤務時間も終わり、着替えて更衣室を出ました。

『よー、お疲れ！』

「池田君！・・・大丈夫だった？」

『俺のこと、心配してくれてたんだ？ 青山も分からない奴だよな
ー。』

「分からなくなてないよ。ふつつ心配するよ。」

『それは、どーも！ でも、俺は、平気だよ。

あんまりにも、頭にくる事があつてさ。

首根っこ捕まえて壁に押し付けてやったんだ。

ほかの2人の居る前で、リーダー格の奴をさ。

反撃しようとしてたけど、素人には無理で、動けなくて、困ったあげくに、言つた言葉が、《もう、許してやるよ。》だって。

殴つても仕方ないから、

《ありがとうございます。頑張りますので、何でも言ってください。》

と言つて、向ここの立場を考えてから離してやった。

そしたら、手の平返したように、やたら話しかけてくるようになって、仕事も普通に出来るようになったよ。』

「えーっ！ うそーっ！ うそーだ。池田君つて、強いのか？」

『まー空手は、小2からやってて、4段だし、合気道に少林寺拳法もやってたし、今は、週2で、ボクシングジムに通つてるよ。』

「何それ？ 心配して損しちゃったよ。でも、力づくで解決なんて感心しないな。仕返しとかされんじやないの？」

『大丈夫だよ。今まで、何度かこんなパターンあったし。話してみたら、お互い理解できたみたいだし。』

「ふ〜ん・・良くわかんないけど。良かったね。男の人は、そんな解決もあるんだね。」

『ところで、青山は、中根と付き合ってるのか？

さっき、中根が、お前のこと待ってたように、突っ立てたからさ。』

「付き合ってたんじゃないよ。何回か一緒に帰っただけだよ。」

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第21話：ヘルメット

『一緒に、帰ろうよ。』

「私、バイクなの。」

『えっ？ バイク？ そっかー、それじゃ、食堂で、お茶しない？』

「しない。」

『なんだよ。心配してくれてたくせに。』

「心配なんか、してないってば……。」

『なっ。少しでいいからさ……。』

「ん……しょうがないな。少しだけだよ。」

私たちは、食堂に行き、ジュースを飲みながら話を始めた。

食堂は夕食を摂ってる人が多く、昼と同じようににぎわっていました。

『渡した早園麻紀のCD聴いてくれた？』

「うん。いい曲だね。」

『ほんとかよ。てっきり、忘れてるかと思ってたよ。』

じゃーさ。もう一つ渡したい物があるんだ・・・これなんだけど・・・」

「何これ？ えっ？ 早園麻紀のライブチケットじゃん。」

『小林と行くつもりだったんだけど、彼、用事が出来て、ダメになちゃって・・・』

「これ、3列目の中央席じゃん！ すごーい！ でも、いいや。」

『えーっ？ ただでいいからさ、頼むよ。』

「そんなの、なおさらダメだよ。」

『それじゃ、5000円で！ なっ？ お願いだよ。』

「ねー、私は、あなたのこと、嫌い。って言ったのよ。分かっている？」

『分かっているよ・・・だから、お願いしてるんじゃないか。』

「そう。分かっているんだー。うーん・・・」

そっか・・・それじゃ、5000円 ハイ。」

『おー、行ってくれるんだ。サンキュウー。』

「勘違いしないでよ。早園麻衣に興味を持ったし、

せつかくのいい席だから、行くんだからね。じゃー帰るね。バイ

「！」

わたしは1人、バイク置き場に向かった。

すると、わたしのバイクに、誰かがまたがっているのが見えました。

「中根くん？」

『おー！ お疲れ！ 遅かったなー。』

「待ってたの？」

『あゝ。これ買っちゃった。』

手に持って見せた物は、なんと、ヘルメット！

「えっ？ それって、毎日乗るってこと？」

（つつく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第22話：招かざる客

『まさかー、毎日なんて。それじゃ恋人同士に見えるじゃん。』

「違うんだー？」

『もしかして、俺のこと好きになっちゃった？』

「何言ってるの？」

『俺も、別に青山さんのこと好きじゃないし、

仕事でドジばかりで、見てられないだけだから……。』

「あーそう！　じゃー帰る。お疲れ様。」

『おいー？　ちょっと待てよ。今日は、教習所まで、乗っけてくれよ。』

「教習所？」

『青山さんにバイク乗せてもらったら、バイクの免許欲しくなってます。』

前から、欲しかったんだけど、なかなか行けなくてさ。

調べたら、畠山自動車学校が、いいかなーと思って、駅から歩くとちょっと遠いし、

青山さんが帰りに近くを通るんじゃないかと思ってさ。』

「あゝ、それでメット買ったんだ。畠山自動車学校か。」

うーん、うちから遠くは無いけど、うちを通り越しちゃって10分くらいかな？

別に用事無いし、いつも助けてもらってるから・・・仕方ない。行つてあげるよ！」

『サンキュウー。』

私は、バイクにまたがり、エンジンを掛けた。

中根君が、例のごとく、後ろに座った。

「ねーっ？ それ、ワザとやってるの？」

中根君が抱きつくように、両手を前の方まで持ってきてベルトを掴んだ。

その両手の親指が、ジーンズの中に入っていました。

『えっ？ あゝこれ？ 知らなかったよ！ ごめん！』

青山さんもこんなこと気にするんだ？」

「あつたり前でしょ！ パンツにまで入りそうなんだから・・・。

だいたい、その掴まり方変だよ。完全に抱きついてるじゃん。

ベルトの横を掴んで、寄り掛からないで、まっすぐ座ればいいんだよ！」

『そんなに怒るほど気にしてたんだ？』

前の時言わなかったからいいのになって思ってたよ。ごめん。』

「分かればいいんだけどさ。べつに・・・。」

『だけど、ベルトに&a m p ;#25681；みると、前傾になっちゃうよ。』

「じゃー、なるべく寄り掛からないで。」

私たちは、工場の門を出ました。

約40分走ったところで、中根君が話し掛けてきました。

何を言ってるのか、分からなかったので、私はバイクを止めました。

「どうしたの？」

『ハラ痛くなちゃったー、どっかにトイレないかな？』

コンビニにとか？ あゝ我慢できないゝ。』

「えゝっ！ コンビニどこだったけかなゝ？ んゝ分かんないよゝ。」

『もれるゝ、はやくゝ。』

「えーどうしよう？．．．。しょうがない。うちに来な、そばだから。行くよ。」

2、3分走ると、私のアパートに着きました。

『もーだめー。』

「2階だよ、急ぎな。」

私は、ドアを開け、中根君を部屋に入れました。

この部屋に男をはじめて入れてしまった．．．。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第23話：チャーハンと酢豚

中根君はトイレに入った。

私は、すぐには出てこないだろうと思い、テレビのスイッチを入れました。

10分が経過して、少し心配になった私は、悪いとは思ったけれど、声を掛けてみました。

「大丈夫？ お薬もあるよ。」

『うん、ごめんな、もう少し居させて……。』

「いいよ、ごゆっくりどうぞ。」

時計の針は、7時を指そうとしていました。

なんかおなか空いたなー。夕飯どうしようかな？

トイレのドアが開き、中根君が、ほっとしたような顔で出て来ました。

「大丈夫？」

『うん、何とか。でも、またトイレに行きたくなると困るから、少しおじやましていい？』

「うーん、別にいいけど、教習所はどうするの？」

『うん、また今度にするよ。 もう7時か。 おなか空かない？
いつもどうしてるの？』

「その時によるけど、外食が多いかな。」

『それじゃー、お礼に、俺が作ってあげるよ。』

「えっ？ マジで？ 作れるの？」

『失礼な。それでも、中華のコックしてたんだぞ！』

中根君は、そう言っていると、冷蔵庫と食材棚を覗き始めた。

『結構、色々あるじゃん。そーだな・・・チャーハンと酢豚でも作
ろっか？』

「酢豚なんか大変じゃないの？ 無理なくていいよ。」

『30分くらいでなんとかなるよ。まっ、見てな！』

中根君はそう言っていると、食材を並べ始めた。

「中華のコックさんって、どのくらいやってたの？」

『高校出てから、2年間料理学校行って、3年くらいやったかなー。』

「結構本気だったんだ？」

『あゝ、自分で店、出したかったんだ。』

「何で辞めちゃったの？」

『勤めてた店がつぶれちゃったんだ。』

どうしようかと考えていたら、バンド仲間の丸山が、勤めていた印刷屋に誘ってくれたから

働き出したんだけど、結局、給料が安くて上がらないし、派遣のほう、良さそうだから、

一緒に辞めたんだ。

でも、成り行きでこうなっちゃったけど、まだ、自分の店を出すの諦めた訳じゃないんだ。』

「そーなんだ。ちゃんと目標持ってるんだね。うまく行くといいね。」

話しながらも、お肉を解凍して、野菜を切り始めた。

そのスピードにびっくり！

彼は、紛れもなくプロだ。と実感！

鍋に油を入れて、とんかつ用のお肉を竜田揚げにし始めた。

見る見る間に、酢豚が出来上がっていった。

チャーハンも、あつという間に、出来上がってしまった。

『ま〜ちよつと、変わってるけど、オリジナル酢豚だね。さぁーど
うぞ。』

「飲み物は、カクテル缶とビールしかないけど、どうする?」

『俺、酒飲めないから、お茶でいいよ。あれ?青山も、飲めないん
じゃなかったけ?』

「あ〜、ん〜、お客さんのために買って置いてあるんだよ。」

『なんか、嘘ぽいなー。隠さなくたっていいよ。』

「飲めないって。それに飲んじやったら、バイク乗れないよ。」

『飲んじやったら、泊めてもらおうと思ったんだけどなー。』

「何言ってるの?」

本当は、毎日少し飲んでいました。

ただ、あの事件以来、男の人の前で飲むのを止めただけ。

そんなことを説明するほどの仲でもないし、煩わしいので、ごまか
しました。

私たちは、テーブルに着き、食べることにしました。

「いただきまーす。モグモグ・おいしー! 信じらんない!

お肉もカリカリしてるし、野菜も変にやわらかくないし、チャーハンもベトベトしてない。

ほんとおいしいよ！ お店みたいだよ！」

『だからー、コックやってたって言うてるでしょー。』

「ほんとだったんだね。びっくりだよ！」

そー言えば、おなかは大丈夫なの？」

『なんか、治ったみたい。』

私たちは、料理を食べ終わり、ウーロン茶もジャスミン茶も無かったので、

紅茶を飲むことにしました。

中根君は、部屋の中を歩き出して、キョロキョロあちこち見出しました。

「ねえー、奥の部屋は、行っちゃだめだよ。」

『寝室なの？』

「別にいいじゃん。」

『だけど、グレーのカーテンに、バイクや車のレースのポスター、それに水槽が3つ有るし、

でかい変な魚がいるし、なんか、女の子の部屋じゃないみたい。』

「あっそー、中根君に好かれようとしてるわけじゃないし、大きなお世話でーす。」

『あっ！ ボンバーマンだ！ これやろうよ。』

「えっ？ 今からテレビゲームするの？ もうすぐ9時だよ。」

『青山さんは運動神経良さそうだから、前からこつこつなので勝負したかったんだ。』

まさか、逃げるんじゃないよね！』

「もー、そこまで言われたんじゃないー。しょうがないなー。」

私たちは、時間の経つのも忘れて、ギャーギャーと騒いで遊びました。

時計は、11時を過ぎていました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第24話：留守録

中根君は、ちらっと時計を見て、立ち上がった。

『もう、帰んなくちゃ。遅くまで悪かったね。』

「泊まっていけば？　なーんて、言わないよ！

期待してたりしたら、ごめんね！　私、そーいうの嫌いなもんでさ
！」

『そーかー、青山さんはやっぱり思った通りの人だった。

久しぶりに楽しかったよ。それじゃー。』

彼は、笑いながらそう言うと、玄関の方に歩き出し、靴を履いた。

「ここどこか、分かるの？　送っていくよ！」

『何とかなるよ。分からなかったら、タクシーでも捕まえるし、

送ってもらったら、帰りが青山さん1人じゃん。危ないからいいよ。

』

「中根君のうちはどこなの？」

『金沢区だけど。。。』

「えーっ？　それじゃ何で、こっちの教習所なのよ。」

『あゝ、仕事の帰りに、うちの方まで来ると遅くなちゃって、教習の時間に間に合わなくなるかもしれないじゃん。』

「そつかー。こつちなら、7時の教習に間に合うもんね。

でもそれって、毎日、私のバイクに乗るっていうこと?・・・まー
いいつか。」

『えっ! いいの? ヤッター。』

「その代わり、仕事でフォローしてね!」

『オー、何でも助けるよ。じゃー。』

「やっぱ、送るよ。この辺は道が分かりづらいし、タクシーも来ないよ。」

『いいよ・・・。』

私たちは、一瞬、見つめ合いました。

ニッコリして、中根君が口を開けました。

『んゝ、それじゃー、近くの駅まで頼んじゃおうかな。』

私達は、バイクに乗りました。

シーンとした夜に、エンジン音が鳴り響いた。

「クォーン。クォーン！」

近所迷惑以外の何物でもない。

私は、近くの駅と言われたけど通り越して、上大岡駅に向い、約15分で着きました。

『近くで良かったのに。』

「こっちの方が特急も停まるしね。・・・まだ、電車有りそうだね良かった。」

『うん、サンキュー。じゃー気をつけて帰れよ。』

「じゃーね。そっちもね。バイバイ！」

私は、バイクに乗り、うちに帰りました。

ドアを開けて中へ入ると、部屋の空気が、なんだか暑い。

2人で居たことで、空気が違うことに気が付きました。

「これが、ぬくもりというものなのかな。」

ふと、携帯を見ると、着信がいくつも入っていました。

丸山さんだった。

しまったー、バイクに乗ってて、気が付かなかったー。

留守録を聞いてみると・・・。

『歌、練習してる？ あした帰りにカラオケで練習するから、

食堂のいつもの場所で、待ち合わせな。よろしくー』

そーだ！ 練習してないじゃん。ヤバー！

・・・でも、何で練習しなきゃなんだろう？

まさか、私がライブで歌う？

あるわけないよ。メンバーじゃないし・・・。

まーいいや。明日は予定ないし、丸山さんと一緒にカラオケできるなら・・・。

明日が楽しみになって来ちゃった。

ライブは、しあさつての土曜日。

晴れるといいな。

「そーだ！ てるてる坊主、作ろっと！」

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第25話：朝寝坊

「やばーい！ 遅刻するー。」

夜、中根君を送って帰ってきてから、色々考えてしまっ
て、なかなか眠れずに、

朝方になってから、寝てしまったので、不覚にも50分寝過
ごしてしまっただ。

とにかく起きたら猛ーダッシュで、いつも40分掛けてい
る身支度を、

なんと10分で済ませて、バイクに乗った。

バイクも飛ばして、普段の10分遅れで到着！

いつも、のんびり着替えて、10分前に朝礼場所にいるから、

なんとか、ギリギリ朝礼に間に合った。

いつも朝礼に出て来ない係長が、今日はなぜか、話し始めました。

『おはようございます。』

先日、不良品が製品に入り込んで、苦情となりました。

その対策として……。

朝から、何やら暗い雰囲気で、始まりました。

今日の仕事は、北村さんと一緒にやることになりました。

北村さんは、耳が聞こえないけど優しい方なので、

一緒に居て気を使わないで済むので、安心出来ます。

問題は、山口さんの視線。でも、気にしないことに決めました。

お昼休みも今日は、北村さんに誘われて、

金子さんと新井係長と一緒にとることになりました。

特に緊張することもなく、楽しく過ごせたお昼休みでした。

社員の方とお話することで、色々な情報も入り、お互いの事も理解できるようになり、

仕事もスムーズに運ぶと実感。

午後の仕事も、順調に終わりました。

北村さんと長く接してるうちに、言葉が無くても、人は通じ合えることが分かりました。

そして、いよいよ、丸山さんのカラオケだ。

メイク直さなきゃ！

(つづく)
(登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第26話：KISS

着替えを済ませ、更衣室から出てくると、例によって、中根君が待っていました。

『よっ！ お疲れ！　きのうは遅くまで、悪かったな。』

今日こそは、教習所に行こうと思ってさ。乗せてくれるだろう？』

「あゝ・・・ごめん。　丸山さんとカラオケに行くの。あしたじゃ、ダメ？」

『丸山とカラオケ？　悪い事言わないから、止めとけよ。』

この前、牛井屋でも、言ったじゃん。

奴は、恋愛とかしないで、次から次へ、ただ遊ぶだけだから・・・。

青山さんは、そういうの平気なタイプの女じゃないだろう？』

「何で、丸山さんをそんなに悪く言うの？

私のことだって、分かってるみたいに言わないでよ。」

『だ・か・らー、俺は、前に奴のバンドで、ベースやってたんだよ。』

ライブの度に、気に入ったファンの女の子を、打ち上げに誘って、

その中の1人とホテルに消えて行くのを、何度も見ててさ。

ある日、「お前がやってることは、何か違うんじゃないのか？

そんな事する為に、バンド組んだんじゃないだろ？」

みたいな事言つて、言い合いになって、結局、俺は、バンド抜けたんだけど・・・。

青山さんが思ってるような奴じゃないって・・・。」

「ご忠告ありがとう。でも、約束だから。バイバイ。」

私は、バイクに乗り、約束のカラオケ店に向かった。

途中、中根君が言ったことが、気にならなかった訳でもないけど、今は、丸山さんの歌が聴ける事に、胸がときめいていました。

カラオケ店に着くと、バンドメンバー4人と話している、丸山さんが居ました。

『よー。俺たちも今着いたとこ。この5人でフルメンバー。』

挨拶はあとにして、とりあえず、部屋行こう。』

部屋に入ると、飲み物やおつまみを頼み、お互いの挨拶を済ませました。

いつも、警戒して端に座る私でしたが、丸山さんが手を引き、

Ｌ形の座席の真ん中へ、２人で座りました。

バンドの１人が、今日はエレキでなく、生ギターを出しチューニングをしたかと思うと、

丸山さんが立ち上がり、座席の反対側へ……。

ギターの音が、響き渡り、そして……丸山さんが、歌った！

バラードで、切なく歌う姿が、また何とも言いがたく、オリジナル曲を目の前で、

ギター演奏で聴くのが、こんなにも感動するものだとは思いませんでした。

歌い終わると、丸山さんは、隣に戻ってきて、私の耳元で言いました。

『どう？　今の曲？　僕が最初に作った曲なんだけど、気に入ってくれた？』

わたしは、気分が舞い上がり、ドラックでもやっているかのようにでした。

「うん。感動したわ！　とても気に入ったよ。」

『そうかい。それは良かった。』

僕は、好きな曲に感動してくれる君が、とても気に入ったよ……。

僕と付き合ってくれないか？」

彼は、そう言うと、くちびるを合わせて来ました。

私は、からだが動かなくなって、ただ目を閉じていました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第27話：ストロベリードリーム

くちびるの感触ってこんな感じだったんだー・・・。

最近キスしてなかったから、すっかり忘れてた・・・。

もっとも、覚えてるほど、沢山していた分けでは無かったけれど・・・。

こんなことを思って、じっとしていた私でしたが・・・。

次の瞬間、彼の肩に手をやり、彼を押し離しました。

彼が、舌を入れて来たからです。

人が見ているこんな場所で、ディープキスをしたことが無かったの
で、

反射的に拒絶してしまいました。

どーしよう・・・。

そう思って動けないでいた私に、彼が言いました。

「ごめん。みんなが居るのに、調子に乗り過ぎだよな。

それじゃーカラオケ、始めようか。」

私は、黙ってうなずくしかありませんでした。

バンドのメンバーが、順に歌い始めましたが、私は、動揺が冷めぬままで、

まるで耳に入って来ませんでした。

とうとう、メンバー全員が歌い終わり、丸山さんが、私に歌うように言いました。

はっとして、急に緊張が走り、目が醒めたようになりました。

歌う気分ではなかったのですが、歌わない訳にはいけないので、前回注意された事を考えながら歌いました。

気が付いてみると、みんなが真面目な顔で聞いていました。

『ちゃんと歌えよ。』『声が出てないぞ。』

いくつか注意され、何度か繰り返し歌いました。

すると、『もう1曲、何かないかな?』

の丸山さんの問いかけに、メンバーの1人が、

『それじゃー、同じラベツカのストロベリードリームは?』

っと、私を見て言いました。

「ラベツカは、好きで知ってます。」

『多分そうだと思って、楽譜用意してきたよ。』

『よー、気が利くじゃん!』

楽譜がみんなに渡り、カラオケが入り、丸山さんが言いました。

『じゃー歌ってみようか……。』

歌ってはみたものの、楽譜とは違つところもあつて、注意されながら何度か歌い、

やっと丸山さんからOKが出ました。

そして、ライブの日に、1時間早く来るように言われました。

えっ? これって、まさか?

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第28話：気になる視線

いよいよ、丸山さんのライブ当日。

朝日ランド遊園地の天気は晴れ。

みんなは、小林君のワゴンで、現地にやって来ます。

私も、誘われましたが、1時間早く来るように言われていたので、

親友の涼子とバイクで、一足早く着きました。

なぜ、涼子も？と言うと、

みんなが、女友達を連れて来いとるさかったので、仲良しの涼子にお願いしました。

彼女も最近是谁とも付き合っていないようで、軽くOK！

遊園地に入って少し歩くと、階段の下から楽器の音が聞こえてきました。

階段の上に立つと、下には、ステージと折りたたみ椅子を、

きれいに並べた観客席がありました。

涼子が、「ちゃんとしたステージじゃん。早く聴きたーい！」と、私よりはしゃいでいます。

観客席の3列目くらいまでは、スタッフやファンらしき人達で、埋まっていました。

近づいていくと、バンドの1人が私に気づき、おいでおいでをしていました。

それに従い、ステージ横に行くと、丸山さんが迎えてくれました。

『ようこそ、パープルシャドウのライブへ。』

「おはようございます。1時間前にと言われたので来ましたが、何をするんですか？」

『椅子を並べてもらおうと思ってさ。』

「えっ？ でも、椅子はもう・・・。」

『冗談だよ。歌ってもらうんだよ。その為に練習したんじゃないか。』

だけど、僕らのライブとしてじゃなくて、音の最終チェックとして、

僕らの前に、歌ってほしいんだ。』

「ほんとに歌うんですか？」

『もちろん。準備出来たら、1度練習しようか。』

『やったね！ 遙！』 涼子が、やけにうれしそうだった。

私は、もしかしたらとは思っていましたが、実際にステージを目の

前になると、

なんか胸がときどきして、逃げ出したくなってきました。

丸山さんは、メンバーを集め、打ち合わせを始めました。

そして、5分くらい経つと、私を見て、『ステージ上がってくれる？』と、右手で合図。

私は、仕方なくステージに上がり、スタンドマイクの前へ。

目の前には観客席が広がり、まるで学校の体育館の壇上に立ったようでした。

そして、演奏が始まり、私はドキドキしながら歌い始めました。

ところどころ、チェックが入り、止まりながら、「ストロベリードリーム」を歌いました。

そして、続けて同じように、「フレンディー」を歌いました。

開園して間もないこともあって、お客さんは多くは居ませんでした、

入り口から、この広場を通らないと、奥に行けないこともあって、通行する人達も、こちらを見ながら歩いたり、中には立ち止まる人もいました。

もう一度、歌うことになり、徐々に落ち着いてきた私は、

考えながら歌えるようになってきました。

演奏の方も音が合ってきたようで、明らかに最初と違いました。

冷静になってみると、案外ステージでは、音が取りづらいことに気づきました。

生の演奏音とスピーカー音そして、モニタースピーカーからのそれぞれ違った音が、

耳に入ってくるからです。

練習が終り、本番まで観客席で待っててと言われて、観客席に座っていると、

前列にいるファンらしき人達から、時折にらまれていることに気づきました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第29話：ライブ

私は、ステージで歌いたかったわけではないのですが、好きな丸山さんに勧められて、

それを断ることで、悪い印象をもたれるのが嫌だったので、言われるままに、

この日を迎えていました。

私と涼子は、観客席で最後のリハーサル風景を眺めていました。

『ボーカルの人が、遥の好きな丸山さんでしょ？』

やっぱり目立つよね。カッコいいし惚れるのも無理ないね。

でも、遥に似合った人なのかな？』

親友の涼子が、独り言のように、しゃべりだしました。

彼女は、「言っちゃいけないことかな？」と思う事をしゃべる時は、

このように昔から相手の顔を見ずに、独り言のようにしゃべります。

言ってみれば、長い付き合いの涼子も、私に警告をしてくれていたのです。

でも私は、そんなことお構いなしでした。

「カッコいいでしょう。」

もう付き合う約束したんだから、横取りしようとしても駄目だからね。」

『遥の横取りしようなんて、思いませんから。遥と喧嘩なんてしたくないですから。』

「あつ！ それって、その気になれば、取れると思ってるんだ！」

『そりゃ〜誰が見たって、遥と私とじゃ・・・。』

こんな話していると、横から騒がしく、池田君達がやって来ました。

『よーっ！ 調子はどう？』

「おはよう！ ねえ！ 聞いて聞いて！ 私歌っちゃった！」

『すげーじゃん！ もう、歌わねえーの？』

「また歌うよ！ 2曲も。」

『マジー。ビデオカメラ持ってきてくりゃ良かった。携帯じゃ、ちゃんと写れねえし。』

『ところで、そちらのおきれいな方は、どなたですか？』

と、小林君が早速、触覚を伸ばしました。

「あつ！ えーっと、親友の川村涼子ちゃんです。」

『川村涼子です。皆さんのことは、遥から、しっかり聞いてますよ。』

すると、質問の嵐が・・・。

『彼氏いるんすか？』『趣味は何ですか？』『仕事は？』

『どこに住んでるの？』『年はいくつ？』『好きなタイプは？』

「おいおい、いったい君たちは、何をしに来たんだー。」

これは、ラブワゴンの旅じゃない！」と、つい口走ってしまいました。

親友の私が言うのもおかしいですが、涼子は、メチャかわいいです。

女優の広末由紀に似ています、ハイ。

時間が近づいてきて、スタッフが、私を呼びに来ました。

ステージの横で、丸山さんが待っていました。

『準備はいい？ 細かいことは、もう忘れて、思い切って歌って！』

「はい！」

みんなが円陣を組み、手を重ねると、丸山さんが、叫んだ！

『命を燃やせ!』

「GO!」 「GO!」 「GO!」

そして、ステージに上がり、位置に着きました。

ステージの照明がつき、演奏が始まりました。

もう、緊張なんてしてられない。思い切り歌うと決めた。

「くちびるをー重ねた日はー」

さっきより、人が増えている。

歩いている人も立ち止まり、こちらを見ている。

座席に座りだす人も増え、半分以上埋まった。

「♪どーしてこわれたーの?フレンディーー」

見ている人が、リズムをとりだしているのが分かった。

これが、ライブ。気持ちいい。

その空気のまま、2曲目「ストロベリードリーム」に突入!

独特のイントロが場内に響き渡り、さらに座席は埋まった。

みんなが、私の歌を聞いてくれている。

わざわざ足を止めて、座席に座ってまでも。

バンドをしている人達の気持ちが分かった。

この瞬間、紛れもなく私は、バンドのボーカルだった。

そして、この気持ちのいい時間も終わりを迎え、丸山さんが現れた。

「テストソング2曲、盛り上げてくれたボーカルは、青山遥さんでした。拍手……。」

目の前にいる人達から、沢山の拍手が沸き上った。

「私に、こんなに沢山の拍手、ライブって素晴らしい！」

私は、ステージを降りて、涼子達の所に行きました。

みんなは、笑顔で迎えてくれました。

ステージでは、丸山さん達がオリジナル曲を次々披露して盛り上がっていました。

ファンの子やスタッフは、立ち上がり、脳波、飛びまくり。

「ライブっていいなー」と、私は、余韻に浸っていました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第30話：ドライブ

悪い事だと分かっているながら、ついしてしまう事、

悪い予感がするのに、止めることが出来ない事、

人にはそんな時があると思いますが、

私の丸山さんのお付き合いも、そんな感じでした。

夜1人になって考えてみると、丸山さんの後ろには何人もの女性を感じましたし、

中根君からの忠告もありました。

私は、人を押しのけて、欲しいものを得るような性格ではありません。

どちらかと言うと一歩後ろで、待っているような感じです。

つまり、この恋は、間違いでした・・・。

してはいけない、お付き合いだったのです。

ライブが終わったので、私たちは、丸山さんのところに、行きました。

みんなもバンドのメンバーに、ねぎらいの言葉を掛けていました。

そして丸山さんが、私に話し掛けて来ました。

『これから、片付けをして、少し遊んでから、居酒屋で飲むんだけど、来ない？』

「んー。今日は、仕事のみんなど来たし、友達の涼子を一人に出来ないから、ごめん。」

『そっつか。それじゃ、あした、ドライブ行かない？』

「えっ？ あした？」

突然の誘いに、私は一瞬ためりました。

でも、断ったら、次は無いなど、思い・・・。

「うん、いいよ。」

『それじゃー、8時に横浜駅東口の交番のところに来て！』

すっぱかすなよ！　じゃーな！』

「うん。今日は、ありがとう。」

そして、私たちが、行こうとした時でした。

横から可愛い女の子達が、缶コーラを2本持って、

『お疲れ様でした。これどーぞ！』と言って来ました。

涼子が『ありがとう。』と缶コーラを2本受け取ると、女の子達は行ってしまいました。

みんなも自販機でジュースを買ってきました。

そして、近くのベンチに腰掛けて、缶を開けた時です。

「ジョバーー!!」

私と涼子の缶コーラから、中身が勢い良く噴き出したのです。

「きゃー、何これー、ひどーい!」

私と涼子は、服を濡らしてしまいました。

『きっと、フアンの子だよ。遙が歌ったから、ヤキモチ焼いて、こんなことしたんだよ。』

「うーん、そうかもね。でも、ごめんね。」

私のせいで、涼子まで、こんなことになって・・・。」

私と涼子のジーンズとシャツは濡れたけど、気にしないでそのまま、遊ぶことにしました。

久々の遊園地。みんなで思う存分、遊びました。

陽も傾き、閉園の時間も近づいて、私たちは、引き上げることにしました。

帰りにカラオケ店によって、例のごとく、池田君が中心になって騒ぎました。

小林君が、やたらと涼子に話し掛けていました。

涼子も、嫌な顔もせずに、笑顔で対応していました。

もしかして、カップル誕生？

朝から、遊んだこともあり、早めにお開きになりました。

そして、次の日がやって来ました。

私は約束の横浜駅東口の交番の前で待っていました。

交番の前で待ち合わせというのも、何だか変な感じでしたが、

逆に何が有っても大丈夫と、安心感が有り、

それがなんとなく、丸山さんへの安心感にも繋がりました。

時間通りに、丸山さんがやって来ました。

『おはよう！ 車、あっちに止めてあるから、行こう！』

「おはよう。きのうは貴重な体験させてもらって、ありがとう。」

『楽しかったみたいだね。良かったら、うちのスタッフになれば？』

また、歌わせてあげるよ。』

「うーん、考えておくわ。」

私は、丸山さんの後ろに付いて行きました。

すると、目の前に車が・・・。

「おおーっ!」

(つつく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第31話：4年ぶりのデート

人は誰でも、秘密がばれたらどうしようとか、悩むことがあると思います。

はじめのうちは、「あとではれても、ダメならダメでいいや。」

とか思っ、付き合っ、ても、そのうちに、

「ばれたらどうしよう。はじめに言っ、置けば良かった。」

とか、結果が怖くなっ、て、自分から別れようとしたり、

どうしたらいいのか、決断出来なかつたり、悩んだり・・・。

胸に秘密のある私は、こんな気持ちで彼との交際の日々を、過ごすことになります。

目の前にあつた車は、まっ黒の1BOXワゴン・キャラバンでした。

窓も、まっ黒で、訳の分からないシールがベタベタと貼つてあり、

一見して「怪しい車」です。

彼が、助手席のドアを開けてくれました。

結構床の高い車で、乗り込むときに、「よいしょ。」って感じです。

「どっこいしょ」「じゃないですよ！　まだ若いですからね。

ただ、いつもは、スカートをはかないのですが、女らしく見せようと、

今日は、スカートでした。

ちよつと、失敗だったかな。

座つて、後ろを見て、びつくり！　何も無いのです。

2列目の椅子はたたまれて、平らな広いスペースに、毛布がひいてあるだけ。

「これつて、よく仕事で使われてるタイプの車だね？」

『そうだよ。4ナンバー貨物車。』

いつでも、寝れる様にしてあるんだ。試してみる？』

「何言ってるの？　バツカみたい。」

『うそだよ。楽器や機材運ぶために、こんな車なんだよ。』

「そーなんだ。でも、さっき言った様にも、使ってるんじゃないの？」

『ハハハッー、そう、たまにね。』

「……………」

『行きたいところ、ある?』

「別に無いけど……。」

『それじゃ、宮が瀬ダム、行こう。なかなかいいところだよ。』

こんな感じで出発して、2時間くらいで、到着。

「噂には聞いていたけど、なるほど、大きなダムだ。こんなのは、黒部ダム以来。」

資料館があり、ダムの上も歩いて、ダムの下の公園にも、ケーブルカーで行けちゃう。

そして、少し離れて、自然公園や宿泊施設、レストラン、売店もあるし、

ちょっとした遊園地もある。

ここは、のんびりするには、すごくいいところ。

私たちは、普通の恋人同士のように、ふざけ合いながら、楽しい1日を過ごしました。

時間の過ぎるのも忘れて遊んだ1日も、夕方になり、

『何時までに、帰ればいいんだ?』

この言葉に、一瞬、考えてしまった私。

そう、私はいつも、フリータイム。

でも、考えた結果、「8時くらい。」と、答えた。

ちと、早すぎたか？

『それじゃ、もう帰らないと、あそこで、夕飯食って、帰ろう。』

そして、その言葉通りに、出発の横浜駅に戻って来ました。

まー、初デートは、こんなものか。

と、安堵感と物足りなさのはざまに、心がありました。

まー自分で、8時なんて言っちゃったのが悪かった訳で、ドライブは楽しかったし、

逆に深入りし過ぎても、心の準備はしていなかったなので、仕方ありません。

「今日は、ほんとに楽しかった。ありがとう。」

『喜んでくれたみたいで、良かった。来週の土曜日にも、どっか行かない？』

「うん、別に予定無いから、いいよ。」

『そっか！ 良かった。それじゃ、また。』

こんな感じで終わった久しぶりのデート。

手術後、約4年が経過していました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。)

第32話：忘れられない記憶

私の乳がんが、見つかる1カ月前。

父が、肺がんで死にました。

大好きだった父。

小学生の時から、休みの日には、兄貴と3人で、カートレースに通っていました。

負けず嫌いの私は、兄貴に追いつけ追い越せと、毎週楽しみにしていました。

でも、大学に通うようになり、テニスに夢中になり、好きな人もできて、

父とレースに行く回数が減ってしまいました。

父の体の変化にも、気づいてあげられず、病院に行った時には、もう手遅れでした。

約3ヶ月の入院生活の後、逝ってしまいました。

「人間って、簡単に死んでしまうんだな」。

一生懸命に、何かに向かって頑張っている、

毎日毎日、嫌な事を我慢して生きていても、

それが報われる日が来る前に、突然死んでしまいかもしれない。
だったら、我慢して、我慢して、毎日辛い日々を送るより、
その日その日を、楽しく過ごした方が、良いんじゃないか。」
でも逆に、

「いつ死ぬか分からない、だからこそ、それを背負って、
一瞬一瞬を無駄にせず将来を夢見て、頑張ったり、我慢したり、
誰かのために辛いことに耐えたりする事が、素晴らしい事なんだ。」

とか、思ったり、人生について色々と考えさせられました。

思うことは違っても、家族みんながショックを受けて、

暗い日々が続いていた、ある日のことです。

癌は遺伝するという話をしていた夜に、テレビで乳がんの番組がありました。

そして、発見方法を説明していたので、何となくやってみたら、それらしいものが……。

まさかとは思いましたが、不安になり、母に相談して、病院へ行くことになりました。

結果、右胸乳腺に約3センチの癌が見つかりました。

私も、説明を聞いた時は、父のように死ぬのかなと思い、目の前が真っ白になりました。

きっと、母はそれ以上のショックを受けていたのですが、

医師の説明をきちんと聞いて、早く手術しなさいと、

私が悩む中、てきぱきと事を運んでいきました。

その時、私は、大学のテニスサークルに、結婚を約束した彼がいました。

手術をすると、右胸は全摘出手術によって、ペシャンコになり、

乳首も無くなり、約10センチの醜い傷が残ります。

想像しただけで、涙が出てしまいます。

そして、私は、このことを彼に言うべきか、毎日、悩んでいました。

でも、結局、いつか分ってしまう事と割り切って、ある日、彼に話すことにしました。

彼は、戸惑っていたようでしたが、私の命がそれで助かるのならと、理解してくれて、不安でいっぱい私を、勇気付けてくれました。

手術後も別れが来ることなど全く考えず、

そのうち結婚できるんだろうなーと、思っていた私。

お見舞いにも、毎日来てくれた彼。

でも、退院後のある日。

手術跡を思い切って見せた時から、彼は次第に変わっていきました。

彼から会おうという回数も減り、私からの誘いも断ることが多くなりました。

そして、ある雨の強い日に、大学の食堂で、新しい彼女を紹介されました。

とても可愛い、胸の大きなスタイルの良い人でした。

「もう、男なんて、好きになるものか！」

以後、胸の傷は、心の傷となり、

4年間の自分自身との葛藤が始まりました。

大学には行きましたが、授業だけ出て、サークルには顔を出しませんでした。

男の人を避けるようになり、ひきこもりぎみになりました。

毎朝、着替えの時には、憂鬱になり、毎夜、お風呂に入ると泣いていました。

そんな時間を過ごしているうちに、「男なんかより、仕事に生きてやる。」

と、気持ちを切り替えて、勉強を一生懸命するようになりました。

その甲斐あって、一流企業に就職が決まりました。

しかし、頑張って仕事をしていた私を待っていたものは、

「セクハラ」そして、退職でした。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第33話：許せない賭け

仕事は安定して、これといった事もなく、繰り返しの日々が続いていました。

丸山さんの事も、順調にいつていると、私は思っていました。

これは、あとから分かったことですが、ドラマなどでやっている事をまねして、

バンドのメンバーが、ある賭けをしていました。

それは、私が、何回目のデートで、丸山さんとHをするかでした・・・。

そして、彼は、自信ありげに、メンバーに言っていたようです。

「5回目にやってやる。」と・・・・。

そんななかでの、2回目のデート。

約束の場所で、私は彼を待っていました。

彼の黒色の車、キャラバンを私の目は探していました。

すると、私の目の前に、銀色のベンツが止まりました。

「何よ、この車！ 邪魔だなー。」と思っていると、「スーツ」と窓が開き、

『お待たせ。乗れよ！』と、丸山さんが、顔を出して、びっくり！！

とりあえず、私は乗り込み、車は走り出しました。

「どうしたの？ この車？」

『あー、この前、あのワゴン、気に入らなかったみたいだから。親から借りてきた。』

「そんなー、気に入らなかったなんて・・・。」

『そっかー？ そんな顔してたけどなー。じゃー次からは、キャラバンにするよ。』

『今日は、八景島シーパラダイスに、行こうぜ。俺、水族館とかイルカ、好きなんだよ。』

「私も、好き！ ジェットコースターとかも乗りたいな。」

『ジェットコースター？ 俺、苦手なんだよ。乗るの？』

「乗ろう、乗ろう！」

水族館を一通り見たあと、イルカたちのショーを見て、ハンバーガーを食べました。

彼は、お魚のことが詳しいようで、色々説明してくれました。

実は、私も色々知っていたのですが、そこは可愛く知らない振りをしていました。

「すごい！ そんなこと知ってるんだ！」

「すごい！ よく分かるね。」

気が付いてみると、「すごい！」の連発でした。

彼も、気分良さそうな顔をしていました。

ジェットコースターは、無理やり彼を乗せたのですが、本当に嫌いだったようで、

終始無言になり、手摺りをしっかり握っていました。

降りた後も、顔色が青くなっていて、笑ってしまったら、マジに怒っていました。

そのあとは、ゲームコーナーで、ワイワイと夢中になり、あっという間に時間が過ぎました。

食事をして車に戻り、帰るのかと思っていました。

すると、走り始めた車は、ルートからはずれて、近くのヘリポート周辺の公園に止まりました。

『少し、歩こう？』と、言われて、手を引っ張られました。

海風が涼しく肌に当たり、磯の香りと波の音がする、静かなところでした。

少し歩くとベンチがあり、一緒に腰掛けると彼は、私の肩を手で抱き寄せ、

私の頭を、胸元にもっていきました。

『なー、空と海の境目って、分かるかい？』

「んゝ暗くて良く分かんないなゝ。」

『そうだろ。どうしてだかわかる？ それは、海は、空の色に合わせてるんだ。』

『昼間、青空だと、海も青く輝いて、曇りだと、海の色もどんよりしている、』

雨だと、海も一緒に泣いてるんだ。』

「そーなんだ・・・。」

『俺さー、今の気持ちって、海と同じなんだ。』

遥が空で、元気がいいと、俺も元気出るし、

遥が、へこんでると、俺も暗くなるんだ。』

「.....」

『なー、あの海と空のように、今の俺たちって、境目が無いと思わないか？

つまりさー、お互いの気持ちに壁が無くなった様に思えないか？

俺は、今日、一緒に居てそう思ったんだ。

遙のこと、ほんとに好きなんだって・・・。

そして、彼は、キスをしてきました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。)

第34話：デートの聖地

仕事での出来事は特に無かったのですが、同じ係りで働いている中根君と、

目がよく合うようになったのが、気になっていました。

私が困っていると、いつもどこからともなく現れて、解決してくれる中根君。

いつの間にか、彼を頼りにして、待っているかのような私。

そして、これから起こる丸山さんとのことまでも、

彼が解決してくれるとは、思っていませんでした。

いいえ、ほんとうは心の底で、彼を待っていたのかもしれませんが。

バンドの人が車で迎えに来る丸山さんとは、一緒に帰ることは無かったのですが、

例によって私は、中根君を教習所まで、バイクで送る毎日でした。

そして、丸山さんとのデートの無い休みの日には、駐車場などで、

中根君にバイクの運転を教えていました。

私に特別な感情は無かったのですが、この時間が無心で楽しめた大切な時間だったと、

きっと、別の私が感じていたのだと思います。

破局へのカウントダウン、3回目のデートです。

行き先は、メールのやりとりで、ディズニーランドに決まっていた。
した。

朝早めに待ち合わせをして、開園前から待つことにしました。

夏休みになって、物凄く多くの人でこったがえしていました。

それでも、私は大はしゃぎ。

「ね、次は、あそこ行こうー。」

『まじ？ チョー疲れたんだけど。』

「まだまだ、これからだよ。」

『そんなに、おもしろいか？』

「もちろん！ さあ、いくよ。」

こんな感じで過ごした1日、アトラクションも楽しかったのですが、
このディズニーランドで、彼と2人で並んだり、手をつないで歩い
たり、

食事をしたりすることが、一種のあこがれだった私。

大満足の1日でした。

もちろん最後は、熱いKISSでお別れ。

でも、この頃から私は、いつか訪れるであろうKISSの先のことで、悩んでました。

はじめは付き合っても、うまくいかないで、すぐに別れるかもしれないから、

そんなことは、その時になって考えようと、後回しにしてきた私。

でも、後になっていくほど、怖くなっていく私。

この日にも、本当は彼が私を愛していないと、見抜く力が私にあったなら・・・。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第35話：不安な心

デートを重ねるたびに、ますます、彼を好きになっていく私。

今まで、自分の好みの女を、落とすことを楽しんできた彼。

私には、賞金も懸かっている。

5回目で落ちたら、数万円。

彼にとって、私は、単なる遊び、それとも・・・。

4回目のデートの日が、来ました。

例によって、私は、いつもの場所で、彼を待っていました。

待ち合わせ時間よりも、少し早く黒いワゴンがやって来ました。

『おはよう！ さあ、乗って！』

「うん！ おはよう！」

今日の行き先も昨日のメールで決まっていました。

ズーラシア横浜動物園です。

そして、夏の暑い陽が差し込む中、私たちは、汗をかきながら広い園内を歩きました。

時折、動物のかっこうをまねして、私を笑わせようとする彼。

いつも気取って、かっこいい彼が、私の前では、陽気なピエロ。

こんな姿に、私はまた、いつそう彼が好きになっていきました。

名物のオカピも見て、楽しく過ごしましたが、とにかく、暑かった！。

そのせいか、帰りの車に乗ると、彼が言い出しました。

『汗いっぱいいた？』

「うん、暑かったもんねー。もう、びちょ、びちょ。」

『そのままだと、風邪ひくから、流していかない？』

「えっ？・・・それって・・・。」

『そろそろ、いいかなーって思うんだけどさ。』

「そんな～、まだ、あたしは・・・困るよ。」

『そっか。そうだな、まだ、ダメだな。それじゃ、また今度な。』

「ついに、言い出したか～、こんなに早くこの時が来るとは・・・。」

「それじゃーさ、来週、海、行かない？」

「えっ？ 海？ ん」

「たて続けに、困る事言っなよー」

『都合悪い？』

「どーしよう・・・困ったー。都合悪いと言うのは簡単だけど、

次の週は？と聞かれると、また都合悪いと言うのも、おかしいし・・・」

『ねえ？ どうかした？ もしかして、泳げないの？』

「泳げるわよ！ 少しだけど。」

『じゃー、決まりね！ 来週は湘南だ！』

「待つてよ。 行くなんて、言ってないよ！」

『なんだよ、それ。 何でダメなんだよ！』

「・・・」

『理由言わなきゃ分かんねえじゃん！』

「分かったわよ。 行くわよ、行けばいいんですよ。」

『そんな怒ることじゃねえじゃん！ 夏なんだから、海行くの普通

だろ？』

「いいわよ、もう。」

私が怒っていると思った彼は、車を端に寄せて止めました。

そして、私の首に腕を回し、頭を引き寄せて、自分の頭と私の頭をくっ付けて話し始めました。

『俺さ、お前のこと好きでたまらないんだよ。』

毎日お前のことばかり考えてるんだ。

昨日、バンドの奴が、彼女と海に行ってきた話を楽しそうにするからさ、

俺もお前と行きたくなくてさ、やっぱり、男なら、彼女の水着姿とが見たいじゃん。

そういうのって、ダメなのかな？。』

「いいよ、分かったよ。」

『ありがとう。』彼は、軽くほっぺにキスをすると、車の運転に戻りました。

「まずい。あんな風にして言うから、つい、いいよなんて、言っちゃった。どうしよー。」

そして、別れ際に、いつものように車の中で、キスをしましたが、

回を重ねるごとに、激しく長くなる彼。

『それじゃー、来週は、湘南。絶対晴れだぜ!』

なんで、いいなんって言っちゃったんだろー。

そう、私は、胸の傷のせいで、水着になるのが嫌だったのです。

ここ数年、海には行っていませんでした。

困った〜雨降るといいな〜。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第36話：中根君と兄の対面

私の居ない、私の部屋での、お話です。

あとから、中根君に聞いたことを基にして、書いてあります。

バイクの免許を取得した中根君は、私をびつくりさせようと、

休みの日に朝早く自慢のバイクで、私のアパートにやって来ました。

もちろん私は、丸山さんと海水浴のために、かなり早く出掛けていたので、留守でした。

中根君は、呼び鈴を鳴らしても、私が出てこないのので、

私が丸山さんと一緒にいるのではないかと思いました。

それも、この時間、朝8時にいないので、昨日から帰ってないと勘違いをしていたのです。

中根君が、今日、私に会いに来た理由が、もう一つ有りました。

それは、丸山さんのバンドに以前いたことから、今でもメンバーと交流があり、

「丸山さんが、私とのHでお金を賭けている」のを知り、

なんとかその前に、そのことを私に知らせて、別れさせようとしたのです。

ですから、私がお泊りデートだと勘違いをした中根君は、内心穏やかではありませんでした。

携帯で私に電話して来ましたが、デート中の私は留守電にしてあり、伝言するにも、なんて言っているのか分からず、切っていました。

アパートのドアの前でたたずむそんな中根君に、ひとりの男が声を掛けました。

私の部屋に置いて行ったある本を取りに来た、私の兄でした。

もともと、この部屋には、兄が住んでいました。

そこへ、大学が近いからと、私が転がり込んで来ました。

それからしばらくの間、同居していましたが、どうも私が邪魔だったようで、

兄の方が、彼女のマンションへ転がり込んで行きました。

私が今使っているパソコンやテレビ、家具、カーテン、本やCD、

それに、水槽で泳いでいる熱帯魚は、兄が置いて行った物です。

中根君が部屋に上がった時に、女の部屋じゃないみたいと言ったの

は、こんな理由でした。

そして、兄は、私の様子見も兼ねて、時々来ていた訳です。

「何か御用ですか？」

『はあ・・・あなたは？』

「この部屋の者ですけど・・・。」

『えっ？　ここは、青山さんのお宅じゃ？』

「はい、そうですけど。何か？」

『えっ？　女の人のお宅じゃ？』

「あー、多分それは、妹です。あなたは？」

『お兄さん？　えっ、僕は、遥さんと一緒に働いている・・・。』

「中根君だね！　遥から話は聞いてるよ。」

『はい、中根です。』

「遥に仕事のことを聞くと、いつも君の話になってしまっただよ。

それで・・・、今日はこれからデート？」

『違います。遥さん、帰ってないようなんです。』

実は遙さん、バンドの奴らに遊ばれているんです。早くどうにかしないと……。』

「ちょっと。何を言い出すかと思えば……。こんなところで……。取り合えず、中に入って。」

兄は、そう言うのと、玄関の鍵を開けて、中根君と部屋へ入りました。そして、中根君は、賭けのことやバンドのこと、丸山さんのことなどを話しました。

兄は、多少イラつきながら、私に電話しました。

でも、私が電話に出るはずも無く、兄は「至急電話しろ!」と、留守録しました。

兄は、話をしていた中根君の真剣な姿を見て、彼を信頼してお節介にも、

私のことについて、色々と話し始めてしまったのです。

「これから話すことは、きっと遙は、他人には知って欲しくないことだと思う。」

その辺を分かって聞いてほしいんだけど……。

君は、本当に遙が好きか?」

『はい。死ぬほど好きです。愛しています。』

「僕も君の話聞いていて、何かピンと来るものを感じたし、遥を幸せに出来るのは君のような気がする。」

遥も君の事を話している時はほんとにいい表情してるんだよ。

だから、君を信用して話すぞ。」

『はい、大丈夫です。』

「それじゃ・・・。」

妹は、小さな時から、私と父親に連れられて、カーレースを見に行ったり、

私が、カートを始めると、自分もやると言い出し、ペダルに足が届くようになる」と、

すぐに乗り初めて、毎週のように走りに行っていた。

そんな中学の時に、激しく他の車とぶつかり、かなりの怪我をして、さすがの父親も止めさせようとしたんだ。

でも、結局止めずに、毎週父親から離れずに、サーキットに行っていた。

完全な父親っ子だったな。

だから、20歳の時に、父親が、肺がんで死んだときには、かなりのショックを受けて、塞ぎ込んでしまった。

1ヶ月経つても、元気もなく食欲もなく病人のようで、みんな心配していたんだ。

そんなある日、テレビを見ていたら、乳がんの話をしていて、

自分で心配になったのか、テレビで言っているように、

やってみたら、気になるものが有ったらしいんだ。

心配で母が病院に連れて行ったんだけど、検査を受けたら、

やっぱりそれは、乳がんだった。

落ち込んでいる彼女に、追い討ちを掛けるとても辛い告知だったんだけど、

当時、大学のテニスサークルで付き合っていた彼氏がいて、

その男が一生懸命になって遙を励まし、胸が無くなっても、

結婚して幸せにすると、言ってくれていたんだ。

そんな彼の言葉だけを信じて、妹は手術を受ける決心をしたんだ。

手術は無事成功したんだけど、右胸の乳首も、割と大きかった胸も

無くなってしまった。

自分で初めて手術痕を見た時は、本当にショックを受けたと思う。

でも、彼氏や友達が見舞いに来ると、いつも明るく振舞っていたんだ。

そして、退院して、ここで私と暮らすようになったんだが、

毎日風呂から出ると、急に元気が無くなるんだ。

きつと、鏡に写った胸を見て考え込んだんだろう。

そして、ある日、デートから帰った夜、玄関に入るやいなや泣き崩れてしまった。

どうやら、勇気をふりしぼり、彼に胸を見せたら、彼の表情が曇り、

そのあと、会話も無くなり、気まづくなったらしい。

それから、2人はうまく行かなくなったようで、学校もよく休むようになり、

毎晩そのドアの向こうのベッドで泣いていた。

その後、彼氏と別れたと聞いて、何て奴だと思ったが、

私が出て行っても、どうにもならないので、

『あんな奴、忘れてしまえ。』と慰めていたんだ。

何日も毎夜、泣き声がずっと続き、さすがに私も、正直苦痛で、いつまで続くのか悩んでいたんだ。

でも、何とか立ち直ってきたようで、昼間だけでも明るさが戻り、元気に学校へ行きだして、もう大丈夫だと思って、僕も彼女と住むことにして、ここを出た。

そして、今日のように、月に2、3回様子を見に来てるんだ。」

中根君は、話を真剣に聞いていました。

そのあと、二人は私を見つけようと、心当たりを探し回ったらしいのですが、

見つかるはずも無く、夜また、この部屋で話をして私の帰りを待っていました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第37話：希望

私の部屋で待つ2人は、私がホテルで傷ついて、ボロボロになって帰って来れないんじゃないかと心配していました。

その心配は、ほぼ当たっていました。

丸山さんとの最後のデート、5回目です。

「男なんか、もういない!」

海水浴場の駐車場の空気が無くなるのを心配して、

丸山さんは、朝早く行こうと言っていました。

私は、5時半にいつもの場所で、いつものように待っていました。

しかし、私の心は、いつもの期待と喜びとは違い、不安でいっぱいでした。

その1つは、水着になること。

小さなひもビキニを期待している彼でしたが、そんな物、私に着けるはずありません。

渋谷で半日かけて悩んだあげく、ビキニはパスして、カットの大胆なものにしました。

それなりに、セクシーなデザインだと思いますが・・・。

2つ目は、Hを予感させる前回の彼の態度と今回の海水浴です。

それなりに、覚悟はしてきました。

でも、希望と絶望のハザマに揺れる不安な気持ちで逃げ出したい。

いつものように、黒のワゴン車がやって来ました。

この幸せな光景は、今日が最後かもしれないな。と、ふと思いました。

いつも、彼からの、『おはよう！』ではじまる1日。今日は、私から、はじめてみよう。

「おはようー！」

『よっ！ おはよう！ 乗れよ！』

「うんー！」

『あれ？ 泣いてんのか？』

「んーんー、朝陽がまぶしくて・・・。

こんな光景、なんて幸せなんだろう、っと思って・・・。」

『何言ってんだよ。さあ、行くぞ。』

「今日ね、お弁当作ってきたよ。特製ピザサンドとおにぎり。

唐揚げとミニハンバーグ、ローストビーフにポテトサラダ。デザートなど。

冷凍物じゃなくて、ちゃんと作ったんだよ。」

慣れない料理。彼との、最後のデートの予感。

でもそうさせたくない、私の小さな、精一杯の抵抗でした。

『朝飯食ってないから、向こう着いたら食べよう!』

「うん。 天気良さそうで良かったね。」

照る照る坊主逆さにしたのに・・・。

海に着くと、7時くらいでしたが、駐車場には結構沢山車が有りました。

海の家にチェックイン?して、一旦ビーチで場所取り、

設営して、休憩がてら、お弁当タイム。

海を見ながらの朝食、彼から、「うめ〜。」の一言。

うそのなさそうな笑顔。

なんて幸せなんだ！ お弁当作って来て良かった。

たとえ今日が最後になっても……。

そして、お着替えタイム。

上に、パーカーをはおり、4年ぶりの水着姿で登場。

『おー。おとなの雰囲気がいいじゃん！』

彼の意外な一言で、ほっとした気分……。

『遥は、焼きたい？ 焼きたくない？』

「えっ？ あゝ・私は、焼きたくないかも……。」

『分かった。そこにうつ伏せになればよ、クリーム塗ってやるよ。』

「えっ？ 自分でやるからいいよ。それに、塗ってきたし……。」

『そー言わずに、ほれ、手が届き辛いところもあるじゃんか。』

それに、これは、男の役目だから。』

私は、仕方なくパーカーを脱ぎ、うつ伏せに寝ました。

彼の少し固い手の平が、私の背中を滑り出しました。

『おー、背中全開じゃん。ハイレグでお尻も半分出ちゃってるし、

いいね。』

おやじか？ お前は・・・。

背中が終わり、彼の手が、太もものに触った瞬間、思わず声が出てしまいました。

「ギャー。いいよ、いいよ。そこは、自分でやるから。（汗）」

『俺が、塗ってやるって、ほら、じつとしてて・・・。』

そして、半ば強引に、続けようとして、

彼の手は、お尻から太ももの内側へ滑り込んでいきました。

「キヤーダメダメ！ もー どこ触ってんのよー！」

思わず、起き上がってしまいました。

『へへへへ、ごめん。俺の背中にも塗って！』

そう言うと、彼は、私に背中を向けて、座りました。

私は、手の平を背中に当て、ゆっくりと塗りました。

その手の平から受ける感触から、特別な感情が沸き起こり、思わず、背中から彼を抱きしめてしまいました。

『俺のこと、好きか？』

「あなたは？」

『もちろん、大好きさ！』

「ほんと？」

『あゝ、ほんとだよ。』

「ほんとにほんと？ 絶対？」

『ほんとにほんとだよ。』

「あたしは、ほんとに、好きだよ。」

この時、彼が、私のことを好きじゃないような気がしました。

でも、彼が、本当に私を好きになってくれていることを願う自分が、彼を放したくないと言っているようで、しばらく抱きついたままです。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第38話：ホテル

デートしているのに、やたらと携帯電話をいじっている人ってどう思いますか？

私は、気になる方なので、自分でも、触らないようにしています。

お昼に携帯を見たら、兄から3回。中根君から7回の着歴。

それでも、私は無視しました。それどころでは、なかったから。

『いつまでそうしてるつもり？』

「ごめん、なんか、ほっとしちゃって・・・。」

『Hしたいなら、俺、頑張ちゃうよ!』

「ばーか。そんなんじゃないよ!」

『この浮き袋、いいだろー？ 2人一緒に入れるんだよ。』

「わーっ！ 大きいね。でも、2人入ったら、くっ付き過ぎだよ。」

彼は、顔を真っ赤にして、浮き袋を膨らしました。

『ゲーツ。キツー！ 苦しいよ。さーっ、出来た。行こう。』

私たちは、海に向かいました。

「なんか、冷たいよ。ほれ！」

『何だよー、やったなー。』

水を掛け合って、はしゃぎました。

何だか、ドラマみたい。来年も、こんなこと出来たらいいな。

『ほら、浮き袋に入れよ！』

「やだ！やだ！絶対ヤダ！後ろから変なことする気でしょう？」

『そんなこと、しないよ！って、しないわけないか・・・』

それじゃ、お前が、後ろでいいよ。』

私は、彼の後ろに入った。

からだか、完全に密着している。

男の人とこんなに触れ合ったのは何年ぶりかしら？

心臓の鼓動が自分でも分かるほど、ドキドキしている。

『足の届かないところまで、行こっぜ！』

「うん、いいよー！」

浮き袋は波に押し戻されては、行ったり来たりで、のんびりと進んだ。

そして、足が着かなくなったけれど、彼は、それからもう少し進み、周りを見ると近くに人が居なくなっていました。

すると、狭い浮き袋の中で、彼は、急にからだを回して、こちらを向きKISSをしました。

そんな予感もしていたので、うれしくもあり、少し長いKISSになりました。

彼は、狭い浮き袋の中に手を入れて、私のからだを触ろうとしたが、

私が抵抗すると、すんなり止めました。

砂浜に戻ると、休憩をして、ビーチボールで、ビーチバレーごっこ。

そして、戻って、かき氷を食べて、おしゃべり。

泳いだり、砂遊びをしたり、焼きそばやおでんを食べたり、

ビーチマットで波に揺られたりしているうちに、帰る時間が、近づいてきました。

私は、楽しくも1日が短く感じて、少し寂しい気持ちになりました。

『さー、そろそろ行くか。』

「うん。そうだね。」

荷物を片付けて、彼と歩いていると、どうも車の方に向かって
ようでした。

「あれ？ 海の家に行かないの？」

『あー。』

「えっ？ でも、このままじゃ……着替えないと……。」

『あそこのシャワー、ボロイから、あのホテルへ行こう。』

私は、一瞬足が止まりました。

彼は、何も言わず、私の顔を見ていました。

私は、自分にはっぱをかけました。

【覚悟してたんでしょ。今更、何をびびってんのよ、遥。】

私は、車に向かって、歩き出しました。

私は、車に乗ると、黙り込んでしまいました。

彼も、何か考えているようでしたが、ホテルの駐車場入り口に来る
と、

電話を始めました。どうやら、予約を入れてあったようです。

『うつそー、何だよそれ!』

どうやら、ホテルの手ちがいで、他の人と間違えたらしく、空いていないらしい。

彼は不機嫌そうに、すぐそばにあるホテルに、車を移動しましたが、満室表示。

そして、そばにある他のホテルへ・・・満室表示。

その次も、その次も、満室表示。

私は、満室で今日は無しだなーという安心感と、彼の焦ってる顔見ると

、何だかおかしくなって、クスクス笑ってしまいました。

彼も、諦めたようで、

『ごめん。シャワーダメだわー。めしでも食おう。

でも、中根のやつ、どうしたんだろう? 10回以上も電話してるよ。』

「私にも、掛けてきてるよ。」

『ちょっと、掛けてみるよ。』

『もしもし、中根? 何か用かよ?』

「今、青山さんと一緒か？」

『あゝそーだよ。それがどうかした？』

「すぐ、帰って来いよ！ 青山さんに手を出したら、絶対許さないからな！」

『お前に、言われる筋合いはねえよ！』

（プチッ。）

「中根君何だつて？」

『お前に、手を出したら許さないだと。何言ってるんだか？』

「そーなんだ。そんなこと、言っただ。」

『あー。めし食おう！ めし！』

でも、着替えないとだな・・・車の中で着替える？』

「スカートを上にはいて行って、トイレで着替えるからいいよ。」

『そっか。それじゃ、何食べる？』

そんなこんなので、レストランに入り、着替えを済まして、食事をして、

また、車を走らせました。

私は、満腹感と、久しぶりにからだを動かした疲労感と、

お弁当作りと緊張のための寝不足によって、いつの間にか寝込んでしまいました。

『よっ！ 起きろ！ 着いたぞ！』

「えっ？ あたし、寝てたんだ？」

『あゝ、可愛い寝顔だったよ。さあー、行こう。』

「行こうって、どこに？ それに、ここどこ？」

『ホテル』

「えっ？」

『今日は、泊まっていこう？』

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第39話：Secret of my heart

嫌われると分かっているけど、話さなければいけない秘密。

ほんの少しだけの可能性に賭けて、思い切った私。

こんな事になっても、私は、1歩前に進んだの？

「えっ？ 泊まるの？」

『1人暮らしなんだから、いいだろう？』

「本当に、私のこと好き？ 好きならkissして？」

『何、涙浮かべてんだよ。もしかして、お前、はじめて？』

「違うわよ。そんなんじゃないよ。」

『まっ、いいや。』

そう言っで、彼はキスをしてくれた。

私は、これが、「最後のkiss」になる気がしていました。

彼は、車から降り、私の手を引いて、フロントに向かいました。

『2つしか空いてないや。どっちがいい？』

「お風呂の中が見えないのにして。」

『えっ？ そっかー、でも、行ってみないと分かんないよ。』

「じゃーこつち。」

私は、普通ばい方に指を差しました。

部屋に入ると、私は、すぐにお風呂に目をやり、色々スイッチを動かして、

見えないことが分かり、ホッしました。

奥のドアを開けると大きな丸いベットがあり、思わず大の字に寝てみました。

天井は鏡張り、周りも鏡張りで、想像すると恥ずかしくなっています。

スイッチをさわり始めると、ベットがゆっくりと回転をはじめ、

照明が落ち、プラネタリウムに変わりました。

すると、流れ星が落ちて、思わず心の中で、お願いをしてしまいました。

【どうか、彼が、あしたの朝も、私にk i s sをしてくれますようにと……。】

なんか、妙に落ち着いて、このまま寝てしまいたい気分になりましたが、

彼がそうさせてくれるはずはありません。

『何してんだよ！ 早く風呂に入ってきてなよ。』

「ごめん。それじゃ、お先に・・・。」

私は、服を脱ぎ、大きな鏡に写った自分の裸を見て、右胸の無いことを恨みました。

そして、シャワーを浴び、普通なら、このまま出て行くのですが、

気まずい気分の私の目に、入浴剤が飛び込んできました。

「なんか、これバスタブに入れて、入ってみたい。

よし、少しくらい遅くなったって、からだから、いい香りがすれば、男は喜ぶに違いない。」

なんて、勝手な言い訳を作って、のんびり入浴タイム。

でも、本当は、怖くて仕方なかっただけ・・・。

湯船に浸かりながら、この先のことを色々考えていました。

このまま、裸で出て行き、一瞬で答えを出す。

なんてことも考えたけど、そんな勇氣はやっぱり出そうに無い。

いい加減、出なきゃ。そう思い、重い腰をあげました。

結局、パンツだけをはき、バスローブに身を包み出て行きました。

『遅いから、寝てんのかと思っちゃったよ。』

と、皮肉を言われて、苦笑いで返し、

彼が、シャワーを浴びて出てくるのを、ベッドで待つことにしました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第40話：欠陥品

「生まれてこなければ良かった。」なんて、思ったことは、ありますか？

私は、今回がそうでした。

でも、すぐに、そんなことを、思うことは間違いだと気付きました。人生、嫌なことでも、楽しめれば、大人だと思います。

1度だけの命、泣いていても、笑っていても、時間は同じに過ぎていきます。

だから、私は、なるべく笑っていたい。

彼は、意外に早く出てきました。

それも、腰にバスタオルだけを巻いた状態。

「どうしよつ。」

そんなことを考えている間も無く、彼は、近づいて来ました。

私は、初めての娘のように、彼に背を向けて、布団にくるまっています。

そつ、もうすぐ訪れる結果に怯えて、震えていました。

彼は、ベットに来るなり、私がかかるまっていた布団を払い除け、床に落しました。

私は、バスローブ姿で「く」の字になったまま動けないでいました。

彼は、私の後ろから、包むようにのしかかってきました。

『どうしたんだい？ やっぱり、初めてなんだろう？』

恥ずかしくなんてないから、こっちを向いて、見せてごらん。』

私は、仕方なく仰向けになり、彼の顔をみました。

彼は、バスローブのひもをほどき、私のからだを包んでいたタオル地のそれを広げました。

私の傷ついたおっぱいが、彼の目に映りました。

私の気持ちは限界に達し、涙がこぼれてきました。

『何だよ！ その胸！ 化け物みてえ！』

それで、そんな神妙な態度してたのか。

よくそれで、俺に抱かれようなんて、思ったよな。

まったく、よくも、今まで騙してくれたもんだ。』

私は、蚊の鳴くような声で言いました。

「違う！ そんなじゃないの。」

『まーいいや。賭けもしてるし、ここまで来てしないのも変だ。

入れてやるから、パンツ脱げよ！』

「嫌だー。もうイヤー。」

『何言ってるんだよ。 欠陥品のくせに！

証拠写真撮るんだから、早くパンツ脱げよ！』

そう言っていると、彼は、私のパンツに手を掛けてきたので、

私は、その手を振り払い、ベットから降りて、立ちすくみました。

「ひどい、ひどいよー。」

彼は、そばに置いて有った携帯電話を掴み、写真を撮ろうとしたので、

私は、パンツ姿のまま、自分の服を掴み、靴を引っ掛けて、廊下に飛び出しました。

放心状態の私は、そのまま廊下を走り、エレベーターボタンを押し、開いたエベーターに飛び乗りました。

1階に着いて扉が開くと、この場から逃げ出したい私は、

何も考えることが出来ないまま、外へ向かって走り出しました。

目の前が涙でぼやけている私の前に、突然ドアが開き、

危うくぶつかりそうになり、しゃがみ込んでしまいました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第41話：管理人室

急に開いたドアのせいで、しゃがみ込んでいた私に、話し掛けるおばさんがいました。

『あんた！ 何やってるの？ いいから、こっちへお入り！』

何だか分からない私は、立ち上がると、また外に向かおうとしました。

すると、おばさんは、私の腕を掴み、部屋の中に引っ張り込み、ドアを閉めました。

「何するんですか！」

『あんた、そんな格好で、外に出る気？』

何があったか知らないけど、少し落ち着いて、服を着てから出て行きな！』

『ほれ、これでも飲んで。』

目の前のテーブルに、麦茶が置かれた。

少し落ち着いてみると、ここは、管理人室のようでした。

奥に、監視モニターが有り、金庫が見えました。

『どうやら、落ち着いたようだね。そのソファに座りな。』

あんだ、乳がんの手術したんだね。喧嘩の原因はそれかい？

まーそういうことは、話したくないだろうからいいけどさ。

その格好で外に出ちゃだめだよ。

モニター見てたら、びっくりしちゃったわよ。

パンツ1枚で、泣きながらエレベーター乗ってると思えば、

そのまま外に向かって走り出してさ。』

「すみません。」

私は、服を着ながら、彼が、胸の傷を見てひどい事を言ったので、

こんな格好で部屋を飛び出したことを話しました。

『タクシー呼んでやるから、待ってな!』

少しすると、高校生の女の子が入って来ました。

『ただいまー。外でタクシー待ってるよ!』

私は一瞬、この子が何だか分からなかったのですが、私と目が会つと、

『こんにちは。』

と挨拶されて、「こんにちは。」と返しました。

あゝこのラブホテルは、きつと、この子の自宅なんだ！

年頃なのに、複雑な気持ちだろうなと、自分のことを忘れて考えてしまった。

おばさんが、その子に『菓子パンあるけど食べる？』と言うと、

『うん。お風呂出してから食べる。』と女の子は返事をしながら、

部屋の奥に消えて行きました。

『あんた、タクシー来たってよ！ もう大丈夫かい？』

「はい。大丈夫です。ありがとうございました。」

私は、ホテルを出て、タクシーに乗り込み、自宅へ向かいました。

ほんの少し進むと人通りの多い道に出て、

さつき、あの格好のまま出てきたら、いったい私はどうなったのだろつと、

ホテルのおばさんに感謝しました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第42話：1人にして！

傷ついた私の心は、もう誰も求めてはいませんでした。

ただ、一人になりたいだけでした。

それを求めて、うちに帰ってきたのに・・・。

タクシーは、アパートに着き、抜け殻のようになった私は、ふらふらと階段を昇りました。

ドアの前に立つと、カバンから鍵を取り出して、ドアを開けようと思いました。

しかし、鍵が掛かっていないことに気付きました。

私は、兄が来ていると思い、ドアを開けて中へ入りました。

『お帰り！』 兄の声がしました。

靴を脱ぐと、下を見ると、兄の靴以外にもう一つ靴がありました。

『お邪魔します。』

聞きなれた声・・・中根君だ。

「2人が何で居るのよ！」

1人になりたかった私は、不機嫌そうに言いました。

『中根君はお前が今付き合ってるバンドの人達が、お前のことで変な賭けを

しているのが分かって、心配して来てくれたんだよ。』と、兄が答えました。

「そー、それで、何だっと言うの？」

『だから、そんな奴らと付き合うのは止めた方がいいんじゃないか？』と、兄。

「それなら、今、別れて来たわよ。安心した？ 安心したならもう帰ってよ！」

『何か、あつたんだな？』と、兄。

「どうでもいいでしょ。もう、2人とも、帰ってよ！」

我慢も限界になり、私は、その場に泣き崩れてしまいました。

『彼とホテルに行ったんだな？』と、兄。

「行っただわよ！ 悪い？」

子供じゃないんだから、付き合っただことは、そういうことでしょ？」

『そうじゃなくて、お前が傷つく前に、

止めることが出来ていたら良かったと、思ったただだよ。』と、兄。

「傷ついてなんかいないわよ。彼としなかったし、

ただ、化け物とか、欠陥品だとか、当たり前のこと言われただけ。

たった、それだけのことだもの。」

『丸山の奴、そんなひどいこと言ったのか!』 中根君が立ち上がった。

『俺、今から奴の所に行つて来ます。』

中根君が、兄にそう言うのと、私は立ち上がって、さえぎりました。

「やめて! そんなことしないで!

彼のこと怒ったって、もうどうにもならないもの。

もういいから、1人にして、お願い!」

中根君が、泣いている私の顔を見て言いました。

『青山は、化け物なんかじゃない!

ましてや、欠陥品なんかじゃ、決して無い!

胸の傷がなんだよ! 人間は外見なんかじゃない!

辛いことを一生懸命に越えようとして、明るく毎日頑張っている、

そんな青山さんが、前から好きだったんだ!』

「ば・つか、じゃないの? こんな時に好きだ、なんて!

もういいから、2人とも、帰ってよ!」

兄も立ち上がり、中根君の肩をたたいて、一緒に出ようと促がしました。

私は、2人が通れるように、玄関の所からどきました。

2人は私の横を通り、玄関で靴を履き始めました。

「中根君、ちょっと待って。」

私は、さっきの言葉が気になって、彼を引き止めました。

中根君は、「えっ?」っと、云う顔をして立ち止まり、

兄は、「じゃーまたな。」と言って、出て行きました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第43話：中根君の気持ち

私は、中根君に、部屋に上がるように言い、玄関に鍵を掛けました。

中根君が、靴を脱ぎだすと、カーテンを閉めました。

中根君は、どうして良いのか分からないまま、部屋に上がりました。

そして、私は、中根君の目をしっかりと見て言いました。

「私のことが好きだなんて、簡単に言わないでよ！

あなたに、何が分かるのよ！

あなただって、これを見たら、嫌いになるに決まってるわ！」

私は興奮したまま、着ていたポロシャツを脱ぎ捨て、一気に、ブラをはずしました。

彼の瞳に、私の胸が映ったのが、分かりました。

そして、私は、泣きながら、言い放ちました。

「どーよ！ これを見ても、まだそんなこと言える？」

彼は、無言のままじっと、見ていました。

「黙ってないで、何か言いなさいよ！」

『・・・・・・・・』

「ほら、やっぱり嫌いになったんでしょ、無理しなくていいから、もう出てって！」

彼が、私のこの言葉を、かき消すかのように、言いました。

『嫌いになんか、なるものか！』

これは、立派な勲章だよ。頑張って生きてきた証じゃないか。

生きるために、大変な手術を乗り越えて、今まで頑張って来たんだろ。

ずっと1人で、毎日悩んで、苦しんで、それでも恋愛を諦めずに、丸山を信じたのに・・・。

その苦しみ、僕が引き受けるよ。

もう、胸のことで悩むことなんかないよ。』

彼の目から、涙がこぼれました。

私は、その彼を見て、言葉を失いました。

『もっと早く、遥を見つけることができてなくて、ごめんな。』

僕が手術の前に、出会ってれば、こんな苦しい思いさせなくて済んだのに。』

いつしか私の涙は、うれしい涙に変わっていました。

そして、彼は、私の前まで歩いて来て、私をぎゅっと、抱きしめました。

「こんな胸でも、ほんとにいいの？」

『当たり前じゃないか。』

そう言うと彼は、私を押し倒して、胸の傷に顔を近づけて、やさしく舐めてくれました。

私は、いきなりの彼の行動で、恥ずかしくもあり、抵抗しました。

「だめだよ、そんなこと。恥ずかしいよ。」

でも、その抵抗も、形だけのもので長くは続きませんでした。

右胸に、乳首は無かったので、あの感じ方とは違ったのですが、

私が、こんなにも嫌いだったこの胸を、彼は嫌がらずに、

やさしく舐めてくれている事に、特別な感情が湧いてきました。

私は、この彼の行為により、からだが硬直してしまい、動けませんでした。

「ねえー、もう、やめて、恥ずかしいわ。」

『嫌なの？ 怒った？』

「そうじゃないけど、あなたの気持ちは分かったから……。」

『嫌じゃないなら、いいだろ?』

彼はそう言っで、舐め続けて、右手で私の左の胸を触り始めました。

「ダメだってば……。」

『ずっと、ずっと、前から好きだったんだ。』

僕は君を悲しませたりしないよ。ずっと、守るよ。』

「ありがとう。だけど、もう止めて。」

彼は、止めようとはしませんでした。

彼の手は、スカートのファスナーをはずし、そのまま全てを脱がされました。

私は、恥ずかしくて、両手で顔を覆いました。

何度も「やめて……。」と言ったのですが、

彼は止めるはずもなく、自分の服も脱ぎ捨てました。

考えてみれば、私の一番近いところに居て、いつも助けてくれたのは彼でした。

丸山さんに浮かれて、彼のことをちゃんと見ていませんでした。

丸山さんに、嫌われるとは覚悟しつつも、ほんの少しの願いをこめて、ホテルに行った私。

彼のひどい言葉に、この世界から消えてしまいたいほどのショックを受け、

このどうしようもない気持ちを受け止めてくれる場所を、求めていたのかもしれない。

この時、中根君との出会いが無かったら、私はどうなっていたかわかりません。

彼の言葉で、私の心は救われました。

もう、彼を信じることにして、彼に身を任せました。

彼はそれが分かったのか、うれしそうに疲れて寝るまで、愛してくれました。

そして朝がやって来ました。

目を開くと、目の前に彼のにこやかな顔が迫っていました。

『おはよう。』と、言いながら、キスをして、

彼はそのまま、また、愛してくれました。

私は、まだ目が覚めていない状態で、

半分夢の中のような気持ち良さの中で、やすらぎを感じていました。

【これが幸せって言うのかな。

彼は、おっぱいの無いこのからだを、こんなにも愛してくれる。】

しばらくして、彼も、おとなしくなりました。

「朝から元気だね。」

『当たり前じゃないか。ずっと好きだった遥と、こうしているんだよ。』

今、元気出さなくて、どうするんだよ。』

「ふ〜ん、そうなんだ〜。　ねー、今日どうするの?」

『俺は、このまま、遥とゴロゴロしていたいな。』

「えー?　もう私は、いいよ。」

でも、私のこと本当に、好きなんだよね?」

『うん。好きだよ。大好きだよ。愛してる。』

「信じていいんだよね?　ほんとに、いいだよね。」

『ああ。僕は嘘はつかないよ。大丈夫。』

私は、前の彼氏に別れを告げられて以来、

長く続いた暗いトンネルに光が見えたような安堵感に包まれていました。

ただひとつ、心配だったことがありました。

彼は、ゴムを着けていなかったのです。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第44話：中根隆志君と風俗

結局、私たちは、ごろごろと日曜日を過ごしていました。

お昼過ぎになり、お腹が空いた私たちは、近くのファミレスに行くことにしました。

服を着て、外に出ると中根君が乗ってきたビックスクーターがありました。

「そーだ！ 免許取ったお祝いしてあげる。何か欲しいものある？」

『あるよ！』

「何？」

『遥が欲しい。』

「えっ？ もうあげたじゃない？」

『そうじゃなくて、真面目に、そう思ってる。結婚したいし、子供も欲しいんだ。』

「そう……ねえ、隆志のバイクで行こうよ。」

『そうって、なんだよ。俺、真剣なのに。』

「分かってる。でも、そんなの今返事できないよ。」

私は、隆志のバイクのハンドルを握った。

隆志は、いつものように後ろに座った。

そして、後ろから私を抱きしめて、胸を揉んできました。

「きゃー、外でそんなことする人嫌いよ。」

『今まで、毎日、毎日、ずっと我慢してたんだよ』。

「やっぱりね。さー行くよ。」

私たちは、ファミレスで食事をして、私のリクエストで大栈橋に行くことにしました。

マリントワー、氷川丸、山下公園に並ぶ昔からの横浜の名所です。

大きな客船が着く大栈橋の屋上は不思議な形をしていて、

港の眺めも良く、好きな人と来たいと思っていた、私のお気に入り場所です。

2人で横浜の港を眺めていましたが、彼は、急にこちらを見るなり、キスをしてきました。

まだ、明るいし、観光客が回りにいる中での、突然の彼の行動。

普通なら私は、彼を突っぱねて、

「みんなが見ているから、止めてよ!」と、言うところですが、じつとしていました。

それは、彼の唇が震えていたからです。

考えてみれば、彼とキスしたのは初めてでした。

正直、ヘタです。

『ごめん! 俺、緊張しちゃって。・・・初めてなんだ。』

「初めてって? キスが?」

『そう・・・今まで、女の子と付き合ったこと無いんだよ。』

「だけど、Hは、普通にしてたじゃん。」

『ん、遙のこと好きになって、もしも、遙とHする時があつて、下手だと嫌われると思って、風俗に行つて練習してたんだ。

だけど、風俗の女の子と遙とは全然違つてて、とてもきれいで、これが、夢にまでみていた遙だと思うと、うれしくて無我夢中だった。

でも、キスの練習は出来なかったんだ。

好きでもない女の子の顔が迫つて来ても、キスする気が起きなくなつて・・・。

ところが、今、遙の顔が目の前にあって、急にどうしてもキスしたくなっちゃって、

遙の唇に俺の唇が触れていると思うと、もうドキドキしちゃって・
・ごめん。』

「何言ってるの？ 何でも話せばいいってもんでもないでしょ。

もう、呆れた。

でも、ほんとに、風俗とか行っただの？

あたしをイメージして、風俗でしてたなんて・・・ もー最低!!」

『ごめん。ほんとにごめん。でも、遙のことが好きでしたことなんだよ。』

「でもねー。何でそういう事するかなー。

嫌だなーそういうのって・・・。

うーん・・・どうしよう。。。。

いくら、私のことが好きでしたことと言われてもねえ。

こんなこと、言わなきゃ良かったのに・・・。

私に嫌われるとか、思わなかったわけ？」

『ん、分かんないけど、そんなこと全然考えなかった。』

「そーかー。ま、良く言えば、私に隠し事をしない正直者いうことかな。」

分かった。今更どうなるもんでもないし、

今後、私以外の人とHしないと約束したら、許してあげる。」

『約束するよ。絶対、遥以外とは、しないよ!』

「そう・・・なら、いいけど。」

だけど、病気なんて貰ってないよね？ 今度、検査してきてよ。」

『病気は、大丈夫だよ。僕も心配になって、調べたら大丈夫だったから。』

「そうそう・・・夜も朝もゴムしないでしてたでしょ！

妊娠したら、どうする気？」

『どうするって、産むに決まってるじゃん。』

大好きな遥と俺の子だよ。2人の愛の結晶だよ！

遥と俺が、合わさって1人の人間になるんだよ。

こんな神秘的で、うれしいことないよ。』

「ふうん。それじゃ、妊娠したら、あたしたちはどうなるの?」

『結婚するに決まってるじゃん!』

遥が受け入れてくれた時に、もうそれは決まったことなんだ。

なーそうだろ? 違うの? 遥は結婚したくないの?』

「えっ? 結婚? 私、自分が出来ると思ってなかったから。」

『どうして?』

「どうしてって、こんな胸になっちゃったから・・・。」

『俺は、そんなの気にしないし、遥と結婚出来ないなら、死んだ方がまし。』

ねー、俺と結婚してくれるよね。俺、頑張るからさ。』

「それって、もしかして、プロポーズなの?」

(つつく)(登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第45話：同棲

この時、私は、25歳でした。

丸山さんに、「さん」付けしていたのは、私より年上で、27歳。

中根君に、「君」付けしていたのは、私より年下で、22歳でした。

金のわらじは、履いてなかったな（笑）

『なっ！俺と結婚してくれよ。俺、頑張るからさ。』

「ん〜。でも、ちゃんと付き合いだしたのは、今日からだよ。

だから、半年後にまだ今の気持ちのままでしたら、ちゃんとプロポーズして！」

『え〜、半年？ 長すぎない？ もっと早くしよつよ。』

「半年後まで、今の気持ちでいる自信ないのね？」

『そうじゃないよ。気持ちが変わるはずなのに、待つなんて、時間がもったいないよ。』

早く遥と、一緒に住みたいんだよ。』

「別に急がなくなつて、いいじゃない？」

仕事で毎日会ってるし、帰りにデートだって出来るし。」

『でも、今日もそうだけど、デートの後、帰りたくないんだよ。』

2人とも、1人暮らしなんだし、一緒に住んだって、支障ないだろう？

さよならって、別れる時が凄く辛いんだよ。』

「そんなに、同棲したいの？」

私は、そんなはじめのない生活は嫌だなー。」

『愛し合うもの同士が、一緒に暮らすのは当たり前のことじゃないか。』

遥は僕のこと愛してないの？ 愛してないのにHしたの？』

「私の気持ちが不安定になってる時に、嫌だって言ったのに、

強引に隆志がしてきたんじゃない。」

『だって、ずっと好きで、我慢出来なかったんだよ。』

遥だって、本気で拒否ったわけじゃないだろう？』

「うーん、まーね。

色々有って、混乱して、隆志の言ってくれてることが、

ほんとに嬉しくて、いいかなーと、思ったんだよ。

今考えてみれば、毎日、隆志が助けてくれたから、

優しくしてくれたから、仕事が続けてこれたんだと思うよ。

もっと早く気付かなきゃいけなかったと思う。

丸山さんの見た目のカッコ良さ、偽りの優しさに騙されて、

隆志が、いつもそばに居てくれたことに気付かなかった。

丸山さんにひどい事言われて、死ぬほど落込んでいる時に、

隆志に優しくされて、私の心は隆志を求めていたんだとわかったよ。

「

』だったら、一緒に暮らそうよ。

僕は遥のこと守るから、遥はいつも、僕のそばに居てくれよ。お願いだよ。』

「でもー。

ん、私、正直言って、自信ないよ。

隆志に見られたくないことや、知られたくない事も有ったりするし・
・。。。」

『え、何だよ、それ。俺のこと好きなら、そんなものないはずだろ?』

「でも、好きだから、嫌われたくないから、そういうこともあるんだよ。」

『それって、すっぴん見られたくないとか？ いびきかくとか？ 料理出来ないとか？』

でも、そんな半端な気持ちじゃないんだよ！』

「んー、そんなに、責める様に言わないでよ。涙出てきちゃったよ。」

『ごめん。でも、料理なんか俺がするし、教えてあげるよ。』

ほかに、出来ないことあったら、僕がやるし。

僕のこと、信じていいよ。

遥のどんな姿見ても、気持ちは揺るがないよ。』

「うーん、そんなに言うなら、分かったよ。」

お互いのことを、早く色々知るのにはいいのかもね。

でも、嫌なところ見て、嫌いになっても知らないよ。」

『やったー。ありがとう！』

それじゃ、このまま、遥のところに、転がり込むよ。

荷物は少しずつ持って来るし。

とりあえず帰りに、着替えと必要な物取りに行こう？』

「えっ？ 今日から？ それに私の方で暮らすの？」

『うん、だって、俺んところより広いし、きれいだしね。』

それに、持ち物、俺の方が少なくて済むよ。』

「どうしよう・・・なんか嫌だけど・・・ん・・・まーいつか・・・」

隆志が、またキスしようとしてきました。

私は、目をつぶり、受け入れました。が、やっぱり彼は震えていました。

「そんなに、緊張するかな？」

『するする。遙は、自分の魅力に気付いてないんだよ。』

ほんとに、かわいいしさ。

俺のものになったと思うと、もう、ドキドキだよ。』

「誰があなたのものになったって言ったの？」

私そついう風に言うのって嫌い。私は、物じゃないわよ。」

『ごめん。そんなつもりじゃないんだけど・・・何て言うか・・・。

僕だけに、遥は許してくれているんだと思うと、うれしくてさ。』

「別に言い直さなくていいわよ。気持ちは分かるから。

だけど、泣かせたら、さよならだからね。」

『うん。わかったよ!』

「じゃー行こうか。」

(つつく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第46話：私のこだわり

私たちは、バイクで、隆志のアパートに向かいました。

『その2階。』

「ここがそうなんだ。結構古いよね。あゝ、ごめん。」

『うん。でも家賃安いんだ。ちょっと待ってて、荷物、取ってくるから。』

隆志は、階段を上がり部屋に入って行きました。

私は、少し外で待っていたのですが、なんか気になって、こっそり入っちゃいました。

すると、部屋の中は、ふとんが引きっぱなしで、本や服が散らばって、

足の踏み場が無いというのは、このことかという状態です。

「何この本？・・・きゃーエッチー！。

わーっ！ これも。これも。みんなHな本だー。」

『なんだよ！ 待っててって言ったじゃんか。』

「なるほどね。別に平気だよ。隆志はスケベだって分ってるからさ。」

あっ！レンタルビデオ店の袋だ！ 何借りたの？

どれどれ・・・うつ！」

彼は、慌てて袋を取り上げました。

『男なんだから、しょうがないだろー。恋人なんて、居なかったし。もてる遥には、俺の気持ちなんて分からねーよ。』

「ごめ〜ん。傷つけちゃった？」

『そう、傷ついたよー。だからさー。』

彼は、私に抱き着いて来ました。

「もー、やーだ。こんな本の上じゃ。それに、汗かいてるし。」

『そんなの、どうでもいいよー。』

「ちよつとー、ダメだつてばー・・・。」

結局、彼は止まらなくなつて、最後まですることに・・・。

なんか、彼は、Hの為に同棲したいのかな？

と、ちよつと不安な気持ちにもなりました。

「ね〜、ほんとに赤ちゃん出来たらどうするつもり？」

『だから、僕は、欲しいんだってば。』

『そんなこと言ったって……。』

回りも暗くなつた頃に、彼のアパートを出て、

途中で、ラーメンを食べて、私のアパートに戻ってきました。

汗をかいていたので、すぐに私はお風呂に入ることになりました。

私が、お風呂から出て来ると、後ろから、

彼が「ギャーオ〜。」とふざけて、飛び付いて来ました。

見てみると、頭に私のパンツをかぶって、「宇宙人襲来!」とか言っていました。

「もー何してんのよー。勝手にタンス開けないでよ。」

『違うよ! あそこ。』

彼が指差したのは、昨日の朝、部屋に吊るした、洗濯ハンガーでした。

ブラとショーツだけ、4つずつ干してありました。

『だけど、4つとも色が違うよね。ピンクにブルーに、グリーンにオレンジ。』

それぞれデザインも違うし、なんか高そうだね。』

「しまったー。何で今まで干してあったことに、気づかなかったんだろう？」

恥ずかしー・・・。

えっ？ 値段？ あーうん。ちょっと高いよ。

胸がこんなになったからだと思うんだけど、下着にこだわるようになって、

ブランドの服とかには興味ないんだけど、下着は、人よりも少しでも可愛い物、

きれいな物を着けたくて、お金掛けちゃってるの。

見られたくない傷を隠したい気持ち、

それを何とかおぎないたい気持ちが、そうさせるのかも。」

『なんとなく、気持ち分かるよ。』

「ありがとう・・・。」

『でも、これなんか、セクシーっぽくて、いいよね。』

「ちょっとー、せっかく洗濯したのにー、返してよ！」

『ほかには、どんなの有るの？ ひもパンとかは？』

「調子に乗るなよ！。でも、友達に貰ったのが有ったかな？」

『見たい！見たい！ 遥のひもパン姿見たーイ！』

「そんなの、はかないし、どこか行っちゃったよ。」

『じゃー、俺が探すよ！ このタンスだよねー。』

「ちょっとー、やめてよー。信じらんない！ 普通、タンス開けるか？」

『でも、どこだか分かんないんでしょ？ それじゃー。』

「分かったよ。ちょっと待って・・・。」

次の展開が、想像ついていたので、どこかに行っちゃったと、言ったのですが、

出さない訳に行かなくなり、「有ったよ。」と告げると、結局、はかされることに・・・。

奥の部屋で着替えて、下着姿で出て行くと、恥ずかしがる私をじっと見て、

『お尻、丸出しじゃん！そんな子はおしおきだよー。』とか、言っ
て襲ってきました。

嫌がる私の抵抗虚しく、また、されてしまった私。

でも、いったい彼は日に何度すれば、気が済むのだろう？

今まで恋人がいなかったことの反動？

こんなことを、毎日繰り返していたら、そのうち私とのHに飽きて、もしかして、私のことを早く飽きてしまうかもしれないなーと、不安を感じてしまいました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第47話：同棲最初の朝

同棲生活にプライバシーは、ないのでしょか？

愛し合っていれば、そんなものないのですか？

すべてオープンな生活。

私には、難しいかも……。

次の朝、目が覚めると、ショック！

「たーいへん！ 遅刻するよ！」

慌てた私の動きで、彼も目を覚まして、触ってきました。

さすがに今日は仕事なので、「だめー！！」

私は、強行に起き上がり、顔を洗いました。

「もー、早くしないと、遅刻するよ！」

それから、もたもたしている彼を手伝って一緒に朝食を摂り、片付けました。

そして、トイレを済ませて出てきたら、すぐに彼が入ろうとしたので、大騒ぎ！

「キヤー、ダメー！　ちょっと待って！　何ですぐに、入るのよ！」

『何でって、出て来たから……。』

「どこかに、消臭スプレーなかったけかな？」

あゝわかんない！　もう、香水でいいや！」

【プシュー、プシュー、プシュー、プシュー、プシュー。】

「撒き過ぎたかな？　まーいいや。」

『もう、我慢できねー。　入る！』

【　ボタン　】

『クセー！　何だよ、この臭い！　ゲホッ、ゲホッ！』

約5分後。

『気持ちワル〜。』と、言いながら、彼がトイレから出て来ました。

「女の子の後に、すぐ入ろうとするからだよ！」

今度から、あなたが先に入ってよね！」

『何だよ。トイレくらいで、騒ぐなよ。遥のなら、全然平気だよ。』

「そつちが、平気でも、こつちは、嫌なの！」

慌しい同棲生活の最初の朝を、なんとか切り抜けて、バイクに乗り、職場の人に気付かれぬように、時間をちよつとだけずらして、職場に着きました。

そして、朝会が始まりました。

朝会はいつものように、終わりましたが・・・問題勃発！！

中根君のそばに居た人が、余計にも、

『お前、女物の香水の匂いがするぞー。』

『朝から何して来たんだよー。』と、言い寄っていました。

（あつ！ やばい。なんで、気が付くんだよー。）

私は、知らぬ顔して、スタスタと持ち場に逃げました。

今日は、西田さんと1日、梱包作業でした。

例によって、おしゃべり好きの西田さんが寄って来ました、

『中根君、おとなしそうで、なかなかやるわよねー。』

「何がですか？」

『だって、朝から女の香水の匂いがしてるのよ。』

女のところ泊まったに、決まってるじゃない!』

「朝の満員電車で、匂いが付いたかも知れないですよ。」

『それは無いわよ!　だって、今朝、バイクで来る彼と会ったし、電車で付いたくらいの匂いじゃないわよ。』

「そーかー・・・可愛い顔して、よくやりますよね。」

『あんだ、あの子が可愛いと思うの?』

そう思ってるのは、私だけかと思ってたわよ!

そう言えば、あんた達、仲いいもんね!。何か、聞いてんじやないの?』

「いいえ、何にも、聞いてないですよ。」

同じ会社で一緒に入ったから、話しやすいだけですよ。」

『私、今度、飲み誘おうと、思ってるのよね。　来ると思っ?』

「無理ですよー。」

『何でさ?』

「だって、西田さんって、29でしょ。彼は、22ですよ。」

それに、香水の相手が居るみたいじゃないですかー。」

『あんたも言うわね！ 香水の相手って、あんたでしょ。』

「ち、違いますよ！ だれが、あんな人。」

『そう。じゃー、今度誘って、遊んでみーようっと。』

「そうですかー・・・。」

（なんだ、隆志って、案外もてんじゃん。

彼女いなかったなんて、嘘かもしれないな！。

でも、西田さん、おっぱい大きいし、年の割には子供っぽいし・・・。

・・・ ちよつと、心配かも。）

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第48話：社員食堂

暴力は、いけないこと。

そんなことは、誰でも知っている。

でも、国家間紛争の最後の解決手段は戦争。

人間は、結局、暴力を認めているの？

この日、私のことで、暴力が起きてしまいました。

西田さんのおしゃべりに耐えて、やっと、お昼休みの時間になりました。

私はいつものように、隆志と食堂に向かいました。

そして、いつものように私たちのグループが陣取ってる場所に近づいていくと、

丸山さんがいました。

先週までの私ならば、喜んで隣に座って、楽しいお昼休みを過ごしていたのですが、

今日は、顔も見たくありません。

しかし、その気持ちは、一緒にいた隆志の方が強かったようでした。

隆志は、丸山さんを見るや否や隣に立ち、『外に出ろよ!』と、言い寄りました。

丸山さんは、無視を決め込んでいる様子で、反応しません。

私は、隆志に、「もういいよ! 向こうへ行こう。」と、彼の腕を引っ張りましたが、

隆志は、無視している丸山さんの態度にも腹がたったようで、

丸山さんの腕を掴み、引っ張りました。

丸山さんも仕方ない感じで立ち上がり、言いました。

「何だよ! 青山とのお前にとにかく言われる筋合いは、ねえよ!」

それを聞いて、隆志が興奮して、言いました。

『俺は、青山が好きなんだよ!』

丸山さんは、馬鹿にしたような顔で言いました。

「そーかよ!それなら、いいこと教えてやるよ!

青山の右のおっぱい、パット入りの偽物だぜ!

ペチャンコで、ミミズみてえな傷が有って、乳首までねえでやんの

！
」

私は、聞いていられなくて、両手で耳を塞ぎました。

すると、次の瞬間、丸山さんが殴られて、倒れ込みました。

そこには、隆志ではなく、こぶしを握った池田君が、立っていました。

「お前みたいな奴は、とつとと、うせろ！」

丸山さんは、顔を押さえて立ち上がり、「お前ら、バカじゃねーの？」と、

言って食堂から出て行きました。

周りの人達は、食事の手を止めて見ていましたが、

丸山さんが出て行くのを見ると、何事も無かったかのように元に戻りました。

私は、突っ立っている池田君に言いました。

「何で、そこで池田君が出て来て、いきなり丸山さんを殴るのよ！」

「だって、ひどいこと言ってたし、青山を見たら泣きそうな顔してたし……。」

「だからって、いきなり殴らなくったて……。」

おいしいところを横取りされた感じで、隆志がむっとした顔で言いました。

『そうだよ！ いきなり殴るのは、良くないよ！』

僕が奴と話してたんだから、出てきて欲しくなかった。』

冷めた感じで、池田君が返しました。

「何言ってるんだよ。けんかしたこともないくせに。」

繭をしかめて、隆志が言いました。

『何だとー……。殴ればいって問題じゃないだろ。』

あれじゃ、あいつは反省しないし、青山にだって、謝らないよ。』

池田君が、呆れた顔で、言いました。

「丸山が反省すると、思ってるの？」

20歳過ぎたら、人間の性格なんて固まっちゃってるんだよ。

反省するような奴は、はなっから、そんなことしねえよ！」

私は、聞いていられなくなり、割って入りました。

「もうやめてよ！ 私、もう行く！」

隆志が、私を止めようと思いました。

『待てよ。めし食ってないじゃん。』

私は、泣き出しそうな気持ちで、我慢して言いました。

「知らない。大きな声で言うから、回りの人まで私の胸のこと聞いちゃったし、

さつきから、みんなが私の胸をチラチラ見てるの分かるもん。もう、居られないよ！」

ごめん！ そんなつもりで、見たわけじゃないんだ。

小林君が、頭を下げながら言いました。

ごめんなー。俺も、つい目がいつちゃただけで……。

山川さんが、頭をかきながら、言いました。

「いいよ。別に責めてるわけじゃないし、2人だけじゃないから。」

何を思ったのか、隆志が言い出しました。

『この際だから、言うけど……。』

青山って、乳がんの手術して、右胸が無いんだよ。

彼女凄く悩んでて……。』

私は、言葉を遮る様に言いました。

「やめて！ 何でそんなこと、みんなに言うのよ！ 隆志のばか！」

私は、食堂を飛び出して、外にあるベンチに腰掛けると、泣き出してしまいました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第49話：外泊

私が、外のベンチで、泣き止んでうなだれていると、

手に、サンドウィッチと、缶ジュースを持った、池田君が、私の前に立ち止まりました。

『ごめんな！ 事情も良く知らないのに、勝手に手を出して・・・。

それに、中根の奴も、青山のことと思って、話したと思うんだ。悪気は無いよ。

それでも食べて、機嫌直してくれないかな？』

「いらないわ。向こうに行ってくれる？」

『そうだよな。あれだけの事があって、簡単に機嫌が直る分けないよな。』

「そう思うんだったら、さっさと行ってよ。」

そうこうしていると、隆志まで、やって来ました。

『そんなに怒らなくなっただけいいじゃん。

みんな仲間だし、病気なんだから、隠さずに堂々としてればいいじゃん。』

「隆志は、分かってくれていると思ったのに・・・。

何であんなこと言うのよ！ もう知らない！」

私は、立ち上がり、逃げるように更衣室へ歩きました。

追いかけてきた池田君が、途中で、私の前に立ち塞がりました。

『食べないと、からだに毒だよ。』

そう言うと、私の手に、サンドウィッチと缶ジュースの入った袋を持たせて、行ってしまいました。

更衣室に行き、お化粧を直していると、気分も落ち着いてきて、

外のベンチで、池田君からもらったサンドウィッチと缶ジュースを口にしました。

食堂で起きたことから、今までのことを思い起こしていると、

何となく、池田君の優しさを感じました。

お昼休みも終わり、気分を変えて、持ち場に戻りました。

少しすると朝から一緒に仕事をしている西田さんが、近寄って来て、話掛けました。

『あんた達、食堂で何してるのよ。』

それに、聞いたわよ。

中根君、あなたのことが好きだって言ってたじゃない。

あなたの乳がんのことも知ってるし、あなた、中根君におっぱいを見せる関係だったのね。』

「ち、ちがいますよ！ そんなんじゃないですよ！」

『まーいいや。朝言ってた、飲みに誘う話、あなたから、彼に言ってみて。』

そういう関係じゃないなら、平気でしょ？頼むわよ！』

彼女はそう言うと、私から少し離れて仕事を始めました。

普通に聞いていたら、あたまにきちゃうことでしたが、今の私には、そんなことよりも、

隆志が、私が思っていた人と違っていたんじゃないかと、不安な気持ちでいっぱいでした。

おしゃべりの西田さんも、あれっきり何も言って来ないで、

目を合わすこともありませんでした。

気の重い時間もゆっくりと過ぎてゆき、1日の仕事も終わりました。隆志に会わない様に、早く着替えを済まして、バイクにまたがりました。

もう隆志と寝る気になれないので、親友の涼子のマンションへ泊まることにしました。

隆志には、まだ、合鍵を渡していなかったので、入ることは出来なかったのですが、

入れなければ自分のアパートへ戻ると思いました。

彼の顔を見るのも、声を聞くのも、嫌な今の私でした。

涼子に電話して、着替えを持つとすぐにアパートを出て、涼子のマンションに向かいました。

何度もメールや電話が来ましたが、隆志からだと思い無視していました。

でも、涼子の部屋で落ち着くと、

やっぱり気になり、涼子がお風呂に入っている時間に、携帯をチエックしました。

P M 6 : 0 5

「遙、ごめん。みんなの前であんなこと言ってしまっ

P M 6 : 5 4

「何で、電話に出ないんだよ。メールでもいいから、返事くれよ。」

P M 7 : 2 3

「鍵無くて、入れないよ。待ってるから、早く来て。」

P M 7 : 5 1

「もしかして、帰らない気？ でも、俺待ってるから。」

P M 9 : 0 3

「この辺って、静かなところだね。会いたいよ。反省してます。」

P M 1 0 : 0 5

「昨日は、このドアの中で、2人楽しく過ごしたのに、

今日は、このドアの外で、一人きり。本気で、怒ってるんだね。悪かったよ。」

何で、自分のアパートに戻らないの！

こんなことして、私の同情を誘う作戦？

もー、帰れっーの、ばか！

でも、隆志があんな場所で、あんなことを言い出す人だと思っていなかったよ。

もっと、深いところで、私のことを解ってくれていると思ってたのに……。

それって、独りよがりなことだったのかな。

同棲2日目で、別居か。

私の気持ちが本気で冷めかけてるかも・・・。

返事返さないと、この恋、終わるかもしれない。

どうしよう・・・。

・・・。

でも、やっぱり、いきなり私を理解してもらうなんていうのが、無理なことなのかも。

話し合って、少しずつ分かり合えばいいのかな・・・。

返事返さなきゃ。

メールを打ち始めたときに、涼子がお風呂から、出てきました。

『誰に、メールしてるのかな？ 喧嘩してる彼氏でしょう？』

私が悪かったわ。私を捨てないで。てか？』

「そんなはずないでしょ！ 向こうが悪いんだから。

メールなんかするわけ無いじゃない。」

結局、返事は出来ませんでした。

明日、職場でどんな顔して会ったらいいんだろう。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のもので
す。)

第50話：手紙

けんかをすると、仲直りが大変ですね。

どちらかが、明らかに悪いと、分かっているなら、

折れることもあるのでしょうか・・・。

でなければ、意地の張り合い。

場合によっては、そのまま・・・。

私がどんなに悩んでいても、時間は止まること無く、朝が来ました。

自分でどうして良いのか分からないまま、工場に着きました。

職場のミーティングの前に、隆志は私の顔を見るなり近寄って来ました。

私は、気まずい感じがして、逃げたくなりましたが、

彼は、私の手に手紙を渡して、戻って行きました。

もしかしたら、彼も怒っていて、「別れの手紙」かもしれない。

とか、思っけしまい、急に落ち着かなくなりました。

でも、こんな場所て広げて読むわけにもいかずに、

いろいろ考えながら仕事をする事になってしまいました。

仕事は、今日も1日、西田さんと一緒でした。

また、何か言われる気がして、少し凹みました。

そして、持ち場に着くと、早速一言。

『中根君に、飲みに行く話してくれた？』

「えゝ、まゝ。」

『何よ、まだしてくれてないの？』

「彼女に悪いから行かないと、言っていましたよ。」

もちろん、昨日は、隆志と話などしているはずもなく、嘘でした。

でも、多分、隆志は、そう答えるだろうと思って答えました。

『そう。でもさー、彼女って、あなたでしょ？』

「えっ。まゝ。そのゝ。」

『なんかハッキリしないわね！ 本当に行かないって言ったの？』

いいわ、ちょっと聞いてくる！』

西田さんは、そう言うと、隆志の方へ行ってしまいました。

（社員だからって、何よ！あの態度。むかつく。）

少しすると、西田さんが、なんとなく微笑みながら帰ってきました。

私が気にしているのを、気が付いているくせに、

わざとそのまま何も言わずに、仕事を始め出しました。

（もー何で何にも言わないのよ！気になる。）

「あー、何て言っていました？」

『彼女じゃないなら、関係ないでしょ！』

「・・・・・・・・。」

『まーいいわ。教えてあげる。今日、飲み行く事になったわよ。』

「えっ・・・・・・・・。」

『さあー。仕事、仕事！今夜は楽しくなりそうだわ。』

彼の顔も見たくないはずの私でしたが、急に力が抜けてしまいました。
た。

何とか仕事をこなし、待ちに待った5分間の休憩です。

急いで外に出て、隆志から渡された手紙を開きました。

そこには・・・。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第51話：意地っ張り

それほどの事でもないのに、

なんとなく、意地を張る事ってありませんか？

そのことで、思わぬ方に事が向いてしまい、

こじれて、こんなはずじゃなかったのにと・・・。

どうも私は、意地っ張りのようです。

手紙を開くと、そこには、

「どうして、電話に出ないんだよ。メールの返事もくれないし。

今日昼休みになったら、すぐにバイク置き場に来てよ。」と、書いてありました。

もしかして、別れ話がかかれていたのかなと、心の片隅に思っていた私は、なぜか、

ほっとしました。

チャイムが鳴り、仕事になりましたが、私は、どうしようか考えていました。

食堂での出来事もそうでしたが、西田さんと飲みに行くなんて、ありえません。

それも、私とこんな状態の時に。

そうこうしているうちに、お昼休みのチャイムが鳴りました。

結局、私は、みんながいつも居る定食のフロアではなく、そば&うどんのフロアに、

1人で行きました。

そう、隆志の待っているバイク置き場にも、行きませんでした。

うどんを食べ終わると、席が沢山空いていたのでそのままそこで、

携帯電話をチェックすることにしました。

昨日の夜、見た後にも、入っていました。

P M 11:16

「遥、どこにいるの？心配です。連絡欲しいよ。」

A M 12:07

「許してくれないの？ 100%僕が悪いの？」

A M 1:40

「返事してくれないと、解決しないよ。」

AM 3:00

「もしかして、このまま別れるつもり？」

AM 4:07

「付き合い出したばかりなのに・・・。」

AM 5:36

「明るくなってきちゃった。一体、どうするつもりなんだよ。」

AM 7:08

「そろそろ、仕事に行かなきゃ。なんか、つらいよ。」

結局、自分のアパートに戻らなかったのか。

それに、寝てないんだ・・・。

でも、私が悪いんじゃないもん。

私が、携帯電話に気を取られていると、隣に誰かが座ってきました。

『こんなところで、1人で何してるんだよ。』と、池田君でした。

「ん・・・。」

『昨日の事で、みんなに顔合わせるの辛いだろうけど、みんなちゃんと分かってるよ。』

それに、中根がひどく落ち込んでるんだよ。

青山を探して、あちこち行って落ち着かないし、会って話してやってくれないかなー。』

「中根君、何か言ってた？」

『電話かけて謝っても許してもらえない。って言ってたけど。』

「それだけ？」

『うん。そうだけど。他に何かあったの？』

「うーうん。別に。」

『じゃー、行こう。』

「行かない。」

『どーして？』

「どうしても。」

『みんなに何て言えばいいんだよ。』

「適当に……。じゃー。」

私は、食堂を出て、隆志が来ないような場所のベンチに座って、

仕事の時間まで考えていました。

そして、お昼休みの終わり3分前になったので、仕事場に向かいま

した。

仕事場の扉を開けようとしたところ、後ろから誰かに腕を掴まれました。

振り向くと、隆志でした。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称、名称は架空のものです。)

第52話：西田さんの嘘

「嘘」には、ついて良い「嘘」と、悪い「嘘」があると云われます。
本当にそうでしょうか？

人を悲しませない為の「嘘」が、ついて良い「嘘」？

「嘘」が、ばれた時に、その人は、どのように思つのでしょうか？

周りの人を明るくさせる「嘘」は？

今回、私は、西田さんに「嘘」をつかれました、

私は、その「嘘」のせいで、振り回されました。

隆志は、私の腕を掴んだまま言いました。

『何で、来なかったんだよ！』

「もう仕事、始まるから、行かないと。」

彼は、行こうとする私の腕を放しませんでした。

『仕事なんて、どうだっていいよ！』

「放してよ！ もう行かないと！」

『放さないよ。また、会えなくなるだろ。』

隆志は、こう言うと、私を引き寄せて、抱きしめました。

「こんな所で、何やってるのよ!」

私は、隆志の胸を押して、すぐに離れました。

『どうすれば、許してくれるんだよ!』

「許して欲しい人が、何で今日、西田さんと飲みに行くのよ!」

『何のことだよ。』

「さっき西田さんと、約束したくせに、とばけないでよ!」

私は、ドアを開けて、担当エリアに、小走りで向かいました。

隆志は、『ちょっと、待てよ!』と、言いましたが、

考え込んでそれ以上は、追ってきませんでした。

持ち場に着くと、西田さんが、近づいて来ました。

『あなた今日、仲間と一緒に居なかったじゃない。』

中根君も居なかったけど、二人で仲良しランチタイム?

いいわね!。仕事は半人前なのに、昼間から、ラブラブで。』

「違います。彼とは、喧嘩していて、そんなんじゃ有りません。」

『あらっ、そう？』

「今日、西田さんと飲みに行くことで、

余計に変なことになっちゃったんですよ！」

『えーっ？ あなた彼に聞いてないの？』

ほんとに喧嘩してたんだ。もしかして、昨日の食堂での騒ぎのせい？』

「そうですけど、もういいです。」

『飲みに行くのは、嘘よ。』

中根君は、好きな彼女がいるから、他の女性と飲みになんて行けません。

って、きっぱり断ったわよ。ちょっと憎らしくて、冗談で言ったのに……。』

「えーっ！ 飲みに行かないんですか？」

『何だか、二人はうまくいってないのね！』

こんな冗談で、ガタガタするなんて。

本気でくどいちやおつかしら？ さあー仕事、仕事。』

「ガァーン！ 何て、こったー！」

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第53話：仲直り

参ったなー、彼に何て言おう？

でも、そもそも怒ってる原因は、西田さんとの飲み会の事じゃなかったし……。

だけど、このまま知らない顔は出来ないし……困ったなー。

こんな事を考えながら、仕事をしていると、終了のチャイムが鳴りました。

私は、着替えを済ませると、いつものようにバイク置き場に向かいました。

すると、私のバイクに股がってる隆志がいました。

『よっー。お疲れ様！』

「……………」

『その顔じゃー、さっき言ってた西田さんとの事が、違っって分かったんだな？』

「……………、うん。」

『それじゃー、もう、怒ってないね？』

「違っでしょ？ だって、この事と食堂の事とは、別でしょ？」

『そうだけど、何度も謝ってるじゃん。もう、許してよ!』

「本当に悪かったと思ってるの?」

『思ってるさ。僕には、遙しいないから。』

別れるなんて言われたら、どうしようかとずーっと思ってたよ。』

「そっかー。んー、私も誤解してたし、正直、別れたいとも思っていないし……。」

なんか西田さんとの飲み会のことで、食堂のことが薄れて来ちゃったし、もういいかなー。」

『良かったー。よし、仲直りということで、飲みに行こう!』

「何言ってるの? バイクでしょ?」

『一旦、家に帰って、ほら、そばに居酒屋あるじゃん!』

クリーニング屋のそばに、赤ちようちんがぶら下ってて……。』

「あー、有った気がするー。」

『自分ちのそばなのに、覚えてないの?』

私たちは、彼の言うように、一旦アパートに帰り、バイクを置いて、歩いて5分ほどの居酒屋に行きました。

彼は、うれしかったのか、相当酔っぱらって、まともに歩けなくなり、

連れて帰るのが大変でした。

何とかたどり着き、部屋に入ると、彼は、そのまま倒れこみ、寝てしまいました。

抱えてベッドに寝かせようとしたが、重くて動きません。

仕方なく私は、その場で彼にタオルケットを掛けると、お風呂に入りました。

お風呂から出ると、パジャマを着て、ベッドで寝るつもりでしたが、あどけない顔で眠っている彼を見ると、自然に、「ごめんね。」と言いたくなり、

彼の耳元でつぶやきました。

そして、彼に掛けたタオルケットに入り込んで、寄り添い、

一緒に畳の上で寝てしまいました。

私たちは、これから1ヶ月程は、毎日仲良く楽しい日々を送りました。

ただ、私には、一つ気になる事がありました。

予定の日が、とっくに過ぎているのに、アレが来ないのです。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第54話：池田君との約束

ある日、食堂で、池田君が話し掛けてきました。

『あしたの約束、忘れてないよね？』

「えっ？ 早園麻紀のライブ、あしただけ？」

『そうだよ！ 行けるよね！』

「うん！ 大丈夫、行こう！」

『良かったー。最近、中根と仲いいから、行けないと言われるかと思っただよ。』

「約束は、ちゃんと守るよ！」

『忘れてたくせにー。』

「忘れてないよ。この前だって、話してたよね。中根君？」

隆志が、少し曇った顔で、答えました。

『あー、楽しんできなよ。』

「ありがとう！ じゃー池田君、どうしたらいい？」

池田君は、しっかりと予定を考えていたようで、朝10時の待ち合わせとなりました。

ライブは、夕方からなのに、いったいどうするつもりなのか・・・？
それと、おかしい注文が・・・ジーンズをはいて来てだと。

別に、それは、大したことじゃないので、気軽にOKしましたが・・・。

次の日に、待ち合わせの場所に行くと、満面笑みの池田君が待っていました。

「おはよー！」

「やったー！ 青山とまる1日、2人きりのデートだ！」

「デートじゃないでしょ？ ライブ行くんでしょ？ そんなに、はしゃぐかな？」

「はしゃぐさ。初めて会った時から、好きだって言い続けてきて、

大好きな麻紀ちゃんのライブに、一緒に行けるんだぜ。」

そして、彼に連れられて行った場所は、コスモワールド遊園地でした。

「早くから待ち合わせするから、どこに行くのかと思ったら、遊園地ですか。」

『遊園地、嫌い？』

「ん〜ん、好きだよ。」

『そうだよね。この前も、楽しそうだったから。』

俺さー、好きな人と観覧車に乗って、キスするの夢だったんだ。』

「あ、そっ！ でも、勘違いしないでよね。私は、あなたの彼女ではありませんから。」

変な事しようと思ってるなら、帰るからね。」

『違うよ！ そんなことしないよ。一緒に楽しんでくれれば、それでいいんだ。』

彼は、子供のように私の手を引き、次々と乗り物に乗りました。

隆志に対して、ちょっと後ろめたい気持ちもありましたが、

私も、遊園地は好きで、楽しく過ごしました。

少し遅いランチも摂り、そろそろライブを行う有楽町の国際フォーラムに向かうのかな

と思いきや、ベンチに座り、彼はカバンから何かを取り出して、私の後ろに立ちました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第55話：早園麻紀ライブ

彼は、私の後ろに立つと、

『髪型を、麻紀ちゃんスタイルに変えてもいい？』と、聞いてきました。

私は、それまで楽しかったので、あまり考えずに「いいよ。」と、言いました。

彼は、慣れない手つきで、ポニーテールのような形にして、ニンマリ満足気。

私は、ちよつと違和感もありましたが、こんなのも有りかな？と思いました。

そして、いよいよ会場に着くと、長い列が伸びていました。

私は、歩いていると、何か見られているような感じを受けました。

このヘアスタイルとジーンズのせいでした。

そう、彼は私に、早園麻紀のコスプレをさせていたのです。

彼いわく、顔も似てるとのことなので、当然回りに居る麻紀ファンは、見る訳です。

中には、近くに寄って来る人もいて、ちよつと迷惑。

「シツシツ・・・向こう行けっ！」

でも、彼は、ニコニコうれしそう。

早園麻紀と一緒に居る気分になって、優越感に浸ってるようでした。

これが、コスプレ心理というものなのか？

「男って、バカ???」

会場に入ると、今度は、グッズの販売の列に並んで、彼は、なにやら色々と買い込みました。

「あゝ私の好きなレインボーのグッズは無いかな？」

『有るわけねえ!』 音速の突っ込み! そんなに真剣になるな!

座席に着くと・・・「おゝさすが、3列目、チョー近い!」

池田君は、パンフレットを広げて、うれしそうに見ている。

おいおい、私を放って置くのかい？

放置プレイがお好み??

私はというと、相変わらず、周囲の人に、チラチラ見られていて、

ちょっと落ち着かないなと、思っていたら・・・。

隣に大学生ばい3人組みが座った。

すると、「やっぱり、そのヘアスタイルいいですね!」と、突然
言われて、びっくり。

「はっ? はい。」と、きょとんとした返事。

こんなことをしていると、照明が落ち、演奏が始まりました。

そして、場内大合唱で、麻紀ちゃん登場!

「ちょくかわくいつ!」

清涼感いっぱい漂うボーカル。

ダンサーをまじえてのアップテンポな曲。

アカペラ調で聴かせる、スローバラード曲。

そして、お馴染みのヒット曲。

なんとなく不器用そうな踊りと、はにかんだトーク。

何度も「ありがとう。」を繰り返し、嘘のなさそうな誠実さが伝わる態度。

正直あまり関心の無かった私でしたが、ファンを大切してるのを実感して、

すっかりファンになりました。

約2時間のライブも、あっと言う間に終わり、

「終わっちゃったねー。」と動き出そうとする私を、

池田君は、『まだいいよ、すぐまで座ってよう!』と、私を止めました。

そして、いよいよ人も少なくなり、歩きだして、ロビーに出ると、また、ソファーに座りました。

『トイレとかは、大丈夫?』の言葉に、「それじゃー」とトイレへ。

戻って来ても、池田君はいつこうに動く気配なし、

「まだ行かないの?」の問いに、『まだ、終わってないよ。』の返事。

わけのわからないまま待っていると、係員の人の声が・・・

池田君が、「さあ、行くよ。」と立ち上がりました。

他にも、同じように20人くらいが歩き出して、部屋に案内されました。

そこには、な・な・なんと! 早園麻紀ちゃんが・・・!

「本日は、どうもありがとうございました。」

と、ひとりひとりと、握手をしました。

そして、私にも、髪型を見ながら・・・『アッ！ どうもありがとうございます。』

私は、ただ、ただ驚いて、「ライブ、とても良かったです。」の返答。

池田君は、ちゃっかりプレゼントを渡して、おしゃべり。

最後にこんなサプライズが、有ったとは本当にびっくりしました。

麻紀ちゃんはファンを大事にしているんだなーと実感しました。

池田君が夢中なもの、納得したライブでした！

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第56話：産婦人科へ

早園麻紀のライブで感動した休みも終わり、新たな1週間が始まりました。

月曜日も普段と変わりなく過ぎて行きましたが、以前から気になっていたことが、

急に不安になって、明日お休みを取ることにしました。

そう、産婦人科に行く事にしました。

自分で調べたところで、たぶん病院に行く事になるだろうしと、決めました。

家に帰って、電話帳で近所を探してみました。

評判とかも知らないので、個人医院よりも、大きな病院の方が安心かなと、思い、

近くの総合病院に決めました。

取り合えず彼には、風邪で病院に行くと、嘘をつきました。

彼がどう思つか心配だったし、違っていたらバカみたいなので・・・。

次の朝、やっぱり、憂鬱・・・。

結果の心配もあるけど、診察がイヤ。

バイクに股がり、クウォーン！クウォーン！ いざ出陣！

いつもなら、10分もかからないのに、15分を越える安全運転。

いえいえ、考え事をしながらの、安全運転義務違反運転。。。

初診でもあり、やっぱり大きな病院は待たされる。

おなかの大きな人もいっぱい居て、私もあーなるのかもと、やっぱり憂鬱。

『青山遥さーん。』

「はい。」

『中へどうぞ。』

「はい。」

ドアを開けて、中へ。。。

「宜しく願います。」

と、顔を上げると、そこには。。。

イケメンの先生が。。。

（えっ、この先生に、診られるのかお、帰りてえお。）

少しお話をして、あの診察台に乗ることに……。

違うことを考えていれば、すぐに終わると、自分に言い聞かせていたけれど……。

あっ・あっ、いけませぬ、お代官様

と、バカな事を考えているうちに……終わった。

そして、先生とご対面。

イケメンと、診られた恥ずかしさ、そして結果に、妙に変な緊張をして、ガチガチ。

先生が、カルテの手を止め、こちらを向きました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第57話：妊娠

『2ヶ月目に入ったところですね。』

「そうですか・・・。」

やっぱり、どうしよう。

先生は、ほかにも何か言ってたけど、全然耳に入って来ませんでした。

とにもかくにも、現実には、はっきりしたわけで・・・。

私のおなかには、隆志との・・・新しい命が、生きている。

これから、どうしよう。

子供が欲しいって、言っていたけど、本当かどうか・・・。

ゴムを着けなくなっただけかもしれないし・・・。

本当に妊娠したことを知って、隆志は何て言うのだろう・・・。

隆志にどうやって話そう。 何て話そう。

子供が欲しいって云う彼の言葉を信じて、率直に言う？

妊娠を知って、離れていった男の話なんて、五万とあるし。

だったら、おろす？

ばか。そんなこと、出来るはず無い。

何て言おう？

ずっと、そのことばかり考えました。

ここに居ても、仕方ない。とりあえず、家に戻るか。

妊婦には、当然良くないバイクに股がり、家に戻りました。

テレビを見ても、目が見ているだけで、頭の中は、ずっと同じことを考えていました。

お昼ご飯を食べる事も忘れて、隆志がおろせと言ったら、どうしようとか・・・。

私が、産むと言って、けんかになったらとか・・・。

不安な方向にばかり考えてしまう・・・。

段々と、隆志の帰ってくる時間が近づくにつれて、落ち着かなくなってきました。

考えがまとまらないまま、私は、パニック状態になり、バイクに股がり、家を出ました。

あてもなく走り始め、なんとなく山下公園に来てしまいました。

暗くなった公園は、カップルの楽園となっていました。

船を眺めて、ボートと、していましたが、

こんな所、返って落ち着かなくなり、家に帰りました。

「ただいまー。」

『お帰り！ 風邪は大丈夫なの？』

テーブルの上には、オムライスとロールキャベツが有りました。

私がしなきゃいけないのに、いつもちゃんと料理をしてくれる。

疲れて帰って来ているのに、いつも笑顔でいてくれる。

「隆志・・・いつもありがとう。」

『あー。どうした？ さあ、食べよう。』

私は、胸が苦しくなり、泣き出してしまいました。

『どうした？ 何か有ったの？』

「んーん。何でもない。」

隆志の作ってくれたオムライスを食べながら、話しました。

「今日、病院行ってきたの。」

『うん。風邪だって?』

「違うの。産婦人科・・・。」

『えっ?』

隆志の箸を持つ手が止まり、隆志の目が私をみつめました。

(つつく)(登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第58話：幸せな食卓

思い切って、言うことにしました。

「妊娠したの。2ヶ月目に入ったところだつて。」

相当悩んだ割には、軽い感じで言ってしまった。

次の瞬間、隆志は立ち上がり・・・。

その次の瞬間、隆志の両手は、私の両手を掴んでいました。

『ほんとに？　ほんとに？』

「うん。」

『やったー！！　僕に子供が出来たー！』

イヤイヤ、出来たのは、遥だから・・・。

遥のおなかに、僕との子が出来たー！！』

「うれしいの？」

『当たり前じゃないかー。そーだ！　結婚しなきゃ！』

お腹が大きくなる前に、結婚式挙げなきゃ！』

「産んでいいの？」

『いまさら、何言っちゃってるんだよ。　僕が、子供欲しいの知ってるくせに。』

「そんなの、ハッキリ言ってくれなきゃ分かんないよ！」

『ハッキリ言ってたよ！　それに、遥と結婚したいって、何度も言ってたじゃん！』

「そうだね。そうだね。子供、欲しいって言ってたね！」

何で、私ったら、信じられなかったんだろう。

私の目から、大粒の涙が溢れ出しました。

『何、泣いてんだよ？』

「もしかしたら、子供はまだ要らないって、言われるかと思っててさ。」

『そんなわけないだろー！　遥と僕の子だよ！

どんな顔してるんだろうな？』

そして、私は、おなかに手を当てて言いました。

「良かったね、マイベイビー、産まれて来れるよ！

パパが、君に会いたいって・・・。」

緊張から解かれた私のほほに、涙が流れました。

『さーあ！　これから、忙しいぞ！

家族に挨拶しなきゃいけないし、式場や、仕事もしっかり決めなきゃ！』

「仕事って？」

『いつまでも、こんなことしてられないよ！

また、コックやろうと思ってるんだ！

今度は、ちゃんと投げ出さないようにさ。

遥と子供のために、しっかりしなきゃね！』

緊張で始まった夕食は、今までに無い、ばら色の食卓となりました。

色々あって、引きこもりぎみだった私に、やっと訪れた幸せの季節。

でもこの幸せは、そう長くは、続きませんでした。

そう、この電話から、すべては狂い始めたのです。

「隆志！　携帯鳴ってるよ！」

『うん！』

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第59話：隆志の転勤

『もしもし、中根ですが……。』

『はい……。はい……。えっ？ でも……。』

『どうしてもですか？ それは、ちょっと……。』

『仕方ないですね。分かりました。はい。お疲れ様です。』

『どうしたの？ 顔色悪いよ。誰から？』

『うん。うちの管理の中村さん。転勤してくれて……。』

『え、どうして？』

『なんでも、転勤先の山産株式会社で、

フォークとクレーンと玉掛けの資格を持つてる人が、欲しいんだってさ。』

『そうなんだー。でも、隆志じゃなくなつて……。』

『今いるところは、人数減らすんだって。だから、資格ある俺が行つて欲しいんだって。』

『せっかく、一緒に働けていたのに……。』

でも、コックになるんだったら、辞めちゃって、そっちの仕事を探

せば？」

『でも、急な話だし、きちんと調べて、ちゃんとしたところに、就職したいからな！』

慌てて決めて、また失敗するのは、絶対に嫌だからね。

お金も貯めなきゃいけないから、辞めて探すより、働きながら、探した方がいいと思うし。』

「そっかー。急な話って、一体、いつからのの？」

『あさって。今の場所は、明日が最後で、

あさって、次のところに面接に行ってくれたって。』

「えっっ！ そんな……ひどーい！ 急過ぎるよー！」

『んー、僕も、そう思っけど、仕方ないんじゃない。

派遣ってこんなもんらしいよ。

行ってみて、嫌なところだったら、辞めて就職活動してもいいし、

とりあえず、言われる様に見てみるよ。』

「そっかー、そうだね。隆志がそうしたいなら、それがいいのかもね。」

私たちに子供が出来たことで、楽しく盛り上がっていた食卓が、

急に重苦しい雰囲気へと変わってしまいました。

次の日、最後の仕事も終わり、隆志は、みんなに挨拶に回りました。

そして、その次の朝、隆志と私は、別々な職場へと行くことになりました。

いつもバックミラーに映っていた、隆志のバイク。

何度見ても、居る筈がありません。

いつも、時間差出勤工作のために、隆志がタバコを吸って、休んだ場所。

隆志のバイクが置けるように、隙間を空けて止めたバイク置き場。

そう、きのうまで、私の視界のなかで仕事をしていた隆志が、居ない！

好きになる前から、ずっと目に映っていた隆志。

私が困っていると、偶然をよそおい助けに来てくれた隆志。

恵まれていた環境って、壊れてから気が付くんだよね。

私は、隆志と話がしたくて、仕事が終わると急いで帰りました。

隆志は、面接をして、工場見学をして、実際に働くところに行つて、

説明を聞くだけだったので、先に帰っていました。

私は、ドアを開けて隆志の顔を見ると、飛び付いて泣いてしまいました。

『どうした？』

「ん〜ん。何でもない。」

隆志の顔を見ると、気持ちが落ち着いてきました。

「ねえ？ どんناところだった？ 仕事は、きつそうなの？」

『ん〜、仕事は、結構でかくて重そうな鉄の材料を、フークやクレーンで、

移動させるただけだけで、大した事ないけど、ちょっと遠くなるな！。』

「そっかー、でも、仕事が大変じゃなければ、良かったじゃん。」

もしかしたら、この時の仕事の感想が、気の緩みに繋がっていたのかもしれない。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第60話：結婚の準備

『遙は、結婚式をどこでやりたいの?』

「んゝ横浜がいいかなゝ、隆志は?」

『僕は、どこでもいいけど、早くしなきゃなー。どのくらい人呼ぶの?』

「えっ? んゝ、30人くらいかなゝ。」

『そっかーそれじゃー、合わせて、60人位の所かゝ。』

「日曜日とかは、どこも、予約でいっぱいじゃないの?」

『そうだよねゝ、でも、2ヶ月後くらいにはしないと、おなか大きくなるよなゝ。』

「お友達とか呼ぶ事考えると、やっぱり日曜日がいいしね。」

『仏滅とか気にする?』

「んゝ、どうかなゝ。私よりも、親戚の人達がねゝ。」

だったら、平日に式場で親族だけでやって、

日曜日に、お友達だけで、どこかで披露パーティするのはダメかな?」

『なるほどーそういう手もあるね。さすが歳上のことはあるな。』

「何よそれ！ ムカツク。」

『それじゃー、もしかして、空いてるところあるかもしれないから、ある程度、目星つけて今度の休みに、回ってみよう。』

「でもさー、結婚式よりも、親に挨拶する方が先じゃないの？」

『そっかー！ そうだね。まだ許してもらってないしな。』

それじゃー、今度の休みに、遥の実家に行こう！』

「あたしよりも、そちらの方が先じゃないの？」

『うちは、全然平気だよ。』

今まで、好きなようにしてきて、反対なんてされたことないしさ。

遥、連れて行ったら、可愛くてびっくりするよ！』

「でも、年上だし、乳がんの手術してるしね。気にしなくはないと思うよ。」

『そんなことないよ。・・・土曜に行くって、連絡しておくよ。』

そして、日曜日に、遥のうちに行こう。

遥さんを僕にください。 って、言いだね。』

「何言ってんだかぁ・・・。」

こんなに早く結婚するつもりなかったのにな。

もっと、隆志のこと良く知ってから考えようとしていたのに・・・。

いつの間にか、私も結婚したいと思うようになったよ。

赤ちゃんができて、後押しされちゃったみたい。

この先、上手く行くといいな。

そして、土曜日の朝がやって来ました。

私は、今までにないくらい緊張していました。

さすがの私も、ジーンズでバイクに股がっつて、とは行かずに、兄貴に頼んで車を借りました。

彼の実家は、栃木県。

往復5～6時間の運転は、すべて私。

殆ど運転したことの無い彼なので、当然と言えば、当然なんですけど・・・。

目的が遊びでない今日はちと辛い。

緊張すると、口数の少なくなる私。

往きの車内は、音楽が流れるだけの沈黙の空間でした。

そして、彼の実家に着きました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第61話：ご挨拶

車から降りて、いよいよ彼の実家の玄関前に立ちました。

そして、彼が玄関の扉を開けたら、私は、完全に固まりました。

『いらっしゃーい！　どうぞ、お入りになって！』

「は・は・はじめまして・・・青山遥と申します。

隆志さんとは、お仕事でいつも助けていただいて・・・」

『堅苦しい挨拶は抜きにして、さーどうぞ、お上がりください。』

「は、はい。　お邪魔します。」

靴を揃えて、上がると、和室に通されました。

隆志が色々と、私の事について、話し始めました。

しばらくすると、同棲していることも話し、

そして、お腹に居る赤ちゃんの話になりました。

さすがに、驚いていましたが、彼が説明しているうちに、

落ち着きを取り戻し、私にも、意見を求めてきました。

私は、愛している事、こどもが欲しい事、一生懸命である事を告げ

ると、

ご両親は、にこやかに、孫の誕生を喜んでくれました。

話は進み、隆志は、私の病気の事を、話し始めました。

この時、ご両親の顔色が、曇ったのを私は、感じました。

隆志は、私をかばって、色々がんばってる私の事を話してくれましたが、

お母様は、そんなことではなく、癌の転移、再発が心配のようでした。

隆志は、5年も経ってるし、そんなことは無いと言ってくれましたが、

実は、そのことを毎日心配しているのは、私でした。

手術をしてからの4年間、男性とはなるべく関わりを持たずに、

恋愛を避けていた理由は、胸を見られる恥ずかしさ、

見たことでの相手の感情の変化が確かに嫌だった事も有りましたが、

結婚のことを考えた時に、転移、再発の事が、心にのしかかっていました。

私の顔から、笑顔が消えたのを見て、お父様が、話し始めました。

『まー、ご本人が、一番苦しんでることだろうし、結婚してから、癌になって、

大変だから離婚しろと言うような親はいないし、

当人が納得してればいいんじゃないか？』

私は、重たい荷物を降ろしたような、ほっとした気分になりました。

でも、お母様は、浮かない顔で、「そーねー。」と一言。

今、聞いたばかりで、すぐに呑みこめる話でもないので、

結論を急がない事にしました。

お寿司を、頼んでいてくれたようで、色々お話をしながら、頂きました。

隆志が気を使って、帰るタイミングを計ってくれて、おいとまする事にしました。

どのように思われたか、少し心配でしたが、あせっても仕方のない事なので、

何度かお会いするうちに、打ち解ける事を期待するしかありませんでした。

そして、次の日は、隆志が私の実家に、やって来ました。

兄貴が、父親代わりとか、言っちゃって、同席しましたが、

兄貴は、以前に隆志の事が気に入って、私の秘密をベラベラとしゃべって、

隆志と私を結びつけた張本人でした。

母は、私が結婚しないかもしれないと、思っていたらしく、

孫の誕生のことも知って、終始にこやかに話していました。

そんな中、隆志が急にあらたまって、母と兄貴の前で正座をはじめました。

そして、

『遙さんを、私にください！』

遙さんの事を1番に考えて、悲しませるような事はしません。』

それを聞くと兄貴は、「よく言ってくれた、もってけドロボー」

まったく何言っただか・・・私は、呆れかえってしまいました。

しかし、感激している人・・・若干1名！

な・なんと・・・隆志が、兄貴の手を握り、涙を流しながら、

「ありがとうございます。」を連呼していました。

あゝこれが、ドラマで、よくあるシーンかゝ

とうとう、自分にこんなシーンが訪れたとは・・・・・・・・

イヤ違う！　なんか、違うぞ！

おい隆志、プロポーズ、まだだぞゝゝ！　指輪、くれゝゝ！

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第62話：事故の知らせ

なんとか、両家にご挨拶を済ませた私たちは、

次の休みには、結婚式場を回りました。

運良く中華街に近いホテルの2ヶ月後の日曜日が、

キャンセルで空いていました。

ラッキーとばかりに、すぐに予約を入れました。

メルパルクなどの公共施設よりは、費用は高くなりますが、

もうそんなことは言っていられません。

式場が決まると、色々決めなければならない事が、沢山出てきます。

また、打ち合わせのために、何度となく通わなくてはなりません。

これからの休みの日は、忙しい日々が続きそうです。

また、結婚を完全に許してもらったわけではないので、出来る限り隆志の実家にも行って、分かってもらうようにしなければなりません。

そのうえで、私の家族ともお会いして頂いて、

結納の話にもっていかなくては・・・。

そんなこんなで、毎日のように、結婚式の話をしている私たちでしたが、

ある朝、引き出物の事で、口喧嘩をしてしまいました。

そして、隆志は、職場が遠くなった分少し早く、

無言のまま仕事に出掛けました。

私は、「あーかんべー」で、送り出しました。

私も少し遅れて、いつものように出勤しました。

仕事も、ほとんど誰にも聞くことも無くこなせるようになり、余裕が出来ました。

山口さんや西田さんとも、なんとか波風なく接していました。

お昼休みになり、いつものように、みんなの居る食堂に行きました。

セルフサービスで、A定食を取り、仲間の居るテーブルに着くと、

池田さんが居ないのに気が付きました。

「池田さんは、今日お休み？」

池田さんと仲の良い小林さんが返事をしてくれました。

『管理の中村さんと会わなかった？』

「うん。会わなかったよ。」

『さっきまで、ここで話してたんだけど、中根が事故ったんだってさ。』

クレーンで吊っていた物の下敷きになって、

もしかしたら死んだかもしれないって。

中村さん真っ青になって、電話してたよ。

それで、池田が何を思ったのか、中村さんと一緒に、

中根の工場に行っちゃったよ。』

「うそっ！ うそだよ、そんなの！」

私は、目の前が真っ白になりました。

（つつく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第63話：手術

『大丈夫か？ 青山さん。』

小林さんが、顔色が悪くなった私を心配して声を掛けました。

でも、私の耳には何も聞こえてきませんでした。

少しすると、涙が溢れてきて、止まらなくなりました。

自分でも何を言ったのだから憶えていませんが、

急に歩き出そうとして、倒れてしまい、小林さんと

山川さんに支えられて、すぐ横の談話室の長いすに、横にされま
した。

10分程して、やっと落ち着いた私は、隆志の所に行く事に決めま
した。

足のふらつきも取れ、職場に行き、

職長さんに具合が悪いと言って、早退しました。

ぼーっとしていた頭が、段々とハッキリして来て、

「早く行かなきゃ」という焦りに変わりました。

バイクにまたがり、道に飛び出しました。

とても、普通に走れる心境ではなく、すぐに１００キロ以上出していました。

白バイやネズミ捕りなど、そんなこと気持ちから飛んでいました。

運良く捕まる事も無く、近くまで来ましたが、具体的に工場の場所が分からず、

どうしようか考えて、コンビニで地図を立ち見しました。

工場に着くと、守衛所で許可書もらい、中へ入りました。

でも、どこに行っているのかわからず、管理の中村さんに電話をしました。

『はい、中村です。』

「今どこですか？ 隆志は、どうですか？」

『中根君の運ばれた病院に来てるよ。中根君は、手術中だよ。』

「なんていう病院ですか？ 私、今、山産に来てるんですけど。」

そんなやりとりのあと、

私は急いで、隆志の居る病院に向かいました。

病院に着くと、手術室近くの、待合席に、

中村さんと池田君が居ました。

「隆志は？ 隆志は、どうなんですか？ 死なないですよね。」

私は、半べそで、2人に聞きました。

中村さんが、重い口調で、答えてくれました。

『手術が終わらないと、今は、何とも言えないよ。』

「そんなー！ 何とも言えないなんて！ そんなにひどいんですか？

あなたが、転勤なんてさせるから・・・あぶない仕事させるから・・・

」。

私は、段々冷静さを失い、叫びだしました。

「私たち、結婚するんですよ！ 隆志が死んだら、どうしたらいいんですか！？

おなかには、赤ちゃんだっているのよー。

やっと、やっと掴んだ幸せなのに！ そんなのひどい」。

私は、床に座り込み泣き崩れました。

すると、中村さんが、優しく抱えてくれて、ソファーに座らせてくれました。

池田君は、このやりとりを、一言も無くただ見ていました。

彼にとっては、隆志の事故もそうですが、

私の口から、結婚、妊娠を聞いてショックだったんだと思います。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第64話：重い時間

時間がゆっくりと過ぎて、私も落ち着いてきました。

ふと顔を上げると、池田さんが、いつ買ってきたのか、サンドウィッチと、缶ジュースを差し出していました。

いつかのお昼休みのように・・・。

『おまえのことだから、昼飯も食わないで、来たんだろ？』

おなかの子にもドクだし、食わないとダメだよ。』

私は、池田さんの優しい目を見ながら、うなずきました。

それから、中村さんが、事故の様子を話してくれました。

話の間にも、中村さんは、電話のために、何度も外に出て行きました。

中村さんは、中村さんで、責任関係やら、後処理で大変そうですが、今の私には、そんな事はどうでもよかったです。

何をする事も無く、重苦しい時間が、過ぎていきました。

私が来て5時間が経ち、外は、暗くなってしまいました。

中村さんが、お腹が空いたらしく、外に食事に出て行きました。

1時間程して、中村さんが戻り、そばにファミレスがあると言うので、

池田さんと私が、行く事になりました。

しばらくして私たちが、戻ってくると、中村さんの隣に、人影がありました。

近づくと、そこには、隆志のご両親が・・・。

私は、何てご挨拶していいのか分からず、一瞬、足が止まりました。

それでも、池田さんに連れられて、そばに・・・

すると、お母様が、私に気が付き立ち上がりました。

『遙さん、そばに居てくれたのね。疲れたでしょ？』

もう帰って、休んでちょうだい。あとは、私たちが、就いてるから。

『

』でも私、とても一人で、うちに居られません。

一緒に居させてください。』

『ありがとう。それじゃ、もう少しね。』

それから、お母様が、看護師さんから聞いたことを話してくれまし

た。

それは、お腹から下が、潰されていて、助かるかどうか微妙で、たとえ命が助かって、歩く事はおろか、立つことも出来ないでしょうとのこと。

それを聞くと、私はまた、涙が止まらなくなりました。

私には、こんな現実には、とても受け入れられませんでした。

「どうか神様、これは、悪い夢でありますように・・・」

祈るような気持ちで、ほつぺを、つねってみましたが、

やっぱり、痛くて、すごく痛くて、死ぬほど痛くて・・・

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第65話：手術の終わり

手術は終わらぬまま、夜の9時になりました。

中村さんが、池田さんと私に、もう帰る様にと、促しました。

私は、手術が終わるまでは、帰るつもりは無かったので、半分むきになって言いました。

「私が、帰れるはずないじゃないですか！

こんな気持ちじゃ、明日、仕事なんて出来ないし、

くびになったっていい。隆志のそばに居たいんです。」

一方、池田さんは、違っていました。

隆志のために、明日の仕事を休むわけにはいきません。

親友と言うほどの仲ではないのですから・・・。

『じゃー、無理すんなよ。きっと、大丈夫。』と、

私に言って、池田さんは帰って行きました。

そして、時間は過ぎて、12時となりました。

隆志のお母様が、私に、帰って休むようにとおっしゃいましたが、

私は、まるで、幼稚園の子の様に、首を横に何度も振って、

「嫌です。そばに居ます。」と、言うことを聞きませんでした。

少し、印象を悪くしたかもしれませんが・・・。

おなかの赤ちゃんの事も考えなくてはいけない立場なのに・・・。

でも、自分でも、どうすることも出来なかったのです・・・。

中村さんも、疲れてきたのか、居眠りを始めました。

いったい、手術はいつ終わるんだろう？

でも、もし、悪い結果なら、このまま終わらないで欲しい。

何かを考えると、悪い事ばかり考えてしまう・・・。

だから、私は、隆志と出会ってから、今までのことを思い出し、
ていきました。

隆志のお父様が、席をはずし、しばらくすると戻ってきました。

すると、私の前に立ち、暖かい缶紅茶を手渡してくれました。

何か話し掛けたかった様にも、見えましたが、

また、座って目を閉じてしまいました。

時間は更に、過ぎて、午前4時を回りました。

と、その時、手術中のランプが消えました。

ついに、手術が終わりました！

少しすると、扉が開き、

一人の医師が出て来られて、私たちは立ち上がりました。

私は、足が震えていました。

「聞くのが、怖い・・・」

（つつく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの
です。）

第66話：戻らない意識

医師が口を開きました。

『命の危険は、もう無いと思います。』

私たちは、スツールと肩の力が抜けて、ほっとしました。

医師は、続けました。

『出来る事はやりましたが、どこまで回復できるかは、本人次第でしょう。』

残念ですが、歩けるようになるのは無理だと思います。

ただ、回復次第では、手術を繰り返して、改善していくかもしれない。

このあとは、ICUで、しばらく様子を見るので、

面会の仕方などは、看護師に聞いてください。

このあとも、緊急手術があるので、

詳しい手術の内容などの説明は、夕方4時ではいかがでしょうか？』

「はい、大丈夫です。」

『それでは、すぐに看護師が来ると思いますので。』

「ありがとうございました。」

私たちは、深々と頭を下げました。

命が助かった安堵感と、もう歩く事が出来ないことの絶望感の複雑な心境で、

みんな声が出ませんでした。

お父様が、『良かったじゃないか。命が助かったんだから。

これからの回復は、本人次第だって先生も言ってたし、

隆志の事だから、きっと歩けるようになるさ。

今は、命が助かった事を喜ぼうじゃないか。』

と、みんなを励ますように言いました。

お母様は、涙を流しながら、『そうね。そうね。』と、繰り返しました。

私は、何も言えずに、ただ流れ落ちる涙をぬぐっていました。

少しすると、看護師さんが来られて、

ICUの説明をしながら、案内してくれました。

手を消毒をして、白衣を着て部屋に入ると、

奥から2つ目のベットに隆志がいました。

からだには、コードがいくつも繋がれていて、点滴を受けていました。

時折、機械から発する「ピー」という不快な音が鳴り響き、ドキッとしてましたが、

看護師さんは、慌てる事も無く気にしていないようなので、大丈夫なんだと安心しました。

隆志は、みんなが心配して覗き込んでいたりすることをよそに、すやすやと眠っていました。

そして、中村さんは仕事に戻るようになりました。

「睡眠もほとんど取ってないのに仕事なんて、大変ですね。」

『管理の仕事なんて、いつもこんな感じだから平気だよ。』

それより青山さんの方が、大丈夫なの？

早く帰って休んだほうがいいよ。それじゃー。』

それから、中村さんは、隆志のご両親に挨拶をすると、病院から出て行きました。

そして、隆志のご両親はホテルを探しに行くと言いましたが、

私は、連絡が取れた方がいいのと、これから何泊するか分からないのでは、

負担も大きいと思い、私のアパートに来て頂きました。

アパートに戻った時には、すっかり夜も明けて、朝陽が射していました。

アパートは2Kで、お母様が長く滞在しても大丈夫なので、隆志の状態が

落ち着くまで一緒に居て頂くことになりました。

お父様は、お仕事もあり、あとで、もう一度面会に行つて、

そのまま栃木へ帰ることになりました。

私たちは、お昼過ぎまで休み、2時頃病院へ出かけました。

隆志は、ICUで、まだ眠ったままで、意識は戻っていませんでした。

その後、担当の先生から怪我の状態や、手術内容などの説明がありました。

あまりのひどさに私は、言葉がありませんでした。

そう、命が助かった事が、奇跡だったのです。

結局、この日、隆志の意識は戻ることはなく、お父様は、栃木へ帰って行かれました。

私とお母様も、死の不安からは開放されて、徐々に落ち着き、帰りに買い物をして、夕食を作るようになりました。

色々お話をしていくうちに、案外と気が合う様な気がして、これから先、一緒に生活していく事での心配が無くなっていききました。

次の日、2人で隆志の所に行きましたが、以前、意識は戻っていませんでした。

そして、次の日も、また、次の日も・・・

先生に相談しても、今は待つしかありませんと言われるだけで、不安はつのっていきました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第67話：別れ話

日曜日になり、栃木からお父様も来られましたが、

隆志の意識は戻っていませんでした。

池田君は手術後も、仕事帰りによってくれましたが、

この日は、小林君や山川さん、岩田さんを連れて来てくれました。

意識の戻っていない隆志を見ると、みんなは暗い表情で帰っていきましたが、

池田君は、『きっと、良くなるよ。』と、

私の手にお守りを渡してくれました。

そう・・・私は、もしかしたら、このまま意識が戻らずに・・・

と、悪い方へ考えていました。

池田君は、そんな私の気持ちを察したのか、気持ちが洗われるようなお守りでした。

『中村さんが心配してたぞ。連絡もよこさないし、電話しても出ないそうじゃないか。』

「いいの、もう。働く気ないから……。」

『だったら、そう言わないと。 中村さん、青山の代わりを入れる様に言われてて、』

でも、青山の事考えて、誰も入れずに、ひたすら毎日謝ってくれてるんだぞ。』

「そう。 さっさとくびにすればいいのに。」

『おい!』

池田君は、うつむいている私の腕を軽く掴みました。

私は、反射的に、顔を上げて、彼を見ました。

すると、彼の顔色が変わりました。そう、私が泣いていたからです。

『何泣いてんだよ。』

「何って、あんたが、お守りなんて、柄でもないものくれるからだよ。」

『何だよそれ。』

「うれしかったよ。御守りなんて貰ったのは、何年ぶりかな……。」

『あー、俺も、買ったのなんて、何年ぶりだか・・・』

「結局、人間って、自分の力で何もできない時って、神様に祈るしかなくなるんだよね。」

『人間なんて、いかに弱い生き物だってことだな。』

「今から、中村さんに電話してみるよ。」

『そっかー、それがいいな。じゃー今日はこれで帰るよ。』

それから、私は、中村さんに電話をしました。

とりあえず、隆志の状態が、安心できるまで、仕事はしないと。

結局、今働いている工場は、辞めて、待機状態となりました。

無論、給料はませんが、貯金があるので、当分は何とかなるでしょう。

これで、毎日、隆志に付ききりだ。

しかし、私がこう決めたにもかかわらず、事態はあらぬ方向に向かいます。

この日、お父様は、直接栃木に戻らずに、お母様とアパートに来ました。

少し落ち着くと、ご両親は私の前にお座りになり、ゆっくりと話し始めました。

『遙さん、うちのと、別れてくれないか。』

私は、思ってもいない言葉に、愕然となりました。

(つつく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第68話：選択

お父様は、続けました。

『隆志は、意識も戻っていないが、たとえ戻っても、もう、歩けないし、

まともな仕事なんて出来はしない。

これから、2人が結婚して、子供が生まれても、車椅子ならともかく、

寝たきりになってしまったら、幸せな生活が送れるとは思えない。

どうだろう、ここは、良く将来のことを考えて、

別れた方がいいんじゃないかと思うんだが・・・。

子供は、もちろん産んでもらってかまわないし、

隆志の子として、こちらで引き取って、きちんと育てます。』

私は、思いもしなかったお父様の言葉に、返す言葉がありませんでした。

しばらくすると、お父様は、車でお母様を連れて、

栃木へ帰って行かれました。

お二人が居なくなっても、私は、ずっと、お父様の言葉を考えていました。

確かに、結婚前だから、将来のことを考えて、別かれるのは自由です。

でも、それでは、私の病気の事を知っても、結婚したいと言ってくれた

隆志を、裏切る事になるし、そんな計算で簡単に割り切れるものではありません。

しかし、隆志の意識がこのままずっと、回復しなかったら？

意識が回復しても、ずっと寝たきりだったら？

このことが、重く私にのしかかってきました。

いくら考えたところで、答えは出てきません。

だって、私一人で決めることじゃないし、

相談すべき相手は、意識が無いのですから・・・。

私は、兄に相談する事にしました。

電話をすると、すぐ来てくれて、話を聞いてくれました。

兄も、その事については、色々と考えていたようでした。

そして、兄の口から、ハッキリとした口調で、「別れなさい。」の言葉が・・・。

私が、期待していた言葉とは違うものでした。

いつも、私の期待通りの言葉を、言ってくれた兄。

親とけんかをして、いつも私の味方をしてくれた兄。

一瞬、私の脳裏には、「裏切られた」との思いが、浮かびました。

「もういいよ！ 兄貴は、分かってくれると思ったのに！」

私は、ヒステリックになり、兄を追い帰してしまいました。

もちろん、分かっています。

みんなが私の事を考えて別れた方が良く、言ってくれているのは。

でも、人間って、感情抜きに物事を進めるのは無理な生き物。

私は、お腹に隆志との赤ちゃんがいる以上、別れる訳にはいかないのです。

無論、産まれても、隆志のご両親に、お渡しする気などありません。

隆志が、あれほど欲しかった私との子、

何があっても、2人で育てるって、約束したんですから・・・。

そして、次の日、いつものように午後2時頃病院に行くと、お母様も来られました。

隆志の意識は、この日も戻らぬままでした。

結局、事故が起きてから、1週間が経つても、隆志の意識は戻りませんでした。

先生の方からも、脳神経外科的にも異常は無いので、意識が戻らない理由が

分からないと言われて、また、意識がいつ回復するのか、

明日なのか、1ヶ月先なのか、1年先なのか、それ以上先なのか・

必要な準備を考えておいた方が良いかもしれませんとも。

日曜日になり、お父様が来られましたが、私は、また、

別れ話をされるのではないかと、気にして接していました。

お父様は、私の気持ちに気付かれたのか、その事については、話されませんでした。

しかし、お父様の口から、また、ショックな事がありました。

『隆志を、栃木の実家近くの病院に移す。』と、いうのです。

ご両親のご苦勞からすると、当然のことなのですが、

また1つ、私の悩みの種が増えました。

「隆志、お願い、目を覚まして!」

(つつく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第69話：悪い予感

隆志は、次の金曜日に転院する事になりました。

私は、どうしていいのか悩みました。

栃木まで、毎日通うわけにはいかないし、

病院の近くに、アパートを借りて住むことも考えました。

でも、お父様に、別れてくれないか、と言われているのに、

そんなことをして、そばにいても良いのかどうか・・・。

お母様に、相談しようとしても、どうやっていいのか・・・。

結局、この話には触れずに、今日1日は終わりました。

次の日は、朝から曇りがちで、肌寒い日でした。

いつものように、午後1時頃、兄貴から借りている車で、

お母様と病院へ向かいました。

結局、この日も、隆志の意識は戻らないまま時間は過ぎて、午後6時に帰る事にしました。

病院の駐車場に止めてあった車に乗り込むと、私の携帯が鳴り出しました。

会社の管理の中村さんからでした。

書いて欲しい書類があるのと、給与明細を渡したいので、

出来れば、これから営業所まで来て欲しいとのことでした。

営業所は、アパートから病院とは反対の方向にあるので、

一旦、お母様とアパートまで帰ってから、営業所へ行く事にしました。

営業所は駅の近くに有り、周辺は駐車場の取締りが厳しいのと、

車よりバイクの方が早いので、1時間くらいで戻る気になつてもりで、バイクにまたがりました。

ヘルメットを被ろうとした頃には、暗くなっているのに、

うつかり、スモークシールドのヘルメットを持って来てしまいました。

取替えに戻るのも面倒なので、「まっ、いいか。」と、そのまま出てしまいました。

しかし、このことが、取り返しのつかない事への道しるべになってしまいました。

帰宅ラッシュ時間帯でもあり、営業所に着くのに、普通より5分ほ

ど多く、

20分掛かってしまいました。

営業所のドアを開けると、『おー久しぶり！』と、中村さんが迎えてくれました。

仕事をせずに、待機扱いとされるために、書類が必要ということで、その場で記入しました。そして、いつもの半分くらいしかない

給与明細を受け取り、用件は済みました。

ビルの外に出ると、雨が降り出していました。

「まいったなー。雨カップも持ってないやー。大失敗！

止みそうもないし、15分くらいだから行っちゃえー。」

5分ほど走ると、雨は急に強くなりだして、どしゃぶりになりました。

ヘルメットのスモークバイザーが災いして、凄く見づらい状態となりました。

バイザーを開けてみましたが、雨が強すぎて、目が開けていられないので、

ほとんど閉めた状態で、走り続けました。

対向車のライトが当たると、何も見えなくなってしまう。

タイヤも、ズルズルと滑りました。

滑ること自体は、慣れているので、大したことでは無いのですが、

見えないのには、本当に参りました。

10分も走っていると、服もびしょ濡れになり、

中までしみて寒くなり、早く着きたい気持ちになって、

運転にも影響していたかもしれません。

アパートも近くなり、大通りから脇道に入りました。

大通りでは、良く見えないながらも、車の流れにのって走れました。

ここからの脇道は、交通量も減り、歩道も無く、街灯も少なくなり、

濃い色の服や黒っぽい傘を差した人が、見つらくなります。

そして、その時が、訪れました。

電柱にもたれ掛っているたて看板に、7メートルくらいまで近づいた時でした。

黒いコートに傘をかついだ男が、たて看板の裏から、

突然、私の目の前の道路に、フラフラと出てきました。

「うそーっ!」

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第70話：交通事故

私は、とっさにブレーキを掛けましたが、どう考えても間に合いません。

私は、反射的に空いている対向車線に、少しでも避けようと、重心をかけた時でした。

そこには、運悪くマンホールが有り、ズルっと滑るとそのまま倒れて、

対向車線へと滑って行きました。

バイクと一緒にいると危険なので、何とか離れようとしたが、

右足がバイクの下にはまってしまい、抜けませんでした。

次の瞬間、なんと！目の前に乗用車のヘッドライト

の明かりが近づいてきました。

私のバイクの滑りは、止まりません！

乗用車は、ブレーキを掛けていましたが、

「ガチャーン！」 衝突しました！

バイクの前輪が、乗用車のフロントの下に潜り込み、

私の身体が、車のバンパーにぶつかりました。

肩から胸にかけて、激痛が走りました。

すぐに、離れようとしたが、右足が抜けません。

乗用車から、男の人が降りてきて、『大丈夫ですか？』と、

声を掛けてくれましたが、足が抜けないのが分かると、

『これは、バックしたほうがいいな。』

と言い、車に乗り込み、バックを始めました。

バイクが、引っ掛かり、削れるような音がしました。

バイクが動いて、足に当たるのが怖かったのですが、

なんとか、車の下から、バイクが出ました。

バイクを少し持ち上げると、足は簡単に抜けて、立ち上がる事が出来ました。

車の人が、携帯電話で警察に電話を始めました。

私は、道路に出てきた人が、座り込んでいて動かないのが、

心配だったので傍に行ってみました。

「大丈夫ですか？」

『立てねえんだよ!』

「でも、ここに居ると危険なので、端に行きましょう。」

乗用車の男の人が来て2人で、抱えて移動させようと思いました。

『痛えよ!』　と言われながらも、2メートルくらい横に移動出来ました。

乗用車の男の人が、『救急車を呼んだほうがいいな。』

と、携帯電話で119を掛けました。

私は、段々と寒くなつて来て、身体が震えてきました。

乗用車の男の人が、気を利かせてくれて、傘を差し出してくれました。

でも、私は、道路に出てきた人が心配で、その人と傘に入りました。

『ねーちゃん、いい人だな。俺と付き合えよ。』

と、訳のわからないことを言い、私が当事者なのが分からないほど、かなり酔っ払っていることが分かりました。

サイレンの音が近づいてきて、救急車がやって来ました。

道路に出て来た男の人が救急車に運ばれて、怪我を調べられている

ようでした。

少しすると、警察官がオートバイで来て、救急車に行きました。

また少しすると、パトカーと、屋根に事故と表示板が出るワゴン車が来ました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第71話：命

2人の警察官が、交通誘導を始めて、別の2人の警察官が、私と乗用車の男の人に、別々に状況を聞いて来ました。

もう1人の警察官は、救急車で話をして戻って来ました。

『ダメだなー。酔っ払っていて、話が通じないよ。』

何が起きたのかも、分かってない。

左足首と手首が痛いと言ってるから、病院に運ぶよ。

そうそう、あなたは、怪我してないの？』

「はい、大丈夫です。」

『そう、それじゃーパトカーの後ろに乗ってもらえる？』

パトカーに乗ると、免許証や保険証を求められました。

20分くらいで話も終わり、家が近いこともあって、

一度帰って、濡れて汚れた服を着替えてから、

調書作成などのために警察署に来るように言われました。

『バイクは壊れてないのかな？』と言われて、

見に行こうと、パトカーから降りようとした時です。

「痛い！」　右足に激痛が走りました。

警察官が、私の様子に気付き、『足が痛いんだな？　座ってなさい。

良くあるんだよ、少し経ってから痛くなる事が。

今、救急車、呼ぶから。』と、言い、無線で話し始めました。

その間に、ほかの警察官が、バイクを見に行って、

『ダメだね。ハンドルとフレームが曲がっちゃって、あれじゃ走れないな！。』

と、私に言いました。

私は、ショックを受け、見に行きたかったのですが、

段々と足だけでなく、肘や胸が痛くなってきたので、諦めました。

事故が起きてから、少なからずパニック状態にありましたが、

徐々に落ち着いてきたのが自分でも分かるようになり、

もうひとつ重大な事が頭をよぎりました。

そう・・・おなかの赤ちゃんです！

急に心配になってきましたが、おなかは痛くなかったので、

きっと大丈夫と、自分に言い聞かせました。

ただ、寒さのせいだと思っていた、身体の震えが増してきました。

救急車が来ると、隊員の方に助けられて、救急車に乗り込みました。

横になった方が良いと言われて、ストレッチャーベットに横になりました。

『どの辺が、痛いのか？』と聞かれながら、膝を曲げたりしていた時でした。

隊員の方が、『あっ！どこか出血してるぞ！』と言い出しました。

ブルージーンズをはいていたのですが、

見てみると太ももの内側が、赤黒く染まっていました。

私は、心臓が止まりそうになりました。

「妊娠しています。もしかして・・・」

それ以上は、声になりませんでした。

すぐに病院に着き、処置室に運ばれました。

濡れて汚れていた服をすべて脱ぐように言われ、手術着を渡されま

した。

この時はじめて、自分の身体が、思った以上に傷ついていることに気付きました。

右足の膝から足首にかけて、青く腫れ上がり、

服も脱ぎづらいほどに、右手の肘も腫れて、左胸も青くなっていました。

でも、そんなことよりも、私は、ショーツが真っ赤になっていたことが、

死ぬほどショックでした。

そんな思いのせいか、急におなかも痛くなって来ました。

処置中も、祈るような気持ちでいましたが、

結局、祈りは届きませんでした。

私は、取り返しのつかないことをしてしまいました。

大事な命を、自分の不注意で、殺してしまったのです。

次から次へと、溢れ出す涙。

我慢出来ずに、声を出して泣いてしまい、看護師さんを困らせてしまいました。

そのあとは、レントゲンなどを撮ったり、検査をしましたが、

骨折などの異常は無く、他に手術は必要ないことが分かりました。

病室に運ばれ、そのまま1週間入院することになりました。

隆志の状態を思うと、とても許されない不注意。

もう、死んでしまいたい。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第72話：兄の気持ち

夜10時を過ぎていたせいか、病棟の観察室のような部屋に運ばれました。

明日の朝、6人部屋に移るそうです。

しばらく1人で落ち込んでいると、兄が母を連れて、やって来ました。

『大丈夫か！ いったい何やってるんだよ！』

『ごめんね！ バイク壊しちゃった。』

フレーム、いつちゃったらしいんだ・・・もう乗れないかも。』

『そんなのいいよ。それより、お前のからだは？ おなかの赤ちやんは？』

『私は、大丈夫だけど・・・赤ちゃんが・・・ダメだった。。。』

『そつか。ダメだったのか。。。でも、自分を責めるなよ。それで、事故の相手は？』

『さつき、おまわりさんが来て、名前と連絡先教えてくれて、そこにメモがあるよ。』

足を骨折してて、この病院に入院したみたいだよ。』

『分かった、こっちは、俺がちゃんとするから、お前は、早く身体を治せよ。』

「ありがとう。迷惑掛けてごめんね。ほんとに私って、ばかだ。」

『運が悪いただけだからな。昔みたいに変なこと考えるんじゃないぞ！』

その言葉が、返って私の気持ちを、吐き出させてしまいました。

「私、ダメだよ。隆志の子、殺しちゃったんだよ。どうしたらいいの!？」

隆志に何て言ったらいいの？ 隆志の顔、もう見れないよ！

たとえ意識が戻っても、そんなこと彼に言ったら……。」

『大丈夫だよ、分かってくれるし、お前が無事な事を喜んでくれるさ。』

「そんなことないよ！ あたしが、死ねば良かったのよ……。」

『ばか！ なんてこと言ってたんだよ！ もう作れなくなったわけじゃないんだろ？』

お前が生きてれば、また、作れるじゃないか。』

「あたしは、大丈夫だけど、隆志は、もうだめかもしれないの。」

つぶれちゃって、もう出来ないかもしれないよ。

大事な赤ちゃんだったのに。。。ねーどうしたら、いいの。」

『そうかー。』

私が、泣き出して、少し間が空いてから、兄貴が言いました。

『でもなー、遙。考えようによっては、これで、隆志君との絆が切れたんじゃないか？』

隆志君と別れやすくなったじゃないか。

向こうの親も別れて欲しいって言ってるし、

もう、隆志君のことは忘れるのがいいんだよ。』

「お兄ちゃん、何言ってるのよ！

それじゃー赤ちゃんは、私たちが別れる為に、死んだって言うの？

絆が切れたっていつても、私たちの愛が終わった訳じゃないよ！

アッ！ 何で知ってるの？ まさか・・・。

お兄ちゃんが、隆志のご両親に、私に別れる様に言ってくれて、

お願いしたんじゃないわよね？」

『・・・・・・・・』

「うそー！ 信じらんない！

お兄ちゃんが、そんなこと言うなんて、がっかりよ！

私のこと、分かってくれてると思ってたのにー。ひどいよ！

もう出て行って！ 口も利きたくない！」

私が、興奮しているので、まずいと思ってか、兄は、部屋から出て行きました。

母が、私の頭を撫でながら、

『あんまり思いつめるんじゃないよ。

赤ちゃんは気の毒なことになっちゃったけど、

お母さんは、あなたが無事でいてくれて、本当に良かったんだから。

あとのことは、ゆっくり落ち着いて考えればいいのよ。

時間が解決してくれることもあるから、結論を急いじゃダメよ。』

と言って、私が落ち着くまで居てくれました。

(つづく)
(登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第73話：お見舞い

次の日、隆志のお母様が、お見舞いに来てくれました。

「遥さん、大丈夫なの？」

なかなか帰って来ないと思ったら、お兄さんから電話があって、

事故だなんて聞いて、びつくりしちゃったわよ。」

「ごめんなさい。隆志さんとの大事な赤ちゃんを死なせてしまったんです。」

「いいのよ。楽しみにしてはいたけど、仕方ないじゃない。

遥さんに、大した怪我が無くて良かったわよ。

早く元気になってちょうだい。」

お母様はこう言うと、持って来たリンゴを、剥いてくださって、

一緒に食べ終わると、隆志の居る病院へ行かれました。

一人になって、1日中、色々なことを考えていると、

ある方向へ自分の気持ちが向いていました。

「あたしなんて、生きていても仕方ない。」と・・・。

外が暗くなり、夕食が運ばれて来ました。

そこには、ロールキャベツがありました。

隆志が、私によく作ってくれた料理。

一口食べると、思い出が甦って、涙が出てきました。

すると、前に居る方のお見舞いに来ていた、5歳くらいの女の子が来て、

『何で、泣きながら食べてるの？』

『ご飯が食べれるってことは、幸せなことなんだから、』

笑顔で食べなきゃいけないんだよ。』って、言われました。

入院しているお母さんが、慌てて、

『ごめんなさい！ さやかちゃん、余計なこと言わないの！』

『はい。』

『この子、泣き虫で、良くご飯の時に泣いていたから、』

そう言い聞かせてたんです。ごめんなさいね。』

「いいえ、いいんです。さやかちゃんの言う通りだもんねー。」

お姉ちゃんがいけないんだものねー。」

さやかちゃんは、ニコニコして、Vサインをしました。

『イエーイ！』『イエーイ！』

おなかの赤ちゃんも、無事に生まれていれば、

こんな可愛い子になったのかと思うと、やるせない気持ちになりました。

そんな中、池田君がお見舞いに来てくれました。

『オーイ！びつくりさせんなよ！天才レーサーが事故って、どーすんだよ！』

「あたしは、車は、うまいけど、バイクは、大したことないんだよーだ！」

『赤ちゃんダメだったんだって？ 気、落とすなよ！』

俺がいつだって、次の子作ってやるから。ハハッ。』

「何、言っちゃってんの？ ばーか。。。」

『もっと、落ち込んでんのかと心配してたけど、大丈夫そうだな！』

「そんなことないよ。今も、泣いてて、あの、さやかちゃんに怒られちゃったところ。」

『そっかー、怒られたかー。』

青山もあんなに小さくて、可愛い頃あったんだろうな。』

「あつたんだろうなって、あつたに決まってるじゃんか！失礼な。」

『青山！ 辛いこと何でも、言ってくれよ！』

俺、今でも、お前のこと好きだから・・・

命張って、守ってやるから・・・

はい、これ、御守り！

前に渡した時、中根のものだけじゃなくて、

お前にも安産の御守り渡すべきだったなー。』

「またまた、何言っちゃってるんだこいつ。」

池田君なんか、たよらねーっのー！」

『なんか必要な物とかねえのか？ 着替えとか、持って来てやるよ！』

「だれが、君に頼むかつー！ どーせ、下着でもいたずらする気でしょ？」

『エヘツ ヘツ、バレたかー。 じゃー洗濯でもしてやるよ！』

「2・3日はしなくていいし、その頃には、自分で、出来る、っーの！」

『じゃー、風呂、入れないんだろ？ からだ、拭いてやるよ！

俺、こう見えても、毎日、機械のメンテナンスしてるから、うまいんだぜー！

細かいところまで、きっちり、ピカピカ！』

「呆れた。頭の中、メンテナンスすべきだね！」

『それでも食って、もっと元気出せよ！ じゃーな！』

と言つて、ケーキが入った箱を置いて、帰って行きました。

ちゃんと、部屋の人の分まで、気を利かせて、10個。

くだらない事言いながらも、私もなんか、今日は眠れそうな気持ちになりました。

「さやかちゃん！ おいでー！ これお父さんとお母さんと食べて

！
」

『やったー！ ケーキ！ ケーキ！』

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第74話：私、死にます

朝起きると、おなかの痛みは、ほとんどありませんでした。

足の腫れも多少引き、痛みも薄れていたので、少し歩いてみました。すると歩けることが分かったので、考えていたことを実行することになりました。

昨日、池田君が来てくれ、一時的に気持ちを楽にしてくれましたが、苦しみから開放された訳ではありません。

決めました。

今日、私、死にます。

朝食を摂ると、手帳を取り出して、遺書を書くことにしました。

いざ書こうとすると、どんな風に書いていいのか分からなくて、考えてしまいました。

それでも、書き始めると、色々な思い出が次々と頭に甦りました。

「楽しかった20歳前に戻りたい！

ごく普通に暮らせれば、ただ、それだけで良かったのに……。

乳がんの手術のあとも、やっとの思いで一步を踏み出して、歩き出したのに……。

結局、辛い事ばかり、もう生きていきたくない。

どうして、辛い事ばかり起きるの？

神様、私が何か悪い事でもしたの？」

こんな思いで、遺書を書き終わると、お昼ご飯の時間になってしまいました。

お魚の煮付けと、マカロニサラダが配膳されてきました。

「これが、私の最期の晩餐かー。」

隆志が最初に作ってくれた、酢豚とチャーハンが頭に浮かびました。

「もう一度、食べたかったなー。」

食事を終わると、服を着替えて、こっそりと病院を出ました。

タクシーに乗り込み、アパートに向いました。

この時間は、隆志のお母様が、病院に出かける時間です。

私は、お母様が居ないのを雰囲気で察して、部屋に入りました。

シャワーを浴びて、大嫌いな病院の匂いと汗を流しました。

そして、お気に入りの服を着て、

ドレッサーの前に座り、念入りにメイクをしました。

鏡に映る自分を見て、

「何で、そんなに暗い顔してるの、遥！

赤ちゃんのところに行くんだから、もっと明るい顔しなきゃ！

赤ちゃんが、泣いちゃうぞ！」

と、気持ちを無理やり切り替えて、部屋を出ました。

隆志にひと目会いたかったけれど諦めて、

隆志のビクスクーター、真っ白なフュージョンの鍵を持つと、

外に出てまたがりました。

行き先は決まっていました。

そこは、小さい頃に、家族で時々遊びに行った海岸で、

近くに高い絶壁が有り、そこが目的地です。

胸の手術の後に落ち込んでいた時にも、兄に連れられて気分転換に行った場所でした。

その時に、つい、「あそこから、飛び降りたら、楽になるんだろうな」と、

つぶやいてしまい、兄にひどく叱られた場所です。

バイクを運転していると、不思議に色々な思いを忘れることが出来ました。

目的地の近くに来ると、目の前に有料道の料金所が出てきました。

ここを通らないと、目的地には行けません。

ここを入った人は、ここを出なくてはならないので、往復チケットしか有りません。

私には必要ありませんが、それを買って走り抜けました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第75話：遺書

有料道路を抜けるとすぐに道が分かれています。

私は、絶壁のある展望台公園の方へ向いました。

少し行くと駐車場が有り、中へ入ろうとしたところ、パトカーが止まっていました。

あとで聞いた事ですが、兄が警察に連絡したので、警戒のために来ていたものでした。

私が病院から居なくなっただけで母が来て、手帳に書かれた遺書を見つけていました。

「20歳になって、お父さんが急死して、悲しみも癒える間もなく、乳がんになって、

否応無く手術をして、その傷跡に悩んで、結婚の約束をした彼も離れて行って以来、

ずっと辛かったよ。

みんなのお陰で何とか立ち直ったけど、本当は嫌な事ばかりで、毎日逃げ出したかった。

ある日、隆志が現れて、結婚なんて言葉も忘れていた私に、一緒に暮らしたいと、

言ってくれました。

そして、結婚に向けて、やっと、幸せな日々を送ってきたのに、

何で？ 何であんな事故が起きるの？

大切な赤ちゃんまで、私の不注意で死なせてしまって、もう限界だよ。

もうこれ以上苦しむのなんて、嫌だよ。 無理だよ。

これから先、生きてても、いいことなんてないよ。

お母さんも辛いのに、苦しめるような事ばかりして、本当にごめんね。

今まで、我ままな私を、育ててくれてありがとう。

楽しい事もいっぱい有ったし、充実した成人を迎えられて、産んでくれたことは、

感謝しています。

家族の思い出、いっぱいあったね。その一つ一つ、決して忘れてないよ。

もう一つだけ、たかこの我まま許してください。

お兄ちゃん、いつも助けてくれて、ありがとう。

いつも優しくしてくれるのが分かってて、逆らってばかりの私で、めんなさい。

本当に辛い時、いつも気付いてくれて、傍に居て見守ってくれたね。

お兄ちゃんが、居てくれたお陰で、今まで生きてこれました。

隆志と別れたほうがいいというお兄ちゃんの気持ちも、ちゃんと受け止めているから、

私の気持ちの整理が、自分でつけれないだけだから・・・逆らってごめんね。

最後にもう一つ、怒らせちゃうの承知で、先に逝きます。

隆志には、あえて何も言いません。

きつと、分かってくれると思うから・・・

ただ、一言。愛してるよ。」

この遺書を読むと、母は慌てて、兄に連絡したそうです。

兄は、それを聞くと、すぐに病院に飛んで来て、これを読むと、

行き場所の心当たりを聞かために、池田君にも連絡して来てもらい、

アパートに行ったそうです。

兄が隆志のバイクが無いのに気が付き、そして、以前行った海岸で私のつぶやいた

言葉を思い出して、あの場所だと思い、警察に搜索依頼をしたそうです。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第76話：お願い、死なせて！

パトカーを見ると、何か胸騒ぎがして、バイクを駐車場に止めるのをやめました。

これで、目的の絶壁に行けなくなってしまいました。

道路脇にバイクを止めて、考えることにしました。

ここしかない、思っていたので、ほかに考えが浮かびません。

かといって、今更、やめて帰るなんて選択肢が、あるはずありません。

やっぱり、意志を固めている今、決行あるのみです。

そして、絶壁からのダイブを諦めて、昔、遊びに行っていたこの近くの海岸から、

力の限り水平線に向って泳ぎ続けることに決めました。

バイクのエンジンをかけて、海岸に向いました。

すると、先ほど駐車場にいたパトカーが、後ろから近づいてきました。

もしかと思い、スピードを上げると、マイクで停止を求めてきました。

やっぱりと思い、止めることなく走り続けて、海岸近くの狭い脇道に入り込みました。

そのまま少し走ると、海岸が見えて来たので、バイクを止めました。

警察官が来るまで時間が無いと思い、急いで携帯電話を取り出して、隆志と笑顔で写ってる写真を、目に焼き付けようと見ました。

「さようなら、隆志。」

写真を見ると、涙が出てきて止まりません。

もたもたしていると、警察官が来ちゃう。

思いを振り切って携帯電話を置き、海に向いました。

その頃、すでに兄と池田君もパトカーのいた駐車場まで来ていました。

そして、私を発見したとの連絡を受けて、こちらに向っていました。

私は、岩場を、足場を確かめながら、右へ左へ歩きました。

気持ちも動揺していたせいか、ふらついてとても歩きづらく、

先端の方まで行くまでに、少し時間がかかってしまいました。

気になって後ろを振り向くと、2人の警察官が見えました。

私は、岩の端までくると海を見つめ、覚悟を決めました。

息を吞んで、左足から一步を踏み出して、くるぶしまで水に入りました。

思いのほか、冷たくて全身に力が入ってしまいました。

また、後ろを見ると、警察官が何か叫びながら走っていました。

びっくりしたことに、その後ろを、兄と池田君が走っているではありませんか。

「うそー！ 何で？」

私は、慌てました。

こんな状況なんて、考えもしなかった。

一人ひっそりと、別れを告げるつもりだったのに！

「お願い、死なせて！」

思わず叫んでしまいました。

水の中を急いで、歩こうとしても、うまく歩けなくて、彼らがどんどん近づいて来ました。

それでも何とか腰くらいまで、水に浸かったので、泳ぎ始めること

にしました。

後ろを振り向くと、池田君が警官に追いつき、岩場の中程まで来ていました。

私は、大して泳ぎは得意でもないし、波に押し戻されて、なかなか先に進みませんでした。

「このままでは、スポーツマンの池田君に、追いつかれる。

捕まったらどうしよう。何て言おう。」と、余計なことまで頭をよぎりました。

どうにかしなきゃと思い、泳ぎながら考えました。

大した考えも浮かびません。

そして、力の限り潜って、そのまま溺れることにしました。

自分でも、もうどうしていいのかわからなくなって、

死ぬことに、意地を張っているような感じにも思えてきてしまいました。

なぜか、吸わなくてもよい息を大きく吸い込んでから、潜り始めて、苦しくなっても、上がらないと決めて、斜め下に向けて、思いっきり潜り出しました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のもので
す。)

第77話：迷い

段々と、息が苦しくなって、泳ぎが止まりそうになり、

上を見ると、4メートルくらいに海面の光が見えました。

いよいよ本当に苦しくなって、泳ぎが止まりました。

海の中なのに、涙を流している自分が分かりました。

「私、何をやってるんだろう。。。

今の私は、追われているから、むきになって逃げてるだけじゃないの？

こんなはずじゃなかった。

もつと落ち着いて、隆志との思い出を胸に、

崖から、1歩だけ踏み出したら、死ねるはずだった。

何でこんなにもがいてるの？

私って、ほんとは死にたくないの？

今まで、頑張って生きてきたことが、無駄になっちゃったから？

隆志が、悲しむから？ まだ、生きること未練があるの？

だめだよ、こんな事考えているようじゃ・・・。

死ねない。」

まだ死にたくないと思っている自分を見つけてしまいました。

手が無意識に、海面に向って、ひと掻きました。

でも、ひと掻きで、海面には届きません。

もうひと掻きしたところで、我慢出来ずに、とうとう水を飲み込んでしまいました。

「うつ。。。私、死ぬの？」

途端に、もの凄く苦しくなって、激しく手足をバタつかせ、

一気に水を飲み込んでしまいました。

目の前が真っ白になり、記憶は途切れました。

（いったい、どれくらいの時間が、過ぎたのでしょうか？）

何度も、私に呼び掛ける声が、聞こえてきました。

はっきりしない意識の中で、目の前にぼんやりと池田君が見えてきました。

胸を押して、鼻をつまんで、唇を重ねて、人工呼吸をする池田君がはっきりと見えた瞬間、思いっきり咳き込み、口から水を吐き出しました。

『遥が気が付いた！ 良かったー。』

池田君が、泣いているように見えました。

でも、息が苦しくて、まともに呼吸が出来ません。

ぜーぜーと、やっと息をしていました。

「私、生きてるんだ。」

そして、やって来た救急車に乗せられて、酸素吸入を受けながら病院に運ばれました。

病院に着くと、すぐに処置室に運ばれ、注射をされて、口に器具を入れられました。

肺に水が入っていたようでした。

注射のせいかな、ぼんやりしてきて、何をされてるのか、よく分からなくなりました。

しばらくすると、多少楽になり、処置室を出て、ICUで1泊することになりました。

兄と池田君がベットにやって来ましたが、

私は、目をつぶって、寝たふりをしていました。

2人は、私の気持ちを察したのか、何も言わずに、しばらくすると居なくなりました。

朝がやって来て、呼吸もだいぶ楽になりました。

先生が来て、『もう大丈夫だから、入院していた前の病院に戻るよ。』と告げられました。

看護師さんにベットを押されICUを出て、ある個室に入りました。

そこには、母と兄が、居ました。

もう、寝たふりは、通用しません。

兄が、声を掛けてきました。

『よっ、気分はどう?』

「うん、まあーまあー」

私は、小さな声で返しました。

兄が、前の病院に帰るから、着替えるようにと言って、部屋を出て行きました。

母が、『大丈夫かい？』とだけ言って、着替えを手伝ってくれました。

私は、「お母さん、ごめんね。」とだけしか、言えませんでした。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第78話：新しい命

病院を出て、車での移動中も、ほとんど会話は、ありませんでした。

2人とも、私を気遣って、無理に話そうとしなかったし、

私も、どう話していいのか・・・。

正直話したくありませんでした。

重い空気のまま、入院していた病院に着きました。

診察を受けて、病室に戻りました。

すぐに昼食の時間になり、食事が運ばれてきました。

兄は、病院内のレストランに食べに行きましたが、

母は、そのまま私の傍に居ました。

どうやら、私がまた逃げ出さないようにと、交替で昼食を摂るようでした。

兄が戻ると、今度は母が、レストランに行きました。

すると、池田君が、やって来ました。

『調子はどう?』

私は、目を合わせづらかったので、目をつぶって黙っていました。
病室の他の人は、食事を終わると、食器を廊下のキャリーに載せる
ついでに、

みんなどこかへ行ってしまいました。

兄が、部屋に誰も居なくなったのも手伝って、とうとう黙ってられ
なくなったのか

口を開きました。

『まったく何をやっているんだよ、お前は。みんなを心配させて。
もっと不幸でも頑張って生きてる人は、いっぱいいるんだぞ。』

私はその言葉に、なぜか腹が立ちました。

「他の人なんて、関係ない！ 私には耐えられなかったの！」

『池田君が居なかったら、どうなってたか分からなかったんだぞ。』

彼は岩場で足を怪我しながらも、必死でお前を助けたんだぞ。

ちゃんとお礼言っとけよ。』

「助けてなんて、言っていない！」

池田君が、傍に来て話し出しました。

『青山は、助けて、って言ったよ。』

意識がほとんど無かったけど、助けてって俺にしがみついていたんだよ。

その時、俺は気付いたんだ。これは、運命なんだって。』

「勝手に助けて、何言っちゃってるのよ！死なせてくれれば良かったのよ。」

『青山は、あの時、死んだんだよ。だから、今までのことは、すべて忘れちまえよ。』

嫌なことは、みんな海の中に消えたんだよ。青山は、生まれ変わったんだよ。

その命は、俺が救ったんだから、俺と付き合う運命なんだよ。』

「あつたま、おかしいんじゃないの？ 岩にでもぶつけた？

誰があんたとなんか、付き合うかつーの！」

池田君を見ると、今まで気付かなかったけれど、松葉杖をついていました。

足の方に目をやると、右の靴は履いてなくて、包帯で包まれています。

兄が、私の表情を察して、言いました。

『岩場を走ってる時に、足を滑らせて、靴が脱げてしまつて、

それでも、彼は止まらずに、お前を追いかけて走り、足の裏を20針も縫う怪我を

してまで、お前を助けたんだぞ。』

「そう。痛むの？」

『大した事ねえよ。怪我すんの慣れてるから。』

そんなこと気にするよりも、俺と付き合えよな。』

私は、特別に彼が嫌いなわけではありません。

むしろ、始めに配属された工場での面接の時に、嫌な思いをしている私に代わって、

面接官に食って掛かってくれた時は、本当にうれしかったのです。

ただ、思ったことを、ぼんぼんと言う強引過ぎる態度が、苦手でした。

やわらかい優しさで包み込むような中根君を選んだわけですが、

それでも、池田君は、私の事を見守ってくれていたわけで、色々助

けてくれました。

私は、無神経にも、池田君がそばで助けってくれるのが当然のように思っていました。

彼の気持ちを考えると、彼に助けられたこの命、彼にあげるのが当然のような気も

してきました。でも、そんな簡単に、右から左へと移れる筈は有りません。

だって、私は隆志が好きなのですから。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第79話：見えない道

母達は、私がまた逃げ出すんじゃないかと、心配しているのが分かりました。

面会時間が終りに近づいても、帰る様子がありませんでした。

「大丈夫だよ。もう、あんなことしないから。自分でも、分かったから。」

溺れて意識が消えかけた時に、赤ちゃんがまだ来ちゃダメだよって、言ってくれたの。

それに、苦しくなって、まだもがいて生きようとする自分を見つけたから、

私は、死にたくないんだと解ったよ。

もう、自分で自分の寿命を決めるようなことはしないよ。

だから、もう家に帰っても大丈夫だよ。」

母達は、まだ心配そうでしたが、私を信じてくれました。

そして、5日後に退院しました。

退院すると私は、すぐに、隆志のところに行きました。

兄貴の車を借りて、栃木までやく2時間半の旅。

隆志の顔を見なくなってから、とても長い時間が経ったようで、とても待ちどおしい道のりでした。

もしかしたらという、勝手な期待も膨らんできました。

病院に着くと、彼の病室にまっしぐら、でも、隆志の意識は回復していませんでした。

そんな隆志でも、顔を見ることが出来て、気持ち落ち着きました。

「隆志、ごめんね。私たちの赤ちゃん、私の不注意で、死なせちゃった。」

私、悲しみに負けて、隆志が、こうやって頑張っているのに、

赤ちゃんの所に行こうと、ばかなことしちゃった。

ねえ、私のこと、叱って！

その目を開けて、私を叱ってよ。

これからどうしたらいいのか、教えてよ！」

しばらくすると、隆志のお母様が、面会に来ました、

私は、今までの出来事をお話しました。

お母様は私を責める様な事は言わずに、家に泊めて下さいました。

私は、迷惑と思いながらも、2日、3日とそのまま泊めて頂き、

とうとう、1週間が過ぎてしまいました。

さすがにこれ以上は・・・と思い、横浜に戻りました。

仕事も始めましたが、気持ちに乗らずに、

毎日がただ漫然と過ぎてゆき、

この先どうしていいのかも分からなくなっていました。

そして、休みの度に、兄に車を借りて、隆志に会いに行きました。

こんなことを1ヶ月以上繰り返してるうちに、

隆志のそばで暮らした方が良いと思うようになり、

ある日、病院の近くの不動産店を見て回って、アパートを探している時でした。

急に、後ろから肩を叩かれて、振り向いてみると、

そこには、隆志のお父様が、立っておられました。

『そこまで、隆志のことを考えていてくれるんだね。』

「そんなしつかりした考えじゃなくて、ただどうしていいのか解らないから、

毎日、隆志さんに会っていれば、答えが見つかるんじゃないかって・

ただそれだけなんです。」

『アパートなんか、探さずに、気の済むまでうちに居なさい。

前に来てくれた時に、うちのやつも、毎日病院に行くのに、車で送ってもらって

助かってるって言ってたし、娘が出来た様だって喜んでいるんだよ。

』

「ありがとうございます。」

お父様のお言葉に甘えることにしました。

そして1週間後、新しい生活をはじめた日に、その日はやって来ました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第80話：別れ、そして・・・

隆志の実家での新しい生活が始まりました。

晴れ渡った朝、お洗濯物を干していた時でした。

隆志の居る病院から、電話が有りました。

「はい。そうです。はい。本当ですか！ありがとうございます！
ます。」

はい、これからすぐに行きます！」

受話器を置くのも、煩わしいほど、私は、慌てました。

「お母様、お母様、大変！・・・隆志さんの、意識が回復したって
！」

私たちは、病院に駆けつけ、病室に急ぎました。

そこには、目を開いてる隆志が居ました。

私は、うれしさで胸が張り裂けそうでした。

お母様も泣きながら、隆志の手を握って喜びました。

話し掛けると、少し間が空いて、ゆっくりですが返事がありました。

彼と話をしたのって、いったい何ヶ月ぶりなんだろう？

この時本当に、私は海で死ななくて良かったと思いました。

きちんとした会話ではありませんでしたが、私たちには十分でした。

その日は、隆志のお父様とお母様と、うれしくって、お祝いをしました。

そして、急速な回復をして会話を取り戻していった次の日のことです。

赤ちゃんのことを聞かれて、話さなければならなくなりました。

事故での赤ちゃんの死と、私の自殺のこと。

私は、彼の身体の状態に悪い影響を与えるんじゃないかと心配で、出来るだけ遠回しに、話しました。

そしたら、思った以上に彼は冷静に、私の話を聞いて、

『一人でつらい思いをさせて、悪かったな。

遙は、悪くなんかないよ。

俺が、こんな怪我をしてしまって、心配させてしまったから、

事がみんな悪い方向に向いてしまったんだ。

遙の言う通り、転勤なんてしないで、料理の仕事探して、コックになっていれば、こんなことにならなかったんだ。

だから、赤ちゃんのことで、責任を感じることもなんてないんだよ。」

この言葉を聞いた瞬間、私は泣き出してしまいました。

今までかかえていた重たい物が、落ちた気持ちがしました。

そして、彼は、続けました。

『きのう、医者から聞いたよ。

俺は、もうベットから起きられない、って。

トイレも1人じゃ出来ないし、子供も作れないって。

笑っちゃうよなー。』

彼の目に、涙が浮かびました。

『すごく悩んだよ。でも、諦めた。

色々頑張ろうとすると、気が変になりそうで。

だから、頑張らないで、ゆっくりと自然にまかせようと思う。

僕たち別れよう。

遥が僕と結婚するのは、自然なことじゃない。

遥がそばにいてくれると、そりゃーすごくうれしいよ。

だけど、落ち着いて考えた時に、それ以上に、苦しさを感じると思う。

遥の人生を奪うようで、幸せを壊しているようで。

遥は、今までだって辛い経験してたのに、

僕のこと、また、大変な思いさせてしまったし、

これ以上、辛い道を僕と歩いちゃダメなんだよ。

だから、俺と別れて、幸せになってくれよ。

解ってくれるよね。

それが、僕の願いでもあるし、幸せでもあるんだ。

今までありがとう。そして、さよなら。』

「勝手なこと、言わないでよ！　なんで一人で決めちゃうのよ！

私の人生は、私が決めることなんだから！」

もちろん、私は、猛烈に反論しました。

でも、それは、単に感情的なもので、私も、どうなるものでないことは解っていました。

それに、一番辛いのは、彼だと解っていました。

目が覚めた日に、いきなり、もう歩けないと聞かされて、

あれほど欲しかった赤ちゃんも、死んでしまったと、私に言われて・
・。

彼にしてみれば、別れようなんて、言い出さない方がいいに決まってる。

でも、私のことを思つて、すごく我慢しているんだと。

言いたいことを言い尽くした私は、窓から空を見ました。

私たちの気持ちを表すような、きれいな夕焼けが広がっていました。

この日、私の3つ目の恋は、終わりました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第81話：新しい彼氏

それから、私は、横浜でまた、派遣の仕事を始めました。

事務の仕事のように、頭だけ疲れてイライラがつのるのは私の性格に、

向いていないので、男勝りに、また工場の仕事です。

毎日、機械を操って、物作りで汗を流す方が、私には合っています。

えっ？ 恋愛はしてないのだった？

相変わらず、付きまとってる男が1人。そう、池田君。

毎週休みの度に誘われて、遊んでいるうちに、情が移ったというか、

結局、彼の強引な希望通り、付き合いだしてしまいました。

池田君と付き合いだして、初めての夏。

私のうちに遊びに来て、テレビを見ていた池田翔太は、言い出しました。

『明日の休み、どっか行かない？』

「どっかて？ どこ？」

『ん？？？』

「海水浴に行きたいなら、行きたいって言えばいいじゃん！」

『いや、そんなつもりじゃ・・・』

「テレビに、海水浴の様子が写ったから、言い出したって、バレバレ。」

「だけど、私、水着になるの嫌だからね。」

「誰かわい子でも誘って、海でもプールでも行ってくれば！」

『遙じゃないと、意味ないんだなー。水着も、うまく着れば分かんないんじゃないの？』

「・・・。」

『遥ってさ、スタイルいいじゃん。かわいいしさ』

「砂浜とか連れて歩いてーんだよ。ぜってい、みんな見るしさ。」

「バツ・カ・じゃないのー！それに、そんな自慢大会興味無いし、

あたしに、水着なんて、対象外だし。」

『今から、水着、買いに行こうよ。』

「ハア？ 私の胸の悩みのこと、分かってないの？」

『分かってるつもりだよ。』

「んゝ、んゝ、分かってないよ。どれだけ、悩んでいるのか。」

『でもさ、丸山とは、海に行ったんだし、俺と行ってくれてもいいじゃん。』

今更だけど、俺、遥がどんな胸していようと、好きな気持ちは変わらないし、

中根にだって負けない。』

「そういうことは、見てから言わないと、後悔するよ。」

いい機会だから、思い切って、今見せるよ。このまま付き合って、私も本気で

翔太のこと好きになったら、怖くて見せれなくなるし、今ハッキリさせれば、

これから先の不安も解消できるしね。

かっこいいこと言っちゃったからって、無理しないで正直に言うてよ。

中途半端な気遣いが一番傷付くんだからね。」

私はこう言つと、前に、職場の山口さんに言われた事を思い出しま

した。

『相手が気に掛ける前に、自分から言ちゃうと、気が楽だよ。相手がどう思おうとね。』

ニユアンスは違うけど、お互い本気になる前に、気になってることをオープンにした方が

気が楽になると思って、実践しようとしていたわけです。

軽い感じで、翔太には言いましたが、実は心臓、バクバクでした。

思い切ってTシャツを脱ごうとしましたが、そんな私の行動を翔太は、止めました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第82話：水着

『やめろよ。こんな雰囲気の中で、そんな大事なところ、見れないよ。』

「そっか、見ても、好きでいられる自信ないんだ。」

『ちやかすなよ。自信ないとか、そんなんじゃない。』

そんなレベルで遙を愛してるんじゃない。

遙が、俺を本気で好きになってくれた時、俺の愛を受け入れてくれた時に、

そうしたいんだよ。

だから、こんな俺の気持ちをテストするようなのは嫌だし、無意味だよ。』

「そっか。分かったよ。海、行こうか。」

『やったね！ ほらさ、この雑誌に載ってるこれなんていいじゃん！』

「今話してた真剣な態度と、全然ちがうんだけど・・・。」

『決めた。これに似てるの買いに行こう！ 俺、プレゼントするからさ。』

「聞いてないし。こんな小さいの……。ねえ？　本気で私の気持ち考えてくれてるの？」

『ジョーダンだよ。俺の好み言っただけ。』

じゃーこれなんて、割と大きいし、隠れるんじゃないの？」

「こんなの上から見たら、分かつちゃうでしょ。ビキニなんて、落ち着かないよ。」

泳いでて取れちゃったら、海水浴どころじゃないし。

ワンピースしかありえない。」

彼は、私の手を引っ張って、だっ子のように、

『行こう、行こう。見に行くといいのあるかもしれないしさ。』と、繰り返しました。

結局、強引に彼の手に引かれて、デパートに……。

販売時期も終わりのせいか、安くなっていて、中には半額の札も。

見ているうちに、楽しくなってきた、

胸があれば、こんなを着て楽しく遊んでいたんだろうな、思ったり。

なかなか2人の意見が合わずに、何店も回ることに。

たまに、彼から試着の要請。こんなの着れるわけないっしょ。拒否。

どうも、彼の頭には、ビキニ以外有り得ないらしい。

私は、何だか、諦めモードに。

「こんだけ見ても無いなら、スクール水着でいいじゃん。」（冗談）

『えっ？　なんかそれって、想像すると、逆にそえられる』

「ば~~~~か!!」

そして、私も根負け気味になり、ビキニもありなつと。

気持ちを切り替えて見ると、案外、包み込むようなのもあったりして・・・

「これなら、ビキニでもいいよ。」

『ん~~~~。俺の好みじゃないけど・・・もう仕方ないか。』

「あたしも、折れたんだから、妥協してくれないとね。」

『ん~~~~それじゃ~~~~。これ!』

やっつと、決まった。

『遙は気にし過ぎだよ。』

俺、友達にだって、胸張って、本当のこと言って紹介できるけどな。

㊦

「分かってないよ！ 全然、分かってないよ。ばか！」

でも結局、買ってもらったからには、行かないわけにいかないな。

私の脳裏には、丸山さんとの記憶が甦っていました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第83話：海水浴前夜

「どこに行くの？ 日帰りだから、行けるのは、湘南か三浦だね。」

『湘南へ行こう。葉山や逗子も考えたんだけど、やっぱり茅ヶ崎の方がいいな。』

三浦だと帰りの渋滞がひどいし。』

「渋滞？ それじゃー車で行くの？」

『うん。遙のお兄さんの車。』

「えっ？ 今からじゃ無理だよ。」

『大丈夫。先週頼んで、オーケーもらってるから。』

「えーっ？ 先週から計画してたの？」

それも、兄貴に先に話してるなんて。

私が行かないって言ってたら、どうするつもりだったの？。」

『俺が、説得すれば、遙が行かないなんて言う筈ないじゃん。』

「いつにも増して、大した自信だわ。」

『噂をすれば、ほら、来た！』

外で聞き慣れた車の音がしました。

（ピンポン）

ドアを開けると、兄貴が立っていました。

『よっ！ あした晴れみたいで良かったじゃん！

だけど、遥、よく海なんか行く気になったな？』

「水着買ってあげるからって言われて、仕方なくね。」

『そっか。遥も池田君を、やっとそこまで好きになったか。』

「何言っちゃってるの兄貴！」

『そこまで、2人の仲が進展してるなら、池田君は、あしたの朝早いから、

泊まっていくんだろ？』

池田君が、慌てて口を開きました。

『いえいえ、そんな。そろそろ帰りますよ。』

『そっか。遥の目はオケーサインを出してるように見えるんだけどな。

それじゃー楽しんできな。俺も用事が有るからこれで帰るよ。』

私は、余計なことを言うなーって感じで、右足を軽く蹴る様な仕草をしました。

「そんなこと言ってるなら、さっさと帰れ。」

『おー怖わーっ！　じゃー、怪我すんじゃないぞー。』

兄は私が隆志から貰ったバイクで、帰って行きました。

『それじゃー、俺も帰るよ。朝5時に来るから、寝坊すんなよ。』

「本当に帰るんだ？　てつきり、泊まっていくなかって思ってた。

大きなバック持って来てたし・・・。」

『ああ、このバックは、ここに来る前に、明日の為に買ったんだ。

だから、空っぽ。

早く帰って、明日の準備しなきゃ。』

この時、私は、隆志と同棲していたこの部屋に泊まることが、

嫌なんだろうと思っていました。

翔太は、空っぽの大きなバックをタスキに掛けて、原付スクーターで帰って行きました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のもの

です。
)

第84話：湘南海水浴

朝4時、気持ちよく熟睡していたのに、目覚まし時計に起こされた。

「なんでこんなに早く起きなきゃいけないんだー！

海なんて行かないで、寝てたいよー！」

昨日突然、海に行くなんて言われたから、お弁当なんて考えてる

余裕なんて無し。だから、パス！

もつとも、時間が有っても、料理なんて出来ないし、

私の作った物なんて食べたら、体が悪くなりそうだし・・・。

水着になるのも、胸の傷を翔太に見せることになるかもしれないことも、

昨日は、勢いで平気なようなこと言っちゃったけど、一晩寝て落ち着いてみると、

何だか憂鬱で、気乗りしない。でも、どうせ行くのだから、楽しい時間を

過ごした方が良く、気持ちを切り替えることにしました。

あれやこれや支度をしていると、チャイムが鳴りました。

ピンポン〜ピンポン〜

「はい！」

ドアを開けると、満面笑みの翔太が立っていました。

『ヨッ！ オハーツ！ ちゃんと起きていましたか？』

「誰かさんが、ノリノリだから仕方なくね。」

私たちは、車に乗り込み、出発しました。

私は、ハンドルを握りながら、少し気にしてしゃべりました。

「お弁当作ってないよー。」

『オー、そんなの、はなから期待してないよ！』

「なんか、ムカツクー。」

さすがに、朝の5時は、渋滞も無く、道路は空いていました。

6時頃には、茅ヶ崎に到着。

こんな時間でも、結構、みんな来ていて、車は多い。

車を駐車場に止めて、海の家を物色。

モダンな感じの所に決めて、暫し休憩。

『何か腹減ったな』

の、彼の一言で、近くのファミレスで、朝食を摂ることに。

少しのんびりして戻ると、「やばい！人が、急に増えてる〜！」

急いで、パラソルとチェアを借りて、陣取り合戦。

どうにか、納得できる場所をキープ出来て一安心。

危つく、早起きして来た甲斐が無くなるところだったー。

ビーチも賑わい出してきた、私たちも着替えることにしました。

海の家に戻りましたが、2人とも、下に水着を着て来たので、

すぐに終わり、ご対面。

「お待たせ〜」と、出て行くと・・・。

彼が、固まった。

目が点になっている。

「オーイ！大丈夫ですか〜？意識あるか〜？」

私は、ふざけて彼の目の前に手を振ってみた。

翔太は、急にニヤケ顔になって、一言。

『やっぱ、水着はいいな。』

「なんか、いやらしいなー。」

『夏に感謝！ 海に感謝！』

「あつ、翔太も、格闘家だけあって、体、締まってるねー。」

腹筋も割れてるし・・・。」

と言いながら、腹筋に手を伸ばして、モミモミ。

『ギャハハ。くすぐってよー。じゃー俺もー。』

「バシッ！ ばーか！」

大きな浮き袋を膨らませて、いざ海へ！

やっぱりはじめは、海の水と言えど冷たく感じて、ゆっくり浸って行こうと

思ったら、翔太が水を、バシバシバシヤ掛けてきた。

「ムカツクー、髪が濡れちゃったじゃない！」

『何言ってるんだよー。泳ぎに来たんだから濡れるに決まってるじゃないか。』

私も反撃！

キヤーキヤー言いながら、何だかドラマのような場面になってしまったけれど、

結局、こんなことをして、ふざけ合っているのが楽しいんだなーと、実感。

私は、泳ぎが得意じゃないから、デカ浮き袋の中に入って、いざ出航！

翔太が、デカ浮き袋を押したり引っ張ったり、揺らしたりしながら、足の届かない所まで来てしまいました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第85話：海水浴Kiss

彼の行動は段々とエスカレートして、揺らし方も激しくなり、時々潜って、私の足を引っ張ったりしました。

しばらくすると、さすがに彼も疲れてきたのか、浮き袋に掴まって来ました。

浮き袋が傾き、彼の顔と私の顔が、急接近！

周りの人も遠くなり、なーんだ、そういうことかと思い、目をつぶっていました。

でも、いっこうに唇に感触は無く、どうしたのかな？と思い、

目を開けてみると、すぐ目の前に彼の目が！

びっくりして、思わず顔をそむけてしまい、

「何してるの？」と、聞きました。

『整形とかしてるのかな？とか、思ってたさ。』

「してないよー！ してたら、失敗作だー！」

『イヤイヤ、かわいいよ！ こうやってじっと見てると、

早園麻衣ちゃんよりかわいいかも。

ほんと、このまま一生、遥と一緒に居られたら、

俺、生まれてきてほんとに良かったと、思えるんだけどな。」

「どうしちゃったの？ プロポーズみたいなこと言い出しちゃって。」

『べつに。正直な気持ち言っただけだよ。』

だけどさ、急に目なんかつぶるから、キスしたくなちゃったよ。』

「鈍感！」

『えっ？ 何が？』

「何がって・・・」

私がこう言った瞬間、彼は私の前の浮き袋を両手で押し沈めて、キスをして来ました。

僅か数秒でしたが、彼の顔は真っ赤になり、照れているのか、

浮き袋を、私の後ろから押して、砂浜に戻り出しました。

砂浜に上がっても、彼は私を見なかったので、

「どうしちゃったのかな？ 翔太くん？」

って、おどけて、聞いてみました。

『いや、あの、ごめんなー。怒ってねえか？ 勝手にキスなんかしてさ。』

ちよつと気まずくなっちゃって・・・。」

「あれ？ そんなこと気にしてたの？

いいんだよ。あたし、キスは好きだから。遠慮なくしちゃって。」

『ほんと？ほんとに、いいのかよ。』

「うん。全然。」

あつと云う間に、元気を取り戻した彼でした。

『何か、急に腹減ったな。昼飯、食わない？』

「そうね。海の家に、戻ろっか。」

彼は、海の家に着くと、カレーやラーメン、おでんにピザ。

やきそばに、たこ焼き、スイカに、かき氷を注文。

「オイオイ、そんなに食べるのかい？」

『遙は、好きなの食べて。あと、ビール飲んでもいい？』

「酔っぱらわなきゃいいけどー。」

それから、食べる、食べる、彼ってこんなに、大食漢だったけ？

食べるだけ食べたら、眠くなってきた、お座敷でゴロゴロしていたら、

いつの間にか、彼に寄り添って寝てしまいました。

気が付くと、どこから持って来たのか、タオルケットが掛けられていました。

おおざっぱな気がするけど、たまに見せる細かな気遣いが、嬉しい私でした。

「いつけないーい！　こんな時間！　すっかり寝ちゃった。」

ごめんね、遊ぶ時間無くなっちゃったね。」

『気にすんなよ。遥のペースでいいんだよ。』

遥が、楽しければ、俺は嬉しいんだから。』

「無理しちゃって。それじゃー、泳ぎに行こうー。」

それから、3時間ほど泳いだり、砂浜で遊んだりして、楽しく過ごしました。

帰る人も出てきて、私たちも疲れが出てきたので、海の家に戻り着

替えました。

『飯食って行こうぜ。この先に、ちょっと洒落たところあるんだけどさ。』

いつの間にか、彼は、近くのレストランに予約を入れていたようで、海岸道路を少し歩いて、レストランに着きました。

美味しいイタリアンレストランで、私は、大満足。

日が暮れて来て、とてもきれいな景色を見ながら、浜辺を歩きました。

知り合ったばかりのころは、強引でガサツなイメージのあった彼で、

いい面もあるのは分かっていましたが、ちょっと苦手でした。

でも、今まで付き合ってきて、私の抱いていたイメージは変わり、

隆志の事故の頃から、彼は優しい人だと分かってきました。

そして、今こうして歩いていても、手を繋ぎたくても繋げない、

シャイな性格だと分かり、可愛くもあり、いとおしくもなりました。

だから、私から手を繋ぎ、彼に身を寄せて歩きました。

今、自分で実感しています。

私は、彼が大好きです。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第86話：ハッキリさせて

車に戻ると、私は、ハンドルを握りましたが、すんなり帰る気にはなれませんでした。

もつと彼を好きになりたい。

だから、この胸を見せて、この先に進めるのか、はっきりさせたい。そう強く思いました。

「どこへ行くのか？」

『もう、帰ろう？ 明日仕事だし、疲れただろう？』

「それでいいの？ 私は、いいんだよ。」

私の胸を見て、翔太がどう思っても、私は覚悟できてるし、

私は、今日、あなたが好きなことが、ハッキリ分かったから。」

私は、車を走らせ、ホテルの「空」の字を探しました。

何軒か「満」が続いた後に、「空」が、有りました。

私は、横目で、ちらっと、翔太を見ると、駐車場の矢印の方へハンドルを切りました。

そのまま、駐車場に入り、車を止めて出ようとしたが、

翔太が、『明日仕事だし、今日は疲れたから、今度にしよう?』

と、乗る気ではありませんでした。

「ありえないーい!」

女の私から誘うこと自体ありえないのに、断るなんて、信じらんない!

私のこと好きなのはずなのに、こいつの頭の中はどーなってるんだ!。

そう言えば、昨日の夜も泊まらずに、わざわざ家に帰ったし、

今更ながら、どうしてなんだろうと不思議に思いました。

昨日はそんなレベルではないと言っていました。が、もしかして、私の胸の傷を見て、

嫌いになるかもしれないと思う自分が怖いのかなと、思ったりもしました。

でも、ここまで来ては、戻れませんから。

「今日、ハッキリさせよう? ハッキリさせたいの!」

あなたが、本気で、これから、付き合っていける人なのかどうか。」

『遙が、そこまで言うのなら。』

翔太が車を降りました。

そして、部屋に行きましたが、翔太は元気がありませんでした。

「ねえ？ どうしたの？ 私のこと嫌いになったの？」

『そんなことないよ。』

「そう。それじゃー、私、先にシャワー浴びてくるね。」

彼のことを好きと分かって、早く本気で付き合いたくなった私、だから、

早くハッキリさせたくて、積極的になってる私、でも、内心この胸を見て、

彼がどう思っのか、物凄く不安でした。

丸山さんとの時のことが、頭をよぎりましたが、あんなひどいことを、

翔太が言うはずも無いことが分かっていたので、色々考えずに、

さっさとシャワーを浴びて、裸のまま、胸を両手で隠しながら、

翔太の前に思い切って出て行きました。

ベットに腰掛けていた翔太は、私に気が付くと、

私を見たまま、動かなくなりました。

私は、すくむ足を一步ずつ前に、そのまま、手の届くところまで、歩いて行き、ゆっくりと両手を降ろしました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第87話：翔太の秘密

「見たまま、感じたままを、正直に言っ

嫌いになったら、それでいいんだよ。

嘘は、絶対に嫌だよ。」

翔太は、すぐに、私に抱きつき、私をベットに倒しました。

『遥を、嫌いになんてなる訳ないじゃないか。

もつとひどい傷だと思ってたし、全然平気だよ。

それどころか、遥のからだ、きれいで、魅力的だよ。』

「ありがとう。」

私は、張り詰めていた緊張から解放されて、涙を流してしまいました。

『大丈夫かい？』

「うん。うれし涙。積極的に平気そうに見えただろうけど、

結構、限界ギリギリだったんだ。」

『そんなこと、分かってるよ。』

ごめんな、気を遣わせて。でも、うれしいよ。』

そして、彼は、私を愛してくれました。

自らの服を脱ぎ捨てて、私とひとつになりました。

私は、幸せを感じて、翔太となら結婚してもいいなと、思った矢先、彼の動きが止まりました。

そう彼は、すぐに一人でいつてしまいました。

私は、アレ？っと思つて、彼の顔見ると、

翔太は、深刻そうな顔をしていました。

私は直感的に、彼が元気が無かつた理由はこれだと解りました。

でも、私は、明るく振舞いました。

自分が、気にしていることを責められることが、どれだけ嫌な事か身をもつて判つていたし、たつた今、私のからだを綺麗だと言つてくれて、

不安を取り除いてくれたのですから。

それに、胸の傷のせいでHに興味を持たない私にとっては、正直、

彼が上手いか下手かなんて、気になりませんでした。

『ごめん。』

「別に、謝らなくていいよ。」

彼は、そのあと、何度か続けましたが、やっぱり同じでした。

『ずっと、好きでしかたなかった遥が、やっと許してくれたのに、俺って本当に駄目だよな。俺のこと嫌いになっただろ?』

「何言ってるの。こんなの全然平気だよ。」

私のこの胸見ても、好きでいてくれる翔太を、嫌いになるわけないじゃん。

きっと私が、魅力有り過ぎなんだよ。フッフツ。

いつもの翔太のように、元気出して。」

落ち込んでいる翔太を見ると、このまま帰路について別れるなんて、

とても出来そうにありません。

「ねえ。遅くなっちゃったし、このまま泊まっていかない？」

あした、ズル休みしちゃえばいいじゃん。」

『いいの？』

「うん。翔太と一緒に居たいもん。」

そして、私は元気の無い彼を、包み込むようにして眠りました。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第88話：指輪

次の日、ホテルを出ると、新江ノ島水族館に行くことにしました。

始めは元気の無い彼でしたが、イルカやアシカのショウを見て、雰
囲気を明るくしようと

必要以上に、わざとらしく騒いでいる私を見ているうちに、表情が
和らぎ、

彼も段々元気を取り戻して来ました。

ベンチに掛けて、かき氷を食べながら、私はさりげなく言い出しま
した。

「私ね、嬉しいんだ。お互い、秘密が分かってても、変わりなく好
きでいられて。

隠し事が無くなって、スッキリして、本気で好きになれるって感じ。

」

『俺のこと、好きなの？』

「大好きだよ。きのうまでよりも、ずっ・とね！」

『ほんとに？ マジで？』

「これからも、よろしくね！」

翔太は、すっかりいつもの彼となり、楽しい1日を過ごしました。

それからというもの、私たちは毎日のように会い、食事をしたり、ゲームをしたり、

DVDを観たり、休みの日には、ドライブに行きました。

昔は、よく口喧嘩をしていましたが、海水浴の日以来、そんなこともなくなり、

以前、冷やかな目で見ていた「バカップル」に、まさか自分がなろうとは・・・。

そんな毎日を繰り返しているある日、ドライブの帰りに夜景を見に、湘南平へ行った時でした。

同じようなカップルが、沢山居る中、鉄塔に登り、相模湾の夜景を眺めて感動

をしていると、彼が私の手を引き、展望台の人気の少ないところに連れて行きました。

そして、私の顔を見つめると、キスをしてきました。

何だかいつもと違うなーと思っていると、

『俺、お前しか考えられないんだ。俺には、遥しかない。』

結婚してくれ。』

そう言うと、私の手を取り、指輪をはめてきました。

私は、拒否る気も無く、とうとうこの日が来たんだなーと、

「うん。結婚してあげる。浮気すんなよ！」

と、緊張を吹き飛ばすように、あえて元気良く、生意気に答えました。

彼は、私の返事を聞くと、『オー、サンキュー。』と言い、

もう一度、キスをして、長い時間、抱きしめていました。

毎日が楽しく過ぎて、やっと私にも幸せが訪れたんだと、生きていることに

感謝し、この幸せは絶対に壊したくないと思いました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第89話：定期診察

日々、幸せな時間が、過ぎてゆく中、現実に取り戻される日が来ました。

今日は、定期診察の日です。

私は、3ヶ月に1度、乳がんの手術をした病院に行きます。

そして、この日も、いつもの担当の先生に診察されました。

『前回の検査の結果は、特に異常ないようだけど、どうかな？』

何か変わったことはないかな？』

「はい。すこぶる元気です！」

・・・嘘でした。

半年くらい前から、たまにお腹に痛みがありました。

大した痛みでもなく、すぐに治まっていたので、気に留めていなかったのですが、

3ヶ月くらい前から痛みが強くなり、ここ1ヶ月くらいは、時には座り込む時もありました。

でも、病気なら定期検査で引っ掛かるはずだから、大丈夫だと思っていた。

しかし、それは、自分を騙す口実。

本当は、手術以来ずっと、不安に思い続けていたこと、

「がんの再発」という恐怖で、ただ言えないだけでした。

いいえ、言えるわけがありません。やっと掴んだ翔太との幸せ。

結婚式を挙げて、みんなに祝ってもらって、子供をこしらえて、

家事に子育てに、毎日忙しく、普通に暮らす幸せ。

壊してなるものか。

『そーかー、すごぶる元気かー。それは良かった。』

先生が、微笑んだその時でした、例の腹痛が、私を襲ってきました。

私は、お腹を押さえて、前かがみになり、小さくうめきました。

先生は、『どうした？ お腹が痛いのか？ 診察するから、ここに仰向けに寝れるかな。』

私は、痛みをこらえながら、膝を曲げてベットに仰向けになりました。

先生は、指でお腹のあちらこちらを押さえて、痛いかどうか聞いてきました。

結局、精密検査をすることになってしまいました。

いくつかの検査を終えて、診察室に戻りました。

先生は、写真や書類を見ながら言いました。

『痛みは、今日が最初じゃなかったね？　だめだなー正直に言ってくれないと。』

何のために、定期的に通ってもらってるのか分からないでしょ。

ん、良くない影が映ってるなー。

ほかの検査結果が出ないとはつきりしないけど、入院してもらおうかな。』

「えっ？　入院ですか？」

でも、前回の検査は、大丈夫だったんですよね？」

『その言い方だと、前回の時にも、痛みがあったんだね。』

「ちょうど、検査の少し前くらいからだったかも……。」

『しょうがないなー。』

ちゃんと言ってくれないと……。

初期だと悪いところが、検査じゃ見つからないこともあるし。

明日、お母さんかお兄さんと一緒に来てもらえるかな。

そして、そのまま入院だな。』

「癌ですか？ また、手術するんですか？」

『まだ、はっきり分からないよ。』

そう、決め付けしないで、元気出して。』

「はい。」

私は、元氣なく返事をしました。

会計の為に、20分程待っている間に、悪い事ばかり考えていました。

「神様。どうか何でもありませんように。」

どこかへ、逃げ出したい気持ちでした。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第90話：疑心

病院を出ると、実家に向かい、母に話すことにしました。

心配ばかり掛けていたので、話したくなかったのですが、仕方ありません。

母は、見た目には私と普通に話していましたが、内心穏やかでないことは分かりました。

それから、アパートに戻って、入院の支度をしました。

兄に電話をすると、早速、会社帰りに来てくれて、しばらく好きな物が食べれなくなる

からと、食事に連れて行ってくれました。

兄は、落ち込んでいる私を元気付けようと、終始明るく振舞っていました。

そして、もう1人の大切な人に連絡しなきゃと、夜になって、携帯電話を持って考え込

んでしまいました。そう、翔太になんて言おうかと・・・。

私は、すでに癌の再発だと、思い込んでいました。

そして、もしかしたら、もう手遅れで、何ヶ月かで死んでしまうんだと。

自分の弱って行く姿を、翔太に見られたくない。

悲しむ翔太の姿を見たくない。

そんな気持ちで、強くありました。

だからこれからは、彼に冷たく当たり、出来ればこのまま別れてしまおうと思いました。

携帯電話を持った手は、結局、発信ボタンを押せませんでした。

次の日、兄が会社を休んでくれて、車で病院まで送ってくれました。私が、病室の支度をしている間に、母と兄は、先生に会っていました。

母と兄が戻って来ると、すぐに診察の時間になり、診察室へ行きました。

「先生、やっぱり、悪いんですか？」

『ん。遙さん、まだ、はっきり分からないんだよ。』

明日から色々検査をして、はっきりさせるから我慢してね。』

「昨日の検査で、本当は分かってるんですよ。癌だって。

安心させるために、分からないって言ってるんですよ？」

『それじゃー、この写真見てもらおうかな。ここは、膵臓なんだけど、白くなってるだろ。』

「あつ、白くなってる。もう、手遅れなんですね。

膵臓癌は、治らないって云うし、私死ぬんですね。」

『白いからって、癌と決まったわけじゃないし、血液検査の結果を診ても、今のところ

はつきりしないんだよ。

膵炎の可能性も高いし、たとえば、癌としても、助からないって決まったわけじゃない

んだから。手術で治る人だっているし、色々な治療法で、良くなってる人はいっぱいいる。

悪い方に考えないで、頑張って治そうよ。』

私は、嘘だと思っていました。昨日の検査で先生が分からないはずないと。

私が、癌だと聞いて、ショックを受けるから、分からないなんて言っているのだと。

病室に戻ると、母と兄と3人で、同室の5人の方に、挨拶をしました。

そして、談話室へ行き、3人でおしゃべり。

始めは、つまらない世間話をしていましたが、とうとう私は、2人に問い詰めました。

「ねえ、私の病気は、癌なんですよ！」

私の居ない時に、先生と話し合って、手遅れだから、みんなで口裏合わせて、

分からないなんて言っているんですよ。

私、あと、どのくらい生きられるの？

もう、何聞いても驚かないから、本当のことを、教えて。」

『何言ってるんだよ！ 今入院したばかりじゃないか。』

先生が言ったことは、本当だよ。

肺炎かもしれないし、違う病気かもしれない。

もっと検査しないと、分からないんだよ。』

兄が困ったような顔で、言いました。

母も、心配そうに、言いました。

『遥、本当なんだよ。』

もし癌だと分かっていたら、私が、こんなに落ち着いて話が出る

と思うかい？

明日からの検査で、分かるんだから、その時は、一緒に先生から、説明を聞きましょうね。

悪い方に考えないで、元気出してちょうだい。』

母の困った顔を見ると、これ以上は追求する気になれませんでした
が、

依然として私は、膵臓癌でもう長く生きられないと思い込んでいま
した。

昨日、病院に来るまでは、幸せな気持ちで一杯だったのに・・・。

「神様！ 私って、何か悪いことでもしたの？ お願い、助けて！」

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第91話：もう、来ないで！

次の日になり、朝から検査が始まりました。

エコー検査をしたり、ファイバースコープを使って、膵管に造影剤を注入してレントゲン撮影

を行ったり、再度血液検査をしたりと、疲れました。

3日後、母と兄が来て、一緒に診察を受けました。

『血液検査を念のために、再度したんですけど腫瘍マーカー（CEA・CA-19-9・デュパン・エス

パン1）は、やや高いですね。超音波とレントゲンを見ると、膵臓全体が腫れてます。

3日程点滴して薬で様子を見ましょう。良くならないようでしたら、1度開腹手術をして、

細胞を直接取って調べた方が良いと思います。』

ハッキリしないことに、私はイラついていました。

「これだけ検査して、分からないなんて、おかしい。癌なら癌って、はっきり言ってください。」

『ん、実際に、取ってみないと、何とも言えないんだよ。なるべ

くなら、切らない方が、

良いし、薬で様子を見ましょう。』

こう言われてはみたものの、やっぱり私は、信じることは出来ませんでした。

かと言って、私が何か出来るわけではなく、指示に従うしかありませんでした。

携帯電話には、翔太から幾つものメールが届いていましたが、私自身、精神的に不安定で、

何て返事をしていいのか分からずに放って置きました。

彼に抱きしめてもらい、癒して欲しい自分もいましたが、治らないと思っっている私は、

先のことを考えた時、このまま別れてしまつのが良いと、決めていました。

しかし、そんな私の気持ちもよそに、次の日、翔太が病院にやってきました。

兄に電話をして、事情を聞いたそうです。

『どう、調子は？』

「まーまー。」

『何で、連絡、くれないの？ 心配しちゃったよ。』

「そう……。病気のこと、頭がいっぱいになっちゃって、翔太の事なんて、忘れてた。」

『そっか。大変だったな。俺、忘れられないように、明日から毎日、見舞いに来るよ。』

「いいよ。翔太に来られると、落ち着かなくて、余計、悪くなりそうだし。」

こんな病人、相手にしてないで、もっと可愛い、健康な人探して、結婚しちやいなよ。」

『遙、何言ってるんだよ。お前らしくないよ。今まで、辛い事有っても、吹き飛ばして来たじゃないか。』

病気がなんだよ。遙が、弱気になってどうするんだよ。』

「何も知らないくせに、無責任な事言わないでよ。兄貴に何て聞いたか知らないけど、どうせ、兄貴から言われた事、真に受けてるんですよ。兄貴が言ってる事なんて、嘘っぱちなんだから。」

それに、私、強くなんかない！ 吹き飛ばすなんて無理よ！もう、帰って。もう来ないで！」

『興奮させちゃった様だから、今日はこれで帰るけど、一人で頑張るなよ。』

俺も仲間に入れてくれよ。悲しいときは、一緒に泣こうぜ。じゃーまた来るから。』

それからというもの、翔太は、毎日来ましたが、私は、相手にしませんでした。

顔も見ないで、翔太に話掛けられても、そっけない返事だけを返して、

私から、話掛けることはしませんでした。

翔太は、そんな私の態度に、突っ掛かったりせずに、毎日、私の横に座り、

スポーツ新聞を1時間程読んで帰って行きました。

帰り際に、いつも私に、軽いキスを残して。

私も、このキスを避ける気にはなれなくて、ただ目をつぶり、じっとしていました。

この瞬間が、2人の気持ちを通じ合う唯一の時間だったのかもしれない。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第92話：二度の手術

点滴を始めて3日が経ち、針が抜かれて、ホッとしたのも束の間、その効果を見るために

3日後に、また検査です。

検査ばかりで、もう、うんざり。

でも、逃げ出すことも出来ずに、もしかしたら、少しは良くなっているかもしれない

なんて、甘い期待もほんの少しいだきながら検査の日を迎えました。

嫌な検査も我慢して、何とか1日が終わりました。

そして3日後、先生から説明があり、残念なことに点滴の効果は無い事が分かりました。

『手術をしましょう。』

カメラを入れて患部を見ながら、直接細胞を取って検査した方がいいでしょう。』

チューブを入れる為の穴を開けるだけなので、傷は痕にはならず、治るそうですが、

私は、手術をすることが、先生の口から告げられるとさすがにシヨ

ツクでした。

手術の日がやって来ました。

手術着に着替えて、麻酔を掛けられると、全ての思いは闇の中へと消えてゆきました。

麻酔から覚めると、切った所が痛くなって、じっとしていられなくなりました。

思わず手をお腹に当てようとしたところ、私の手を誰かが握っていることに気が付きました。

目を開いて、横を見ると、翔太でした。

『痛むのかい？ 今、看護師さんと呼ぶから。』

彼はそう言つと、コールボタンを押しました。

『頑張ったな。きっと良くなるからな。』

「うん。」 つい、私は、素直にうなずいていました。

5日後、母と兄を交えて、先生から説明が有りました。

『見たところ、全体がかなり腫れて、硬くなっていました。』

数箇所から細胞を採って検査をしたところ、膵炎と判断しました。

今後の治療ですが、点滴を続けて体力の回復を待つて、再度手術を行います。

炎症のひどいところを切除して、それにともなう十二指腸の障害を回避するための、

バイパス手術と、胆嚢と腸をつなぐ胆管のバイパス手術を行います。

」

「えっ？ また、手術するんですか？」

手術をすることになるとは思っていましたが、つい言ってしまいました。

『傷は、なるべく目立たないようにします。どうしても、やらなければならぬ』

手術なので、我慢してください。』

私は、この時の母と兄貴が、ほとんど発言しなかったのと、2人の表情が終始浮かな

いままだったことに、違和感を覚えていました。

2度目の手術は、前回と違って、大変そうな手術です。

「胸の他に、傷が出来てしまう。」そう思うと憂鬱な日が続きました。

そして、1週間後に、手術を行いました。

私自身は、眠っていたので、分からなかったのですが、

前回の検査のためのような手術と違い、長い時間の手術となりました。

目が覚めると、前回よりも激しい痛みが襲ってきました。

手を動かそうとした時に、前と同じく翔太が、手を繋いでいました。

『痛むかい？ 代わってあげたいけど、俺には何も出来なくて、ごめんな。』

「ん〜ん。」

あまりの痛さのため、それ以上は、言葉になりませんでした。

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。)

第93話：抗がん剤

手術後2週間が経ち、痛みも和らいできた頃から、点滴の種類が増え始めました。

毎日、暇な時間も増え、周りの事に色々と興味を持つようになりました。

その一つに、「どんな薬を点滴しているのだろう？」という気持ちがありました。。

点滴の袋や小瓶のラベルなどを良く見るようになりました。

ラベルの無い物や見えなくなっているものも有って、気になっていました。

手術をしてから、具合は良くなるどころか、手術の前よりも気分の悪い日が続く、そんなある日でした。

トイレから戻る時に、仲良しになった看護師さんに、ちょっと声を掛けようと、ナース

ステーションを覗いた時でした。

看護師さんが話しながら、巡回用のワゴンを準備していました。

話の中に私の名前が出たように聞こえたので、耳をそばたてました。

良く聞こえなかったのですが、抗がん剤という言葉が聞こえたような気もしました。

私が日頃から疑っているせいで、そう聞こえたのかもしれませんが、私は少し興奮気味になりました。

視力の良い私は、看護師さんの触っている物にも注意をしていました。

しかし、さすがに文字を読むことは出来ません。

そこで私は、看護師さんに挨拶をするフリをして、思い切って中へ入り、

スタスタと近づきました。

看護師さんは、点滴を準備していましたが、

「ge」と「b」の文字が、ちらつと見えた気がしました。

すぐに追い出されてしまいましたが、気になって仕方ありませんでした。

ベッドに戻ると、携帯電話を使って調べてみることにしました。

すい臓がんの抗がん剤を検索してみました。

色々と出てきました。

「ge」と「b」の文字があるので、見たイメージに近い物。

有った。これだ。

「gemcitabine」

私は、勝手にこれだと決めつけました。

少しすると、さっきのワゴンを押して、看護師さんがやって来ました。

看護師さんは、いつものように、おしゃべりをしながら、点滴の用意を始めました。

私は、気持が高ぶっていて、我慢出来ずにストレートで聞きました。

「ねえー、その薬、抗がん剤のゲムシタビンですか？」

看護師さんは、『違いますよー、抗生剤ですよ。』と、平然と軽く返しました。

その普通さに、そうなのかなという気もしましたが、

私は、悪知恵が働いてしまいました。

標的は、兄貴です。

早く見舞いに来い、兄貴。

しかし、標的にされたのが伝わったのか、この日に兄貴は現れるこ

とは無く、

来たのは次の日でした。

『具合は、如何ですか？ お嬢様。』

「兄貴、ちよつと話が有るんだけど。」

私は、重い身体に鞭を打ち、半ば強引に兄を連れて、廊下の端にある展望を楽しむため

に設けられたスペースに行きました。

都合良く誰も居ない椅子に腰掛けて、兄の顔をじつと見ると、私は問い始めました。

「ねえ、私に何か隠してることって、無い？」

『いや、別に無いけど。』

「それじゃー、昨日、私にゲムシタビンという薬が投与されてるって、分かったんだけど、

これって、抗がん剤だよね。一体どういうことなの？」

『何かの間違いじゃねえのか？ 誰が言ったんだ？ そんなこと。』

「私見たの。看護師さんが、この薬を使うところ。」

『看護師さんが、そう言ったのか？』

「ナースステーションで、準備しているところに行って、ゲームシタビンと書かれたラベル

を見たの。それで、携帯で検索したら、すい臓がんの抗がん剤だつて！」

『お前のじゃなかったんじゃないの？ 看護師さんが言ったわけじゃないんだろ？』

「看護師さんに聞いたら、顔色変えちゃって、返事もあたふたしちやってたよ。」

『おかしいなー、そんなはず無いんだけどなー。』

「いい加減にしてよ。私のことを気遣って、隠してるのは分かるけど、

そんなの、ちつとも嬉しくないよ。ちゃんと本当の事、教えてよ。」

兄の顔つきが変わりました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第94話：すい臓癌

『そっか。そうだな。遙に隠しても、ばれちゃうよな。』

それに、いつまでも、隠しておけないしな。』

兄は、頭を抱えて、少し考えているようだった。

そして、顔を上げると、私を見つめて、言いました。

『すい臓癌だよ。この前の手術で、取れるところは全て取った。

でも、すい臓を全部取るわけにはいかないから、残ってもいる。

だから、抗がん剤と放射線治療が主体になるだろうけど、諦めずに頑張ろう。

きつと良くなるよ。』

予想していた通りの兄の言葉でしたが、実際に聞いてみると、一瞬、心に穴があいたよ

うに、ポカーンと、時間が止まってしまいました。

そして、兄の言った言葉が、呑み込めたとき、急に悲しくなってきました。

「やっぱり、そうだったんだ。私、死ぬんだ。もう、死ぬんだー。」

私は、両手で顔を覆い、声を押し殺すように泣き崩れました。

『違う！ 遥は死んだりしない！ きつと、良くなる。』

兄は、両手で私の両肩を掴んで励まそうとしました。

でも、兄の言葉に、私を説得させるだけの力は、ありませんでした。

「良くなる訳ないじゃん。癌、残ってるんですよ。」

きつと、他にも転移してるんでしょう？

ねえー、私、あとどのくらい生きられるの？ いつ死ぬのよ！」

『何言ってるんだ！ お前は死ぬもんか。』

泣き崩れる私を、兄は、頭を包むように抱えて、背中をさすってくれました。

そして、何とか落ち着き顔を上げると、兄の反対隣には、翔太が座っていました。

『よっ！ 俺も付いてるから、一緒に頑張ろう。』

「翔太も知ってたの？」

『ごめん、お兄さんから、聞いて。正直、信じられなかったよ。』

でも、きつと遥は、負けずに頑張って良くなるに決ってるって、

そう思うことが出来たんだ。だから、一緒に頑張ろう。」

「どうして、良くなるに決ってるって、言えるのよ！

そんな簡単に、言わないでよ！

どれだけ、私が苦しんでるのか、解ってるの？

翔太に死んでゆく姿なんて見られたくない！

顔だって、変になってくるし、きっと、歩けなくなるし、どんどん弱って

自分で何も出来なくなるに決まってる。そんな姿、見られたくない。

翔太の心の中には、生意気で明るい、いつも笑顔の私でいたい。

だから、もう来ないで！

健康な彼女を見つけて、結婚して幸せになつて。」

『何言ってるんだよ。俺は、遙以外・・・』

私は、話をしている翔太を無視して、立ち上がり、病室に歩き出しました。

私の後ろで兄が、私に付いて来ようとする翔太を、なだめていました。

私は、その日からしばらくの間、翔太を見ることはなくなりました。

(つづく)
(登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第95話：再会

病室に戻った私は、死の恐怖と闘う毎日が待っていました。

身体の状態はとても辛いけど、手術をしたので、日に日に良くなっている。

思っている、いえ、そう信じたい私がいきました。

しかし、事実を兄から聞かされた今となつては、精神的にもきつく、手術箇所の痛みは、

弱くなつてきてはいるものの、全身の倦怠感は強く、全ての行動はスローモーション

となり、歩くのも手摺りに掴まってやっとの思いでした。

そして、日に何度か襲ってくる腹部の激痛と吐き気。

抗がん剤から来る具合の悪さも有るのでしょうが、身体が確実に悪くなっていることを

自覚させられてしまう毎日が過ぎて行きました。

こんな毎日を繰り返していると、時には、弱気な自分が顔を出して、頭の中でそのうち

動けなくなり、痛みの中で死んでいく自分をイメージするようになりました。

どう頑張っても、何をどうしても、逃げられない死の恐怖、気が狂いそうなくらい

悩んで、苦しんで、段々と明るさを失っていきました。

人と話をすることも、嫌になり、唯一、母だけが話し相手となりました。

来る日も、来る日も、母と思い出話をして、過ぎる日々。

そんな日が続いたある日、車椅子が病室に入ってくるのに気が付きました。

誰だろうと、ふと、見てみると、車椅子に座っていたのは、なんと隆志でした。

私は、声を失うほど、驚きました。

『よっ！ 遥。こんなところで何してるんだよ。』

早く元気になって、僕をバイクに乗せて、どこか連れて行ってくれよ！』

「隆志、車椅子で動けるほど、回復したんだね。良かったね。本当に良かったね！」

再会出来た喜び、車椅子で自由に動き回れるほどに回復していた驚

き、そして、

溜まっていたフラストレーションが弾けて、私の目から、大粒の涙が溢れました。

『車椅子が有れば、もう何処にでも行けるんだ。一時はもう、寝たきりかと思って、

絶望したけどな。遥が夢の中に出て来て、弱気な僕のほつぺたを叩くんだよ。

そんな弱虫は嫌いよってね。だから、頑張ったんだ。

遥も、きっと良くなるよ。僕がついてるよ。一緒に頑張ろう。』

「ん〜ん。きつと私は、もう駄目。日に日に弱っていくのが分かるもん。」

『何言ってるんだよ。僕だって、ここまで回復するのは奇跡だって、医者に言われたよ。』

もしかしたら、あの事故で死んでいたかもしれないし、意識が戻らないで植物状態のまま

まだったかもしれない。

ここまで回復したのは、遥のお陰なんだよ。

意識が戻らなかった時でも、暗闇の中で遥の顔だけが見えて、僕のことをずっと呼び続

けてくれたんだ。

隆志、早く帰って来て！って。

僕は遥を掴もうと、何度も何度も必死で手を伸ばしたんだけど、駄目で……。

でも、遥が手を伸ばしてくれて、僕がその手を掴めた時、意識が戻ったんだ。

だから今度は、僕が遥に手を差し伸べる番だよ。

遥を、絶対に放したりしない。

僕に起きた奇跡、遥にだってきつと起こるさ。良くなるに、決まってる。』

隆志が、手を伸ばして、私の手を握りました。

「ありがとう。そうだね。そうだよ。良くなるよね。

隆志が助けてくれるんだったら、きつと治るよね。

今まで、辛い事ばかりだったもん。

神様だって、助けてくれるよね。

分かった。私、頑張ってみるよ。」

『そうだ、その意気だ。頑張れ！ 遥。』

(つづく) (登場する人物・団体・場所の名称は架空のも
です。)

第96話：生きる力

次の日も、隆志は、来てくれました。

『前に一緒に暮らしていた、遥のアパート、今どうしてるんだい？』

「あ後は、また、私一人で住んでいたから、そのままだよ。」

『そーか、それじゃー、貸してもらってもいいかな？』

あそこからなら、ここまで近いし、毎日来れるから。』

「部屋は別にいいけど、毎日来るなんて、大変だからいいよ。」

それに、帰らなくていいの？ 病院とかは？」

『別にいいんだよ。家に居てもすることも無いし、リハビリにもなるから、平気だよ。』

でも、その言葉の裏に、「お前を一人にして置くと、心配なんだよ。」と、

言ってるのが聞こえてきました。

翔太には、会いたい気持ちと会いたくない気持ちとが競合していましたが、

不思議と隆志には、ただ会いたいと思う気持ちしかありませんでした。

2人に対する愛情の深さの違い？

恋愛期間の長さの違い？

考えてみると、私は、ずっと隆志に会いたかったに違いない。

色々な状況が、私の気持ちを押さえつけていただけ。

隆志には、弱っていく私の傍に居て、見守って欲しい。

出来るなら、隆志の腕の中で眠りにつきたい、そう思いました。

決して、翔太を愛していないわけではありません。

ただ、隆志との間には、生まれて来れなかった赤ちゃんの存在が、

強い絆となっていました。

それからというもの、私は変わりました。

ただ、ぼーっと、考え事をしていただけで、終わっていた毎日。

隆志と話していると、病気に立ち向かう気持ちになり、積極的に治療を受ける

ようになりました。

パソコンを持ってきてもらい、日記をつけたり出来るほど、気持ちも落ち着きました。

携帯電話で色々調べたり、遊んだり、時間が経つのを早く感じるようになりました。

もちろん、気になる病気についても、調べました。

なるほど、自分の置かれた状況も不思議と冷静に理解出来て、いたずらに怖がっていた

以前の私とは、違っていました。

しかし、精神的に立ち直った私でしたが、身体の方は、悪くなるのを待っては

くれませんでした。

死にたくない。心の底から、そう思いました。

何か方法はないの？

インターネットで、徹底的に調べました。

あてにならないものや、信じられないもの、馬鹿馬鹿しいものも笑い飛ばすことは出来

ませんでした。

癌が治る温泉や針灸、気功など、試してみたいものもありましたが、先生に聞くと、

今の私の状態では、自殺行為だと言われて、実行できませんでした。それでも、何をやっても、いつも三日坊主の私でしたが、

改善できる食べ物や病院でできることは、色々頑張っただけで、

でも、現実には容赦なく襲って来ました。

症状は、良くなるどころか、日を追うごとに悪くなり、合わせて放射線治療も行うように

なり、心も身体も、疲れ果てました。

「結局、神頼みしかないのかな。」

そんな弱気な自分がまた出る時もあり、人に助けてもらおうなんて日頃は考えずに生

きてきた私でしたが、

「助けて！ 誰でもいいから。治してくれるなら、何でもするから。

お願い！ まだ、死にたくない！」

心の底から、助けを求めている私がいきました。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第97話：永遠の命

病気が悪化しているのか、抗がん剤のせいなのか、身体を動かすのが苦痛にな

り、だいぶ弱って来ているのが分かりました。

やがて、一人で歩くことも出来なくなり、車椅子に乗り、母に押されて、1日1回、

屋上に造られたガーデンを散歩するのが楽しみとなりました。

病院の屋上の一部を利用して、学校の体育館ほどの広さに造られた散歩道。

外周に胸くらいの高さのフェンスが有り、自分で乗り越えようとでもしない限り、落ち

ないようになっていました。

草花だけでなく、私の足よりも太い樹木も何本も植わっていて、曲がりくねった散歩道

には、木製のベンチがあちらこちらに置いてありました。

よく考えなければ、ここが病院の屋上であることなど忘れてしまうほどリラックスでき

る場所で、入院患者の憩いの場となっていました。

健康なときにここを歩いて、ただ、退屈な場所ではなかっただろ。屋上ガーデン。

でも、造られた物と分かっている、陽に当たり、風を受け、緑の匂いを感じて、綺麗

に咲く花を見ることができ、今の私が唯一、自然と接することができる場所。

しかし、ここを訪れることのできる時間を、神様はそう長くは与えてはくれませんでした。

ある日、花壇を眺めていると、タンポポの種が風に吹かれて、飛んでゆきました。

「タンポポって、いいな。ああやって飛んで行って、別な場所でまた、花を咲かせて、

そして、また、飛んで行って、別な場所で花を咲かせて、終わり無く生きていられる。」

私は、母に呟いたつもりでしたが、隣のベンチに座っていたお腹の大きな30歳くらい

の女性が、私を見て話し始めました。

「人間だって、同じよ。自分たちの身体の細胞で、赤ちゃんが来て、その赤ちゃんが、

大きくなって、また、自分たちの身体の細胞で、赤ちゃんが出来るじゃない。

私、心臓の病気で、赤ちゃんを産むと死んじゃうかもしれないの。

妊娠してすぐに病気が分かって、主人やお医者さんには止められたんだけど、産むこと

に決めたの。

主人と私の間に神様が与えてくれた尊い命、私が生きたいからって、赤ちゃんを殺すこ

となんてできない。

それに、赤ちゃんは、私の細胞からできているんだ、私の一部でもあるんだって。

だから、私は、赤ちゃんの中でも生き続けるんだって。

そう思うと、死ぬことも怖くなくなって、反対に頑張ろうと思うようになった、

体力つけるように、毎日課題をこなしているの。』

「そうなんですか。大変ですね。でも、その考え方、私、解ります。私が、もし同じ立場だったら、やっぱり産むと思います。それが母のつとめですよね。」

サケのように、命懸けで卵を産む生き物だっているんですから。」

『ありがとう。分かってくれる人がいて、うれしいわ。』

永遠の命を手に入れたいなんて、言う人がいるけど、ある意味、人間は、永遠の命を、

手に入れてるんだよね。私の体は、母と父の細胞から出来たものだし、私の中に父と母は

生きている。そして、お腹の赤ちゃんの中には、主人と私が生きているんだって思うの。』

私たちは、すっかり仲良くなり、それから毎日おしゃべりをするようになった。

（つづく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第98話：婚姻届

澄み切ったある晴れた日、私は一人部屋に移りました。

それは、毎日来てくれる隆志が、私の兄に相談して決めたことでした。

この日、隆志がいきなり驚きの発言をしました。

『結婚しないか？』

「えっ？」

『あの時は、遥に幸せになって欲しくて、あんな風に言っただけ、今、こうやって

毎日会っていると、やっぱり僕は、遥のこと大好きだし、あの時一緒に、結婚式に

向かって、準備していた頃の楽しそうな遥の姿が蘇って来て、結婚式をすることが、

自然なことじゃないかって。

もしかしたら、遥もそう思っているんじゃないかと思えてきたんだ。どうか？』

「そーかー。そんなこと思ってくれたんだー。」

でもね、隆志と別れた後、翔太と付き合ってるんだ。

翔太には、隆志とは違う優しさが有って、日を追うごとにそれが分かってきたの。

翔太のお陰で、隆志のことからも早く立ち直れたし、プロポーズもしてくれたんだよ。

病気で入院してしまったから、結婚は出来ないけれどね。

だから、隆志とも結婚できないし、今更、後戻りは出来ないんだよ。

ー

その時、突然、ドアが開き、誰かが入って来ました。

翔太でした。

「俺のことなら、気にしないでいいぜ。」

私は、びっくりして、声が出ませんでした。

「もう来るなって言われたけど、それは、やっぱし、無理でさ。」

毎日来てるうちに、遥の兄貴とはもちろん、隆志とも会うようになって、

面会が終わった後に、色々聞いててさ。

遥が、望んでることって何かって、思うようになってさ。

そしたら、俺とじゃなくて、隆志との結婚式じゃないかって、思えた訳で。

アーツ、俺はいいんだよ。もともと、2人は結婚するつもりだったのは、知ってるし。

隆志があんな事故に遭わなかったら、遥に結婚してくれなんて言えなかったんだから。

ずるいのかもなー、俺って・・・。

そんなことよりも、こんな病気になっちまった遥に少しでも幸せになってもraitakute、

隆志に、その気があるか相談したんだ。」

隆志が、身を乗り出して、私の顔を見つめて、力強く言いました。

『僕は、遥と結婚したい。どんな姿になっても、遥のためなら、何だってする。』

死ぬほど愛してるよ。』

「私だって、隆志のこと、愛してるよ。だけど・・・。」

「だから、俺に遠慮は要らないって。ほら、これ。」

翔太がカバンから、紙を取り出しました。

婚姻届でした。

「2人でさつさと、書きな。」

翔太がドアから、出て行くと、それを待っていたかのように、2人が入ってきました。

親友の涼子と智子でした。

「おめでとー！ 後は私たちに、任せてね！」

私は、このめまぐるしい展開に付いていけなくなっていました。

「それでさー、ウェディングドレスなんだけど、どれがいい？」

私は、遥には絶対、これが似合うと思うんだけど、智子がさー、

これの方がいいって言うんだよね。ねー、どう思う？」

私は、何だか嬉しくなつて、2人と話し込んでしまいました。

隆志は、私の喜んでいる顔を見ると、婚姻届にサインと判を押して私に渡しました。

「えっ？ 駄目だよ。私、サインなんて出来ないよ。」

やっぱり、こんな身体じゃ、隆志のお嫁さんになんてなれないよ。」

『この紙は、遥が持つてて、好きにすればいいさ。』

だけど、結婚式はするからね。

遥のためだけじゃなくて、僕がしたいんだ。遥と結婚式を挙げたいんだよ。』

「ありがとう。でも、こんな私で、ごめんね。」

私の返事は、涙声になっていました。

『そんな遥だから、いいんだよ。』

隆志は、微笑んで部屋を出て行きました。

それから、しばらくの間、涼子と智子と楽しく話しました。

時間が経つのも忘れて、自分が病気で入院していることさえも忘れ掛けさせてくれました。

「それじゃー、貴子。いい結婚式、用意するからね！ またね！」

そう言うと、2人は帰りました。

皆が帰った後、すぐに私は、メールを打ちました。

相手は、もちろん翔太でした。

「今日は、どうもありがとう。」

翔太の気持ちを思うと、何て言ったらいいのか・・・。

でも、私のことを一番に考えてくれて、本当に感謝しています。

翔太と出会うことが出来て、本当に良かった。

そして、色々と、ごめんね。」

すぐに、返事は戻ってきました。

「お前の笑顔が、見れて本当に良かったよ。」

（つつく）（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

第99話：結婚式

その日は、スカイブルーの空に、太陽がまぶしい朝でした。

病院の屋上ガーデンに、用意された誓いの場。

そう、ここは、親友の涼子と智子が、一生懸命に準備してくれた、

私と隆志のための手作りの結婚式場。

進行役は、自慢のおしゃべりで、涼子がしてくれています。

沢山の花が飾られて、壇上には十字架が掲げられ、智子が得意の腕を振るいエレクト

ーンを演奏しています。

神父さんが、現れて、いよいよ結婚式の始まりです。

病院の入院患者さんやスタッフの方々が、沢山の拍手で、私たちを迎えてくれました。

夢にまで見たウェディングドレスを着て、兄に支えられて歩くバード・ジンロード。

立っているのもやっとの私でしたが、せっかくのウェディングドレスです、車椅子から

立ち上がり、1歩1歩ゆっくりと、松葉杖を着きながら神父さんの

もとへ。

車椅子の隆志と向き合い、誓いの言葉。

緊張の瞬間です。

神父さんが、口を開きました。

「中根隆志は、青山遥を生涯妻とし、幸せや喜びは共に分かち合い、悲しみや苦しみは共に乗り越え、永遠に愛することを誓いますか？」

『誓います。』

額に汗をかき、声が微かに震えています。

「青山遥は、中根隆志を生涯夫とし、幸せや喜びは共に分かち合い、悲しみや苦しみは共に乗り越え、永遠に愛することを誓いますか？」

「誓います。」

嬉しさのあまり、元気良く答えて、周囲の笑いを誘いました。

指輪の交換。

一緒に買いに行くことができず、インターネット販売で決めた指輪。中央にハートが彫っており、周囲にはV字カットが施されている私

のお気に入り。

そして、私が彼の車椅子の横に膝を着いて、人前で初めての熱い Kiss。

晴れて、私たちは、結ばれました。

兄が用意してくれた台に吊るされた本物の鐘の音が、天高く響き渡り、クラッカーが

次々と音をたてて、皆が作ってくれた紙吹雪のアーチとライスシャワーをくぐり、

拍手で迎えられました。

隆志が、お礼の言葉をしっかりと述べて、私が続きました。

この時、隆志は、私の耳元でささやきました。

『待たせて、悪かったな。』

そう言うと、さっと私の手を取り、指にダイヤモンドの指輪をはめました。

『けっして、お前だけ一人に、寂しい思いはさせないよ。』

「えっ？ 婚約指輪？ 何やってんだよ。順番、逆だよ。」

皆から笑いと拍手が沸きあがりました。

やっと貰えた隆志からの婚約指輪。

私は、とてもうれしくて、はじめてしまいました。

そして、1週間掛けて作ったブーケを思いっきり、青空に放り上げました。

ブーケは空高く上がり、太陽と重なり、魔法がかかったように光り輝きました。

前に同じ病室だった女子高生の友香ちゃんが、受け取りはしゃいでいます。

このガーデンで、お友達になった妊婦の亜実さんも、大きなお腹を抱えて、笑顔で

迎えてくれました。

母も兄も泣いて喜んでくれています。

隆志のお父様、お母様も、心に思うことはあるのですが、快く許してくれました。

こんな幸せなことはありません。

今日まで生きてこれて、良かった。

本当に良かった。

(つづく)
(登場する人物・団体・場所の名称は架空のもので
す。)

第100話：旅立ち

感動の結婚式を終えて、病院での新婚生活が始まりました。

隆志は、一日中病室に居るようになり、時には泊まっていました。

仕事をしている普通のカップルよりも、長く一緒に居られるので、ちよっぴり得をしたような嬉しい時間です。

しかし、そんな時間もいつまで続くのか、結婚式から2週間が経つ頃から、身体の具合は、急激に悪くなってきました。

日記を書くためのパソコンのキーを押す動作さえも、次第に辛くなり、日々書く時間が少なくなりました。

そしてついに、車椅子にさえ、乗ることが出来ない日がやってきました。

楽しみにしている散歩も、外の風に当たることも出来なくなりました。

ベッドの上で起きていることさえも苦痛になり、いよいよ自分の終わりも近いことを悟りました。

数日後、お腹の痛みも激しくなり、先生も察したのか、母と兄に最後に会わせたい人を、呼ぶように言っているのが、私には分かりました。

身体に力が全く入らずに、目を開けていることも出来なくなつて、ただ痛みに堪えて、呼吸も酸素マスクをしてやっとしている時、聞きなれた声が入ってきました。

『遙、俺、悔しいよ。海では助けることが出来たのに、今度は、何をどう頑張つても助けてあげられない。』

その声は、紛れも無く、翔太でした。

「きっと、自殺なんてしようとした、バチが当たったんだよ。

あの時死んだと思えば、悲しくなんて、ゼーン、ゼーンないよ。

翔太に助けてもらつて、長く生きられたんだから、感謝してるよ。

翔太のこと、好きになる事だつて出来たし、幸せな将来を夢見る事だつて、

出来たんだから。　ありがとう。」

翔太に聞こえたかどうか分かりませんが、精一杯答えました。

もう声を出すことも出来なくなりそうです。

すると、私の手を握り締める手が在りました、この感触は、隆志です。

私は、頑張つて握り返しました。

彼は無言でした。でも、彼との間には、言葉は要りませんでした。

母と兄の手の温もりも感じました。

「おかあさん、ごめんね。でも、産んでくれてありがとう。」

声になったかどうか分かりませんが、母が、うなずいてくれていたように見えました。

涼子や智子の声も聞こえました。

でも、もう苦しくて、返事をすることも出来ません。

意識が段々遠のいて、いつかの海で溺れた時と同じ、波の音と心臓の鼓動の音が聞こえてきました。

そして、翔太や母や兄の声が、徐々に聞こえなくなりました。

「あつ！ 隆志の声がしない。隆志！ どこ！？ 隆志！」

すると、姿が見えなくなった隆志の声が不思議なことに、はつきりと聞こえてきました。

『遙一人だけに、寂しい思いはさせないよ。』と。

まさか！

私の脳裏に不安が広がりました。

でも、もうどうすることもできません。

「お願い、翔太、隆志を止めて！」

ただ私は、心に念じるだけでした。

すると、真っ白な世界が広がり、小さい頃からの思い出が次々と浮かび上がりました。

暫くすると、明かりは消え、すべては、暗い闇の中へ吸い込まれました。

とうとう、27年の生涯を閉じる時がやって来たようです。

辛いこと、苦しいことが、ある度に、どうして生まれてきたんだろう。

なぜ、私ばかり、神様はいじめるんだろう。

もう、死んでしまいたいと、何度も思いました。

でも今は、違います。

私よりも、大変な思いをしている人も、幸せな思いをしている人も、沢山います。

周りを見ていては、自分を見失います。

大切なのは、自分なりに精一杯生きること。

今の私は、隆志に愛されて、結婚式を挙げることもでき、私の周りには、一緒に笑ったり、悩んだり、私のために、泣いてくれる人だっている。

少し早く命の火が消えるだけ。

精一杯生きた充実した一生だったと思うことが出来ます。

「隆志……。」

皆の見守る中で、遥は静かに息をひき取りました。

ただ、そこには、隆志の姿は在りませんでした。

翔太が、気が付きました。

「隆志は？ 隆志は何処に行った？ まさか！」

翔太の脳裏に、結婚式を挙げた屋上から飛び降りる隆志の姿が浮かびました。

翔太は、屋上に急ぎました。

隆志は、遥の後を追って死ぬ為に、上半身しか動かない身体で、病院の屋上ガーデン

のフェンスをよじ登っていました。

「何やってんだよ！ そんなことして、遥が喜ぶと思うのか？

遥の分も俺たちは生きるんじゃないのかよ！」

「放してくれ！ 遥が居ないのに生きていても仕方ないんだ！

辛いリハビリにも耐えて、頑張ってここまで回復して来れたのは、

遥が居てくれたからなんだ！

遥の居ないこれからなんて、考えられない。」

「じゃー、お前が死のうとしてるのは、死んだ遥のせいなのかよ！」

「違う！ そうじゃない！」

「そうだ。遥は、お前が、後を追ってくることもなんか望んでないよ。

もし、お前が死んだら、きっと自分が死んだからだと悲しむに決まってる。」

分かるだろ？ お前だって本当は分かっているに決まっている。

だって、遥のことはお前が一番知ってるんだから。

遥が選んだのは、お前なんだから。

もう止めようぜこんなこと、もっと生きようと頑張った遥が怒ってるぞ。」

隆志の腕から力が抜けました。

「そうだな、遥と結婚したんだものな、遥の姿は見えなくても、

俺の人生は遥と一緒になんだよな。死ぬことなんて考えずに、

バイクでかつ飛ばしていた遙のように、前だけ見て突き進まないとな。」

「そうだ。そうだよ！ ほらあそこ、遙が見てる。」

翔太が指さした空には、バイクで疾走している遙の姿に似た形の雲が流れていました。

（おわり） 最後までお読み頂きまして、ありがとうございました。

（登場する人物・団体・場所の名前、名称は架空のものです。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649c/>

胸の傷と心の傷

2011年9月27日20時51分発行